初めての英国:発見と確認の旅(1983年夏)

樋口陽子

はじめに

英語教材には、当然のことながら、アメリカやイギリスの文化・歴史・風土・事物を扱ったものが多い。アメリカについては、過去2回の3年3カ月にわたる滞在の記憶や類推が、教える助けになっている。しかし、英国の土は踏んだことがなく、英国については、実体験に基づかない伝聞の知識によって教えなければならないことにためらいを感じていた。実地見聞によって英国の人間と自然に関わる言語文化を少しでも確かめることができれば、より自信を持って授業に臨めるのではないか、と考えていたところ、幸運にも、1983年夏、安倍能成記念海外研修基金により、8週間の研修を認めて頂くことで、願いが叶えられた。快く研修をご許可くださった安倍基金と女子部科長を初め教職員の方々に、厚く感謝申し上げる。

これは、そのときの「発見と確認」の記録である。8月1日から8月6日までのリーズ大学におけるブロンテ研究会については、『女子部論叢』第5号に載せたので、今回は省かせて頂く。第6号発行の際には、ケンブリッジ大学英文科に客員研究員として滞在中であったため、この度、第7号に、残りの7週間分を掲載させて頂くこととなった。10年近くを経た間に英国の諸事情も変化し、私も5回渡英し、付記すべきことも多いが、今般はほぼ当時の体験記録(1983年11月24日院提出)とさせて頂きたい。駆け足旅行者の目と心をよぎったものの日記体印象記に過ぎず、書き方も不統一なことをご寛恕頂ければ幸いである。拙い報告書に特別のお言葉を賜った磯辺忠正前院長には、心から御礼申し上げる。この研修の恩恵を、学生生徒に還元するのが、私の務めと心得、今後一層研鑽に励む所存である。

7月7日(木) 晴

午後5時40分発キャセイ451便で成田を発つ。雲海と夕日が美しい。タイペイと香港に寄る。香港の夜景が、これほどきれいとは!とても親切なステュワーデスに恵まれ、幸先良く感じる。寝込んでいるところを、Bahreinで起こされた。香港の朝6時15分のはずが、真夜中で真っ暗だ。午前1時15分。香港からは、もう日本語放送はない。一人旅のこととて、アナウンスがあると、必死で聞かなくてはならない。英語と中国語とアラビア語らしい。

成田を発って22時間以上乗っただろうか。7月8日(金)午前7時30分に、ロンドンン郊外のGatwick空港に着いた。入国審査も税関もフリー・パス。人の流れに乗って、ひとりでに出口まで来た。トラベラーズ・チェックをポンドに交換する。児玉先生のお心尽くしの小銭もあって安心。バス、汽車、タクシーなどの表示があり、迷ったが、汽車で行こう。いよいよイギリスの生活が始まる。

汽車はあまり小綺麗ではない。驚いたことに、ドアは手動で、それも外側からしか開かない。内側から小窓を下げ、外へ手を伸ばし、ハンドルを動かして開ける。日本には、もはや手動のドアはないであろう。客席は、4人差し向かいの座席。空港近くは信越線の沿線風景に似ていたのだが、次第に家が多くなってきた。家は赤い煉瓦造りで、屋根には、煙突が林立している。アパート群が増えてきた。『メリー・ポピンズ』は、このあたりを

舞台にしたのだろうか。本当に驚くほどのchin－chimneyの群れ。まだ実際に使われているのだろうか。この煙突群は、ロンドン到着第一番目の「発見と確認」であった。

Victoria Stationは、（現在ではすっかり改装され、明るくモダンだが、この年にはまだ）薄汚く、雑然としていた。ロンドン到着の陶酔と当惑にお構いなく、朝の通勤客は全く日常的に歩いている。地図を買い、駅の表示を眺め、どの地下鉄にどこから乗るのか確かめて、ようやくKing's Crossに着く。そこから、かって大阪駅と梅田駅で苦労したように、地上に出たり、地下に潜ったりを繰り返して、やっとSt. Pancrasの列車乗り場へ。切符はすぐに買え、汽車も待たずにすんだ。2等車の橙色の布張りの座席は、あまり清潔そうではないが、テーブルを挟んで、食堂車のように、ゆったりした4人掛けである。がら空きなので、テーブルに地図を広げる。汽車の乗降口には、押し入れ半畳分ほどの大型荷物用の荷物置き場がある。大きな荷物はここへ置いて、乗客は手回りの小さい荷物だけ持って座席にいるということは、日本を発つ前に注意されたほど、イギリスには、置き引きや盗難はないのではないか？この後も注意して見ていたが、荷物置き場には、スーツケースからチェロまで置かれていて、誰も警戒する様子もない。2時間30分でSheffield駅に着いた。

駅の公衆電話で、サマースクール本部に電話をかけ、これから2週間滞在することになるお宅のお名前と電話番号をお聞きし、Mrs Clammerへ電話を入れた。今、赤ちゃんが寝ついたところなので、タクシーを拾ってきてください、とのこと。ロンドンと同じ黒塗りのズングリムックリタクシーに乗る。車内は随分広い。「着いたよ。」と言う声に、見ると、小さな可愛い坊やが、家の張り出し窓に顔をくっつけて、一心にこちらを見つめていた。この素晴らしい歓迎に、今後の滞在への危惧は、一瞬に吹っ飛んでしまった。入り口に、若いママが現れた。一目で、うまくゆきそうな予感がした。

living－drawing roomで、コーヒーをいれて、旅の疲れを労ってくださった。この子はThomasで、3歳。今日はAkikoが来るというので、朝からずーっと、まだか、まだか、と待っていたんですよ、とおっしゃる。そんなに待っていてくださるとは、思いがけなかった。赤ちゃんはElizabeth、まもなく1歳になる。幼いお子さん二人を抱えて、その上に2週間も泊まり客を迎えるのはさぞ大変だろう、というのが、私の感想だったが、Carolは、苦労どころか、嬉しそうにしておられた。Mr Clammerは中学の地理の先生で、まだ帰宅されてない。お夕飯の支度のお手伝いを申し出たが、「少し休んでいらしたら。」との言葉に甘え、3階の部屋に案内されて、ちょっと一休み。と思ったが、"Akiko, dinner's ready." というTomの可愛い声で起きたら、8時であった。4時間眠ったことになる。

Richardは、私のイギリス人に対する偏見を一目で覆した。アメリカ人に比べて、一般にイギリス人は落ち着きがあり、きまじめで、あまり笑わないのではないかと思っていたのだが、カーリーヘアの彼は、鼻の下にチャプリンより少し多くひげを蓄え、大声で実によく笑う。顔が笑っていないときでも、目はいつも笑っている。ジーンズにTシャツ。若いのに、社会科の主任だ。学校は、まだ創立数年目で、校舎や設備は新しい。二人ともThomas Hardyの故郷の出身で、ハイスクールの同級生同士。Carolは、大学ではハーディを専攻し、しばらく夫とは別のハイスクールで教えていたのだが、子供が生まれて退職し、今はシェフィールド大学でインド文学の聴講生をしている。論文が書きかけで、数日中にタイプしなくてはならないそうだ。ずいぶん北の方へ来たっちゃったわ、と笑う。（あれからほぼ十年後の今、一家はウェールズに越し、キャロルは大学から奨学金を得て、まもなく修士号を得る。）

7月9日(土) 晴

8時に目覚める。時差ぼけもなく、さして疲れも感じない。brochureでは、今日から開講となっていたのだが、実際は明日からとのこと。午前中、キャロルの買い物について歩き、郵便局で絵葉書などを買った。日本の郵便局と違い、町の小さな郵便局は文房具店や雑貨屋も兼ねていて、カード類から飴まで売っている。

日本人の朝食というものを食べてみたいとの要望に応え、健康食品の店でお豆腐とお味噌を買い、八百屋で巨大な茄子を買った。鮮魚や干物はない。

クラマー家は、ダウンタウンからかなり離れた市内の中級住宅街の一軒。二階の上に屋根裏部屋の付いた石造家屋が、街路の両側に、隙間なく、びっしりと並んでいる。今日は土曜日なので、通り二つを隔てた下の公園では、上下とも白いユニフォームでクリケットをやっていた。クリケットは、日本では見られない。先週の日曜には、ここでhorse showが行われたそうだ。かなり広いので、フットボール(ラグビー)の練習もできるし、乳母車を押して歩くお母さんもいる。遊歩道や花壇のベンチには、若いカップルや、犬を連れた老人などが、気持ちの良い夏のひとときを憩っていた。

シェフィールド市はClean Air政策のお陰で、ヨーロッパ中でも名のある美しい都市に変貌した。ナイフなどの刃物で栄えた町であったが、日本の食卓用金属食器刃物類の進出によって、この産業は落ち目になり、その代わりに、周辺の美しい自然を利用した観光都市・国際会議開催都市として、有名になってきている。南はDerbyshireに接し、北はYorkshire,市自体はSouth Yorkshireに属する。Sherwood Forestも、すぐ南にあって、行ってみたかったのだが、今回は暇がなかった。(3年後に連れて行って頂いた。)西側をPennine Rangeが走る。

午後、リチャードの運転で、皆でthe Peak National ParkとDerwent Damへ行った。ペニン山脈は、山脈というよりも丘陵地帯に近い。平地の中で、小高い丘陵が続いている。the Peakと呼ばれる所は、ちょっとした岩場で、鷹取山のように、大勢がロッククライミングの練習に余念がない。この辺り一帯はthe moorと呼ばれ、heath/heatherに覆われている。ブロンテ姉妹と深くかかわるヒース/ヘザーの「荒野」(heath/moor)というものも、ぜひ見たい物の一つであった。どれほど荒涼としたものなのだろうか。ヒースは這松に似た小灌木で、花はほとんど咲き始めていなかった。原野が、うねうねと連なり、まだ緑色の起伏には、羊が放牧され、まことにのどやかな田園風景である。放牧場はstone wallsで仕切られている。木々が点在する。まさに、イングランドの田園の風景写真そのままである。シェフィールドは英国第4の都市だが、すぐ郊外に、このような自然が広がっているのは、素晴らしい。リチャード曰く、「この道が、Rochesterが帰宅したときに落馬して、Janeに初めて会った道だよ。」えーっ?ジェインは遙か彼方の、自分とは切り離されたフィクションの世界の話であった筈。それがいきなり現実となって迫ってきた!別世界の外国文学として、言うなれば勉強の対象として読んでいたものが、突如、身近の現実になった。小説と私を隔てていたものが、消えたと感じた。Thornfieldのモデルが本当はもっと北方にあるのだという予備知識を忘れさせるほどのパンチだった。

ピクニック場の駐車場に車を停め、少し歩いてダムへ行った。ダムの下は、buttercup-sprinkled fieldである。イギリスの詩や童話によくあるキンポウゲのちりばめられた原。想像はしていたのだが、ぜひ見たい光景のひとつであった。イギリスへ着いて半日だというのに、積年の願いが三つも叶えられてしまった。キャロルとトムとベスは下の道を、リチャードと私はダムの眺望のきく山の道を、駐車場へと戻った。トムは、トラック屋台の

アイスクリームを食べていた。アメリカや日本と同じだなあ。帰路は、川に沿って、国立公園を走らせ、車を停めては、素晴らしい眺めに見入り、カメラのシャッターを押した。一家４人の写真も撮らせていただく。「いつも誰かがシャッターを押すから、家族全員の写真は滅多になくて、」と喜んでくださった。

とある村に差しかかり、村のcommonの片隅のwell dressingで止まった。「泉の花びら装飾」とは、異教の昔からあったもので、ペストの流行した頃に復活した習俗だそうだ。共有地の清らかな水への祈りと感謝を込めて、聖書の話や聖人の事跡を、粘土板に無数の花びらを張りつけて描き、井戸を装飾するものである。ここのは高さ２メートル、幅１メートルくらいの大きさだった。シェフィールド及びダービシャー周辺に、春から秋にかけて多く見られるそうである。〔写真１〕

７月10日(日)　晴

セミナーは10時に始まる。リチャードがMeakin家まで車で送ってくださった。低い石塀をめぐらし、前庭の芝生には色とりどりの薔薇が乱れ咲く小綺麗なお宅を会場に、ご夫妻でセミナーを主催しておられる。

参加者38人は、合衆国14人、オランダ５人、ドイツ５人、カナダ４人、フィンランド２人、イタリア２人、スエーデン、ノルウェー、フランス、オーストリア、ベルギーから各一人と私である。短大を定年退職されたご夫婦、ハイスクールや成人学校の先生、主婦、大学生、高校生兄妹など、さまざまだ。

全体を二つのグループに分け、それぞれの日程表が配られ、ミーキン夫妻から今回の講習の趣旨説明があり、グループに分かれて自己紹介をする。各国のBritish Councilでパンフレットを見て応募した方が多い。日本大使館文化部もブリカンの広報活動の熱心さを学ばなくてはいけないだろう。

昼食となる。応接室の大テーブルに載った十種類以上のお料理から、ヴァイキング式にたっぷり取り分け、各自レモネードと一緒に裏庭の芝生へ持って行き、円形に並んだデッキチェアに座った。こちらでも薔薇が満開で、芝生の青さに映える。今後、昼食は、毎日このスタイルである。コックを雇って作るレストラン風料理は、なかなか凝っていて美味しい。

午後、バスでNorton郊外のOakes Parkを訪れた。15世紀以来、Bagshawe家が住み、Elizabeth Bennetとも関係があるとのバグショウ夫人の説明を聞く。子馬の遊ぶ広々としたmeadowと、カンスタブルかゲインズバラの絵にあるような大きな枝ぶりの樫の木。薔薇の花壇。大邸宅の石壁を屋根まで這い上がるクレマチス。壁掛け類で豪華に飾られた客間、箪笥やベッドなどの美しい調度品、ヴィクトリア朝風の子供部屋とさまざまなお人形たち、食堂など、飽きることがない。

暑い日だ。バス(double dekker)に乗って帰る。４ペンス(15円)。日本では考えられない安さだ。平均収入が同じとすれば、だが。イギリスの経済状態は良いとは言えない。(かっては800円だったポンドは、1983年夏、360～380円強だった。1993年２月には、240円ぐらいで、６月には170円ほど。日本経済の発展が実感されるが、反面、日本人の頭には金しかなくなり、もっと大切なものへ心を向けることができなくなっているのが嘆かわしい。) 乗ってから車掌に払って、小さな券を貰う。降りる時に、それを降車口の箱に入れても、持ち帰ってもかまわない。空いているので、立っている人はいない。(立つのは５人までという規則がある。)Hunter's Barから歩く。昔ここにbar (横木の出入り口) が

あって、狩人がここまでは来ても良い、という場所で、今も記念に円形緑地帯が残してある。

トムが何かしらしでかし、ベスがmessyでよく泣く賑やかな夕食の後、リチャードが子供達を寝かしつける。キャロルと私は台所の後片付けをする。それからが大人の時間だ。この後2週間、居間兼客間でコーヒーを手に、私がその日のlectureの話をしたり、見学旅行の日には、買った絵葉書やパンフレット類を見ながら行った先の話をすると、リチャードとキャロルは、いろいろ気づいた事や、知っている事を言ってくださったり、翌日のtripで知っていた方が良いことを教えてくださったり、手持ちのパンフレットを貸してくださったりした。Slowcome(猫)も名のとおりノッソリやってきて、仲間に割り込み、楽しい語らいが弾んだ。2日目の今日、もう何年も前からの友人のように心が通い合ってしまった。

7月11日(月) 晴

9時30分より、Mr John HaffendenによるPride and Prejudiceの講義。ストーリーを知っていたので、辛うじてついていったが、聞くことに非常に骨が折れる。アメリカ人など英語が母国語の人達は、実によく発言する。オランダ人も教師の人達は、ほとんどnative speakerと同様に達者だ。日本で英語の教員をしているなどと告げるのは、恥ずかしい。Jane Austenの特質、関心、主人公及び登場人物について、また、家族と社会、教育観などについて話し合った。

午後は2時からMr Neil Robertsにより、Ted HughesのRemains of Elmet。この詩集は、日本ではどうしても入手できず、北沢書店からは、「目下印刷中」という返事を貰っていた。その幻の写真入りの美しい詩集が山積みで用意されていた。桂冠詩人テッド・ヒューズは自殺した閨秀作家Silvia Plathの夫である。

写真は美しく撮れている。しかし、被写体は、必ずしも見て快いものばかりではない。自然と文明の力、破壊力。否定的で、悲観的で、希望のない、Godと対立するCreatoress。テーマは、狐、狼、鳥、鱒、カマスなどの生き物から、煙突、工場の廃墟、石塀。ブロンテに関する"Emily Brontë"や"Haworth Parsonage"や"Top Withens"といった詩と写真の情景は、後日実地を訪れて、なるほどと思った。昨日買って、夜に目を通しておいたのだが、詩は難解である上に、久方ぶりに英語の講義を筆記するのは、また別の苦労であった。　午前と午後にcoffee breakがあり、コーヒーか紅茶とクッキーで一休み。一旦帰宅して夕食。

午後7時30分、映画Jane Eyreのために、再び集まった。Susanna York主演の名画であるが、原作をかなりカットしてある。

終わってから、皆で歩いてパブへ行った。パブというのも、ぜひ行ってみたいものの一つだったのだが、なんということはない。ごくありふれた飲み屋という感じである。皆、思い思いに注文する。何を注文したらよいのかわからない。ミーキン氏に、「最も伝統的でイギリス的なもの」は、gin and tonicと教わり、それを頼んだ。甘口で口当たりがよく、皆と一緒でいい気分になり、たちまち空けてしまった。ミーキン家でお手伝い兼下宿人兼学生の女の子が、どうしても私にbitterを奢るといってきかず、一杯持ってきてくれた。名のとおり苦いビールだ。とぐろを巻いているうちに、軽い一日の疲れが出てくる。数人一緒にミーキン氏の車で送っていただいて帰宅した。イギリスは、サマータイム採用で、9時半ごろまで明るいのだが、（これも大発見だ！）さすがに夜の帳が下りていた。

7月12日(火)　晴

9時に出発。Haworthは鉄道でKeighleyから更に奥に入る非常に不便で寂れたヨークシャーの奥地と聞いていたので、バス旅行は願ってもないことである。

Hebden Bridgeの町に入るとまもなく、石造りの三つのアーチを持つOld Packhorse Bridge(1510)を左手に見て、Church of St. Thomas à Becketに着く。この教会は1256年頃に建てられたが、今はruinになっている。「廃墟」とはいっても、初めて見る廃墟は物珍しい。英文学史上の人物でしかなかったトマス・ア・ベケットが、急に身近になった気がする。1847年の嵐で塔の西側が壊れたので、Old Churchに隣接してNew Churchが建てられた。教会の中で、coffee & cookiesのサービスがあり、受けたらdonationを求められた。無料のサービスはないものと確認。Heptonstallには、贋金作りDavid Hartleyの墓もある。近くには、テッド・ヒューズのお墓もあるそうだ。

丘の上から谷間にかけて、数段にわたって、ヴィクトリア朝時代に使われた羊毛工場が望見される。この辺り、半径2マイル以内をみれば、産業革命の全てがわかるといわれている。Shirleyの主人公Robert Mooreのモデル、Luddites に焼き打ちされたCartwrightの工場も、この中のひとつだ。

山を越え、ハワースへ着いた。駐車場からthe Brontë Parsonage & Museumへ続く道は、BRONTE ST.とある。牧師館の入り口には、30人ほどの列ができている。ジョージ王朝風の建物は、写真で見覚えがあったが、周囲の環境は、来てみなければわからない。

一階のRevd. Patrick Brontëの書斎には、姉妹愛用のcottage pianoがある。譜面台に載っている楽譜に、後年関わるかもしれないとは、この時は知る由もなかった。居間兼食堂には、Emilyが息を引きとった青いソファ。その上に、George Richmondの有名なCharlotteの肖像画。奥には、シャーロットの夫になった副牧師Revd. Arthur Bell Nichollsの書斎と台所がある。二階に上がると、ブロンテ師、シャーロット、エミリの寝室、Branwellの寝室兼アトリエと女中部屋。本来の牧師館はこれだけであるが、建て増された新館展示室には、聖書、書籍、シャーロットの結婚衣装、帽子、靴、ロンドンへ着て行った服、刺繍習作、アクセサリー、十二使徒の戸棚と食器などの家族の遺品類。階下はBonnell Collectionで、草稿、初版本、少女期の切手大から葉書大の手書き本、絵、書簡類、エミリの髪の毛で編んだブレスレットなど。記念図書館は会員にのみ公開されている。売店で絵葉書を買う。私の学生時代は、近ごろのように学生が気軽に海外旅行のできる時代ではなかったが、シャーロット・ブロンテを修論に選んだので、一度は訪れたいと思っていた。念願が叶って感無量である。牧師館記念館は1893年の開館なので、1993年6月には、盛大な100年祭が開かれる。How I wish I could be there!

牧師館とは墓地を隔てて表通りに面しているハワース教会の石段に腰掛けて、キャロルの心づくしのpacked lunchを食べていると、高校生ぐらいのおもしろそうな男の子たちがやってきて、向こうも興味ありげに1メートルほど離れて同じ石段に腰掛けたので、話しかけてみた。上半身裸でパンクの土地の子たちで、自分たちの髪形が気に入って入る。一人は頭の中央を縦に5～6センチ立てて残し、あとは剃ってある。もう一人は、カットは普通なのだが、後ろの髪を一房15センチぐらい長く伸ばして、そこと前髪だけは金髪で、ほかは栗色。奇抜なヘアスタイルはロンドンだけかと思っていたら、こんな辺鄙な田舎にもいて、嬉しい。「二色のうち、どっちが本当の髪?」と尋ねたら、「両方ともボクんだよ。」と、答えが返ってきた。腹ごなしに、ブランウエルを偲んで、Black Bullで一杯。

午後はTop Withensへ往復6マイルだが、Ponden Hallへ寄るので、10キロ以上歩く

予定だ。足に自信のない面々はバスに残って近所の散策。

ミーキンさんの案内で、ヒースの咲き始めたばかりの、薄緑の上に刷毛でピンクをぼかしたようなムアを歩き始めた。『嵐が丘』から想像していた荒涼として寒風吹きすさぶ荒れ野とは異なり、真夏の霧ヶ峰のようだ。低いなだらかな起伏がうねうねと果てしなく続き、歩けど歩けどヒースの波打つなだらかなうねりまたうねりで、小屋はおろか樹木1本すらない原野は、本来は湿地だが、200年来の暑さでカチカチに固まっている。汗が流れる。木がないので木陰もない。帽子があれば！１メートルほどの石灰岩の石塀が原野を仕切り、羊も暑いのかその日陰に身を寄せている。“stile”も“hedge”も“stone wall”もよく小説に出てくるが、初めて実物を見て確認し、胸のつかえが下りた。途中からJackとDavidとDrothyが近道に見えるから路でないムアの中を歩くと言い出した。

ついにTop Withensにたどり着いた。リチャードも言っていたように、これはEarnshaw Homeとは無関係な百姓屋の廃屋なのだが、トポグラフィーと雰囲気からモデルとして名所になり、真鍮のプラークに由来が記されている。HeathcliffとCatherineを象徴しているような２本の樅の木もお誂え向きだ。後年、易しく書き改めたWuthering Heightsをベイン先生が教材に選ばれ、分割授業で教えることになったとき、この折の体験もどれほど役に立ったか、測り知れない。Joice, Inge, Ulrike, Oliver, Sabine, Joke, Joan, Mai, Riet, Gunillaたちみんな、へたりこんだ。羊が数頭やってきてねだる。長い角のある大きな雄にチーズをやったら、鼻をこすりつけて食べ、またねだる。鹿と同じで、突かれそうでちょっとこわい。毛が暑苦しそう。〔写真２〕

例の３人はまだ到着しない。裏手の小高い丘に登って見晴らすと、地平線は限りなく柔らかい線で大空と大地を分け、淡灰色の石塀の不規則な筋がヒースの荒れ地を区切っている。“infinite”(果てしない)という語が実感となった。農業に適さないという意味で荒野だが、本日は“wuthering”ではなく、静かに晴れ渡った“heights”である。デイヴィッドに続いてヨウク到着。ミーキンさんは高齢のドロシーを探しに行かれ、Brontë Bridgeで追いついた。疲労困憊して横になったきり動けない彼女に、サンドイッチの容器のパックで小川の水を汲んであげた。「その水は毒だよ。」というミーキンさんの忠告にもめげず、皆もそのパックでしゃくっては飲み、カラカラの喉を潤した。昨日、あまりの暑さに、ベビーシッターに来たキャロルの友人に、“I sweat.”と言ったら、“Horses sweat; men perspire; and ladies just feel the heat.”なのよ、とたしなめられたが、やはり今日も“I sweat.”だ。左折する。ドロシーは元気になったが、足元が覚束無いので、cowslip-sprinkled fieldの間の石ころ路を、ミーキンさんと両側から支えながら歩く。私は道々、「ナイチンゲールはどこで聞けるの？」といった難問でミーキンさんを困らせた。ポンデン・ホールまであと15分。広々とした貯水池はちょっとした湖で、子供達が泳ぎ、ボートを漕いでいる人もいる。ドロシーはバスへ戻った。

ポンデン・ホールは山の中腹にある17世紀の農家で、ブロンテ姉妹は、よく本を借りに来たそうである。Wuthering Heightsの“Thrushcross Grange”のモデルの一つといわれる。現在は、来訪者にweavingの実演を見せ、レストラン兼ティールームを営業し、宿泊もできる。入り口を入ると大きな台所だ。太い梁が剝き出しの天井の下の炉では、大串が回転する。階下の部屋らしい部屋は、食堂兼客間兼居間の１部屋だけで、ここで家族がくつろぎ、来客をもてなす。紅茶とスコーンがふるまわれた。初体験のスコーンは英国特有のおやつで、パンとクッキーの中間のようなもの。(近年は東京のデパートでも見かける。)疲れも癒えてバスへ戻った。

7月13日　晴

午前はWuthering Heightsで講師はMs Shirley Foster。一般のヴィクトリア朝小説とは異なる理由、CathyとHeathcliffの性格、関係、及び道徳的評価、中心となるlove & passionについて、そのliterary heritageについて、近親相姦的要素、CathyとEdgarとの関わり方、二代目の恋愛、語り手NellyとLockwoodについてなどを話され、全員で討論した。昨日訪れた牧師館と荒野が、『嵐が丘』の背景を鮮やかに浮き出させてくれた。

午後はColeridgeのChristabel, Kubla Khan, The Ancient Mariner, Frost at Midnightを取り上げて講釈し、加えて、ロマン主義の六つの特質や、コーリッジとワーズワースの比較などを話された。『クブラ・カン』については、昨春の日本ロマン派学会で、上島建吉先生の卓抜な講演を聞いた。『老水夫』も、今春別の講師の講義を聞いた。『クリスタベル』も読んではある。一番短い『真夜中の霜』が最も難解だった。

クラマー家で夕食を認めた後、キャロルに車で送られて、サマースクールの皆と7時半からCrucible Theatreで84 Charing Cross Roadを観た。Helene HanffとFrank Doelの1949年から1968年にわたる約20年間の文通を、James Roose－Evansが脚色したものである。作家ヘレン・ハンフがニューヨークからロンドンのチェアリング・クロスにあるMarks & Co.書店のフランク・ドウルに書籍を注文した発端から、68年フランクの死後、71年にヘレンが初めてロンドンを訪れるまでが、同一舞台の左側にヘレンのニューヨークの自室、右側にフランクのロンドンの書店というセットで演じられた。最後は涙。

後日、ロンドンの書店で、この原書がバーゲンで売られているのを見つけ、買った。10月に、山手線で、Mr Wilkinsonにばったりお会いした。先生はこれをテキストにお使いになったことがおありだが、芝居はまだご覧になってない由。

7月14日(木)　晴

8時30分に集合し、Lake Windermereに沿って北端から更に少し北上すると、Lake Grasmereに着いた。Wordsworthは、1802年にMary Hutchinsonと結婚し、1808年までの6年間、Dove Cottageに住み、その間に3人の子供が生まれた。ダヴ・コテジにはSir Walter Scottやコーリッジも訪れ、後に、Thomas de Quinceyが住んだ。一階の床は石畳である。冬などはさぞ冷え込んだことであろう。(その後併設された記念館には、1989年春と1990年夏に訪れたが、この年にはまだコテジだけだった。)

次に、詩人が2人の子を亡くしてから1813年に移り住んだRydal Mountを訪れた。グラスミア湖の東側のRydal Waterに面した斜面に建てられ、ライダル湖を見下ろす広い庭がついている。妹Drothyが"paradise"と感激したほどの素敵な家で、素晴らしい眺望に恵まれている。広い庭はいくつかの庭園に分かれ、崖の中腹には四阿風のサマーハウスもある。湖辺へ続く傾斜には、さまざまな花が咲き乱れている。パンフレットの春景色には、黄水仙の群れている写真が載っているが、The Daffodilsの詠まれたのはここではなく、更に北のUllswaterとされている。

Prince of Wales Hotelの前庭の白いガーデンテーブルで、ミーキンさんお勧めのploughman's lunchを頼んだ。王冠型に切ったチーズ、ハム、小玉ねぎのピクルス3個、赤大根の甘酢角切り、カイワレ、さらし玉ねぎ、トマト、パンが大皿に盛ってある「農夫の昼食」。イギリスではありふれたものなのだが、私には初めてだ。大学生たちは、お弁当を持ってきて、湖畔に円座を作っている。食後、散歩して、湖水地方の風景を満喫した。薄く靄がかかり、湖面と対岸の山々が、印象派の絵のように淡く、美しい。小さなテリア

を連れた人に出会った。

午後は山登りだ。一昨日に懲りて、今日はキャロルに麦藁帽子を借りてきた。ミーキンさんの先導で山道にかかる。と、ベルギー人大学生のイルゼが、気分が悪く、頭痛もするという。同じ家庭に泊まっているフランス人のMathildaが心配し、谷川へ下りて、キャロルに借りてきたプラスチックのコップに、水を汲んできて飲ませ、20分ほど歩いたが、諦めて途中の苔のしとねで待つことになった。ドロシーも待つことになり、山行は10人になった。ここはGreen－head Ghyllといい、WordsworthのMichaelの冒頭に出る谷川である。"ghyll"は「谷川」の意味で、道路標識は"Gill"と綴られていた。樹木のない山で、瓦礫を踏みしめつつ、やや急な傾斜を登る。カール・ブッセの「山のあなたの空遠く、幸住むとひとの言う」が心に浮かんだ。〔写真3〕

小一時間登り、中腹で休憩。すごく暑い。グリーンヘッド・ギルに足を浸し、澄んだ山清水で喉を潤す。日本でワーズワースを読むと、別世界のこととして読むわけだが、今、詩に引用されている谷川の水に実際に触れてみて、この詩が本当に身近に感じられた。誰も彼も大変に満たされて、山を下りた。

10時に、バスは私たちをそれぞれの滞在家庭へ送り届けてくれた。例によって、ミーキンさんの指示で、一人10ペンスの運転手へのdonationの箱が回って来た。

7月15日(金)　晴

午前中はfreeなので、午後の授業の予習をしたり、洗濯をしたり、キャロルとおしゃべりしたりして過ごす。キャロルはお料理上手で、台所にはスパイスの瓶が並び、裏庭にはミントやセージなど数種類のハーブが植わっており、戸棚にはいろいろな手作り果実酒の瓶が醸されるのを待っている。さすが国花が薔薇の国だけあって、薔薇ワインも薔薇ジャムもある。クラマー家では、子供たちを、実によく躾けておられる。トムは反抗期に入るところで、やんちゃなのだが、ママは決して感情的に怒らない。父母の連携のうまさは羨ましいと思う。リチャードは、ママに対して、すごく「協力的」、というより、「育児は両親の共同責任」と信じており、母親が主体で、父親は補助的役割を果たせばよい、などとは思っていない。日本では、父親が日常の育児で補助的役割でも果たしてくれれば、まだまだ上等な方であろう。

午後1時30分より、ワーズワースについて。"Michael"のnatureやLukeなどについて話され、この詩を書いたkey pointは、"the breakdown of tradition caused by the industrial revolution"と締めくくられた。五つの"Lucy Poems"のそれぞれについての解説の後、"Lucy Poems"と"Michael"の比較など。

夜9時からのcourse partyはhost familyもご招待なので、リチャードが、ワインを1本買い、3人で出かけた。9時はまだ明るい。薔薇の薫る芝生に豆電球を張り巡らし、庭の片側には飲み物のテーブルが出ている。ヴァイキングなので、御馳走を持ってデッキチェアで歓談する。コースの先生方にご挨拶し、何人もの方々に紹介された。Mrs Sheila Grahamは、エジンバラ大学のサマーコースで教えていらしたご主人を紹介してくださった。一月後に参加する予定なので、お話を興味深く伺った。日本へ行ったことのある方は、朝鮮戦役の時期が多い。前線から休暇で日本へ来た兵士にとって、日本は楽園だった筈だ。ヴァイオリンがイギリスのフォークダンス曲を弾き始め、リチャードもキャロルも大きな輪の中で楽しげに踊り始めた。ダンスが一段落した。楽士の楽器を借りてちょっと音を出してみた。酔ってるのかな。ドイツ人で医学部進学希望の18歳の高校生オリヴァーがやっ

てきた。「その曲なに？好きなんだけど。」「ベートーヴェンの『ロマンス・ヘ長調』よ。」彼の妹で17歳のウルリケも同じ志望で、一緒に参加している。医者志望の高校生が英文学の夏期講習にこのように熱心に参加していることは、一つの驚きであった。受験の必要な日本の高校生は、入試準備のための予備校の夏期講習にしか行かないのではなかろうか。受験の必要のない日本の高校生はどのような自主勉強を選ぶのだろう。知識階級にとって、「教養」とは、何であるのか。ヨーロッパでは、日本やアメリカとは異なり、大学生は少数の知的エリートで、高校以降のカリキュラムは「深いが狭い」といわれている。しかし秀才兄妹とはいえ、高校生でありながら、彼らにとっては母国語ではない今回のイギリス文学の講義を、やすやすと理解してしまうとは！まがりなりにも英文学を勉強した私がついてゆくのに必死だというのに！５年後、ケムブリッジで、物理専攻のドイツ人院生が、Hamletの、“To be, or not to be:That is the question.”で始まる長い有名な独白を、よどみなく暗唱したのにも仰天した。古典(ギリシャ・ローマ)や文学の素養は、分野によらず、政治家にとっても、たとえ理科系の人間にとっても、西欧では、人間を作るものとして、教養の一つのバロメーター、a mustと見なされる。それに引き換え、今日の日本の政財界人はお金と権力と利権にしか興味がないようだ...ベビーシッターとの約束が12時までということだったので、歓談は尽きないが、帰宅。明日はヨークへ一泊旅行だ。

７月16日　(土)晴

駅までキャロルの車に送られ、９時19分発の列車に乗る。Yorkまで１時間乃至１時間半の由。日本の鉄道ほど正確ではないらしい。同席したご夫婦やオランダ人リエットとよもやま話をしているうちに到着。

宿は分宿なのだが、ドロシーがunkindな仲間に置いてきぼりをくわされたとスネている。しっかりくっついて行かなかったので、しょうがないかもしれないが、そういっても始まらないので、ジョイスとヨウクと３人で宿に電話をかけ、タクシーで送り届けた。私たちも、宿で一休みしてから、インフォメーションで地図とガイドブックを買い、11時30分に、集合場所であるYork Minster内のInformation Officeへ歩いて行った。

ヨーク・ミンスターは南のCanterbury Cathedralと並び、英国国教会の北の中心である。女性ガイドさんに、説明を聞く。正式名称は、Metropolitical and Cathedral Church of St. Peterで、archbishop[大主教]の御座所としてのcathedral[大聖堂]であると同時に、キリスト教布教の中心のminster[大寺院]を意味する。長さ160メートル、幅76メートル、高さは、丸天井までが27メートル、両側の塔が56メートル、明かり塔が71メートルの、英国最大のゴシック建築である。元はローマ軍の司令部所在地で、627年にEdwin王が洗礼を受けてから、キリスト教の教会となった。670年に焼失し、Thomas of Bayeuxがノルマン人の大聖堂を建てた。1240年、Walter de Greyによって、ゴシック式大聖堂となり、1480年頃、最後のLantern Towerが建てられた。(帰国してしばらくして、落雷のために、一部焼失したというニュースに驚き、また、再び公開されたという嬉しいニュースも聞いた。)

12世紀のものから20世紀のものまである非常に美しいステンドグラス、彩色天井画、壁面装飾など、手入れが行き届き、壮麗・優美の極致だ。薔薇の花の装飾が多いのは、ランカスター家のヘンリー７世とヨーク家のエリザベスの結婚で、バラ戦争の終結(1486)を祝ったからである。ついでながら、Tudor Roseは、一重五弁である。見るべきものが多く、説明も多く、驚嘆しながら歩いた。日本の大伽藍と比較する余裕もなかった。

ここまでは団体行動だが、あとは自由行動になる。ジョイスやヨウクは前にも来たことがあるが、私は初めてなので、ミーキンさんのhighly recommended suggestionsに従うことにした。ミンスターの西側を伝って行くと、Saint William's Collegeに出る。入り口の前で大道音楽士3人が笛を吹いていた。名前が示すように、ここは元は中世のグラマースクールで、回廊式の石壁の一階の上に、half－timberの2階が張り出している。アーチ型の木製ドアの上部の両側に、楯型の紋章があり、上に小窓がついている。ここから中に入る。内部は今はレストランで、赤いテーブル掛けのテーブルが並び、美味しそうな匂いが漂っている。その奥は、四方を回廊で囲まれた中庭で、石畳の上に木製のピクニック用テーブルとベンチが並べられている。花ボールが軒からいくつも吊るされ、大鉢にも色とりどりの花が咲き、目を楽しませてくれる。気持ちのよい日なので、中庭で昼食にした。相席のおじいさんは、数年前まで毎夏自転車レースに出場するためにヨークに来ていたのだが、もう今は見物、と機嫌よく話しかけてくれた。

2時15分のwalking tourまでに20分程あるので、城壁の上を歩くことにする。ミーキンさんのお勧めでは、Bootham St.から歩き始めることになっているが、そちらがwalking tourの出発点Exhibition Squareに近いので、逆向きに歩くことにした。Roman Fortressであった城門横の階段から、城壁に登る。城壁は、幅1メートルほどの歩道で、両側が高さ1.5メートルぐらいの石塀である。城壁の外には緑地が広がり、市の中心よりやや西側を縦断するRiver Ouseの支流のRiver Fossがうねっている。城壁の内側は、鋭く空を刺す大小の白っぽい尖塔を持つ大聖堂の裏手に当たり、ミンスターが圧倒的な威容を誇る。学校や、芝生の庭と彩り豊かな花壇のある大きな民家も見える。城壁の下の土手も花壇だ。城壁は、古い部分もあれば、18世紀や20世紀に修理した箇所を表示したプラークもある。

この町には、古くからいろいろな人々が生きてきた。ローマ人はEBORACUMと呼び、サクソン人はEOFORWICと呼び、ヴァイキングはJORVIKと呼んだ。William the Conquerorに始まるノルマン王朝期と中世のヨークは、英国第2の大都会であった。街の屋根の波を眺め、昔からの人々の暮らしに思いを馳せる。Robinson Crusoeも、1632年ヨーク生まれということになっている。

徒歩2時間のguided tourは市が無料でやっており、私たちのガイドはおじいさん。ガイド免許は日本では全国共通だが、英国では地域ごとで、バッジに明記してある。マイも一緒に、広い芝生に壁の一部だけ残っているSt. Mary's Abbeyから歩き始めて、The Yorkshire Museumは通り過ぎた。考古学的に地層を整理し、真鍮のパネルに、下からROMAN BANK 1st-4th C, DARK AGE 5th-10th C, NORMAN AGE 11th-12th C, MEDIEVAL 13th C.と銘記して保存してある所は面白く、感心した。城壁を先程と逆に歩いて2時間経ったところで、一応解散。(以後は有料になる。)

StonegateにあるTaylor'sという18世紀のcoffee houseを探すと街の真ん中にあり、本当にコーヒーだけのクラシックな店だった。突き当たりを左折し、ローマ時代の通り、Petergateを右折すれば、Low Petergateで、King's Squareへ出る。辻で、音楽学校生らしい女の子が、本格的にヴァイオリン(ラロやブラームス)を弾いていたので、ケースにコインを入れた。この後、ロンドンでもエジンバラでも、このような光景に出会うことが多かった。六叉路のKing's Squareを左へ直進するとthe Shamblesに入る。ここは中世の町並みを保存した地域としてヨーロッパでも屈指の通りで、両側からhalf-timberの軒が路地にかぶさっている。本来は肉屋の町で、ジェズイットの僧をかくまって圧死させら

れた肉屋の妻Margaret Clitherowが住んでいた。また、1605年11月5日に議事堂を爆破しようとしたGuy Fawkesも、PetergateまたはStonegateで生まれたといわれる。12世紀というパネル表示の家屋も保存がよく、外観は800年の歳月を感じさせない。

今夜のお楽しみには、ハイドンのコンサートかコメディーが選べる。夕食をすませ、7時過ぎに、Theatre Royalへ行くと、外のテラスでは、ジョイスたちが食事中だった。出し物はRelatively Speaking。(Alan Ayckbourn作。York Theatre Royal Company出演。Joan Knight演出。)出だしがふるっている。舞台のベッドの緑色のベッドカバーの下で、若い男Greg(Nicholas Bell)が眠っているところに、電話が鳴る。すると彼はそのベッドカバーをくるくると手際よく褌のように巻きつけて結び、残った布を後ろに垂らす。ガールフレンドGinny(Judy Hopton)が下着だけでいるところへ、チョコレートの小包が届く。引き出しには、彼女の上司からの幾箱ものチョコレートがしまってある。ジニーはグレッグに、その上司夫妻が自分の両親Philip(Roger Kemp)とSheila(Janet Michael)だと伝えてあったので、青年は娘の親に会いに行き、話がこんがらかる。wittyな会話に満ちている。直接に真っ向からぶつかり合わないで、少し間を置いたやりとりの軽妙さがたまらない。英語がもっとよくわかれば、もっと笑えただろう。皆が笑っているのに笑えないところもオカシイ。ともかく愉快な一夜だった。ジョイスもヨウクも飲んでゆくというので、私は独りで宿に帰ることにした。地理音痴の私のこと、迷いそうな悪い予感が的中し、あった筈の曲がり角が見つからず、行ったり来たり、悪夢を見ている心地だ。ようやく若い二人連れに会い、地獄に仏。宿は個人の家を改装した小さなB＆Bで、主人は戦後佐世保に来たことがあると、日本を懐かしがって、親切に日本への電話の便を図ってくれた。それなのに、そそっかしい私は、翌朝早く独りで料金を払わず歩きだしてしまい、慌てた主人が追いかけてきたのだった。

7月17日(日)　晴 一時雨

ウーズ河に近い市の北部の宿から、Lendal, Coney St., Nessgate, Castlegateと(日曜のせいばかりでなく)うらぶれた近道を通って市を縦断して、南端のCastle Museumを目指す。町を歩いて通り抜けられるところがいい。手前のClifford's Towerには、暇があったら後で登ろう。ウィリアム征服王がこの城を1069年に建てた時、クリフォード塔も城の一部であった。

長年、直接の関わりあいはないと思っていた異国の遠い昔の歴史上の人物が、その人の建てた城の中に今いることで、急に繋がりを感じた。博物館はFemale Prison(1780)を改装したもので、Debter's Prison(1705)も一部博物館として使用されている。Daniel Defoeは、この債務者監獄を、「英国で最も堂々として完璧なもの」と評したが、それでも過密で、囚人たちは窒息死したという。背後の巡回裁判所(1773)は、現在も使用されている。

この素晴らしい民俗博物館は、医師Dr. Kirkの集めた農夫、職人、商人や庶民の使用した道具類の貴重な宝庫である。女囚監獄には次のような展示室がある。The Period RoomsとしてVictorian Parlor; Moorland Cottage; Georgian Dining Room; Stuart Farming Family Room; the Coronation Room(1953); Sitting Roomなど。The Green Galleryでは、精緻な細工と金の彫刻と螺鈿や彩色画で飾られた18世紀の自動時計や、陶器の数々が目を楽しませ、The Hearth Galleryには壁面いっぱいに使った大きな炉やオーヴンのいろいろが、時代ごとに数多く集められていた。

Kirkgateは石畳を敷いたヴィクトリア朝の町並みが、屋内に実物どおりに復元され、薬屋、本屋、小間物屋、飴屋、鞍屋、鍛冶屋、車屋、パイプ屋などなどが両側に立ち並び、当時の馬車—さしずめ自家用ベンツとタクシーといった—も置いてある。

債務者監獄も充実しており、Costume ExhibitionやMilitary Exhibitionなど。

戸外のRaindale Millへの細道には直径1メートルぐらいの挽き臼が歩道の敷石として埋め込まれている。製粉所では、小麦粉を一袋(500グラムぐらい？)50pで売っていた。

The Condemned Cell(死刑囚独房)も保存され、怪盗Dick Turpinの独房も興味津々だ。囚人の人形の置いてある独房もある。責め道具、例えば、枷、おしゃべり女の頭にかぶせて舌が動かないようにする鉄器具、“cat o' five tails”や“birch”や“thumbscrew”など。

収集品の中には、日本に類似品のないものもある。Nottingham raceは、ベルギー・レースのように、多数のレース用の細い棒を操って編む。Sons and Loversを読むのに役立つことになった。紋章や旗や楯も、家紋と性質は似ているが、日本では実物をこのように数多く見たことはなかった。膨大な量の収集である。

クリフォード塔に登った。ウイリアム征服王の建てた木造の要塞は、1190年のanti-Jewish riotsで焼失し、13世紀に石で建て直されたが、1684年の爆発で屋根を失い、下部のみが残っている。人工の丸い丘の上の白い石造のremainsの中は、回廊式の建築物で、中央部は吹き抜けの庭になっている。

午後1時にPicadillyのABC Cinema前に集まり、バスで、Castle Howardへ。バス下車後、英国滞在中ただ一度の本格的な雨になった。

ハワード城はヨークの北方約24キロにあり、広大な原野と森林に囲まれ、遠くから望見される。この豪壮な大邸宅は、邸内に池や川も持ち、NHKテレビのアニメになり、今回映画化されたバーネット女史の『ひみつの花園』の舞台である。ハワード家は14世紀に溯る屈指の名家で、広壮な宮殿の内部は非常に豪華。室内装飾、家具・調度、タペストリー、食器類、絵画、肖像画等、贅をつくしているが、最も打たれたのは、高いドームとそこに描かれたアポロと馬、ホールの壁画であろう。sublimeな雰囲気すらただよっていた。ルーベンスの「サロメ」もおもしろい。サロメはふっくらして、やや肉感的だが、悪女には描かれていない。ヨハネの髪は少しちじれ毛で栗色、口ひげは金色で、伸ばしたあごひげとほおひげは髪と同じ栗色の大変ハンサムな首で、銀盆から血が滴り、なぜかヘロデ王が刀を手にしている。

5時半ごろ、バスはミンスター前へ戻った。汽車は6時13分又は9時10分発であるが、オランダのリエット、フランスのマチルデ、ベルギーのイルゼと早い方ので帰ることにし、一緒に駅のカフェテリアで夕食にした。

汽車の到着が30分遅れた。2度ホームへアナウンスがあったが、全然聞き取れない。連れの彼女たちは何とかわかったようで、教えてくれたが、一人旅で聞き取れなかったら本当に困る。シェフィールドの駅からキャロルに電話して、迎えに来ていただき、マチルダとイルゼも近くなので、一緒に送っていただいた。彼女たちのhost familyはあまり親切ではないらしく、例えばstudentsに朝食を出すこともしばしば[忘れる」そうだ。

7月18日(月)　晴

8時に集合し、Warwickshireへ南下し、Stratford-on-Avonへ。途中、George Eliotが一時住んだ家で小休憩。卒業論文に彼女を選んだので、とても懐かしい気持ちに駆られ

た。いつか読み直し、pilgrimageをしよう。

Anne Hathawayの家に着いた。草花や薬草の咲き乱れる奥に、藁葺き屋根の家がある。ハサウェイ家は富裕なヨーマンで、尊敬されていた。cottageといっても、一階と二階にそれぞれ6室ある。18歳のシェイクスピアが26歳のアンに求婚したといわれる木製の背付長椅子は、半ば伝説的な若いシェイクスピアの実在を裏付ける証拠品のようだ。ベッド、チェスト、テーブルの足、椅子などに、入念な彫刻が施してあり、柱と壁板は太い木釘で接合してある。台所の道具類もおもしろい。メリケン粉をこねるへら(pad)は、まるでボートのオールだ。

Shatteryから2マイルでストラトフォードに着く。生家はHenley St.にあり、隣接したThe Birthplace MuseumともどもShakespeare Birthplace Trustが管理している。一階は石畳、二階は板張りの床で、不規則な木材の梁が白塗りの壁に黒くアクセントを付けている。床も平らではなく、きしむ。地震のない国なので、このように曲がった柱や梁でも十分400年以上保ったのだと納得。木製手彫りのゆりかごや、グラマースクール時代に使用したという丈の高い机もあった。台所の炉はとても大きく、1間は十分ある焼き串が横に渡してある。“baby－minder”とは、天井と床で固定した棒に、床と平行に360度回転する横木が取り付けられ、その横木に半円形の革紐がついているもので、赤ちゃんを入れて、危険なく運動できるようにした工夫だ。目が回らないだろうか。博物館展示室には、有名な4種類の肖像画、初版本、家系図など。売店で本や絵葉書などを買った。

High St.に面してハーヴァード大学の創立者John Harvardの母、Katherine Rogersのhalf－timberの家がある。花ボールがいくつも吊るしてある。

そのまま直進してNew Placeに着く。1610年頃に引退後、1616年までの晩年暮らした家で、当時最も立派な家だったそうだが、今は礎石しか残っていない。「紳士」の庭らしく、芝生と花壇と幾何学的に直方体や半球形や三角錐やすりこぎの頭型に刈り込んだ植え込みを組み合わせたthe Formal Great Gardenと、四つに仕切られ、多種多様多彩な草花で幾何学模様を描いたknott Gardenに目が釘付けになった。表通りに面して同じ敷地内に孫娘Elizabethと夫Thomas Nashとの家が残り、公開されている。

四つ角を直進すると、左手のKing Edward VI Schoolという詩人の通ったグラマースクールに達する。鉄柵に紋章が付けてある。このChurch St.の右手に研究者のメッカ、Shakespeare Instituteがある。

Old Townへ左折すると、Hall's Croftへ着く。長女Susannaが結婚したケムブリッジ大学出身の医師John Hallの家で、前述の一人娘エリザベスはここで生まれた。立派な家で、薬草類や手術道具なども当時のままに保存展示されている。裏庭から裏門へ続く小道の両側の花壇や植え込みは百花繚乱だった。イギリスはいずこも花に溢れている。

Old Townを真っすぐに進み、Trinity St.に入ると、木立に囲まれたHoly Trinity Churchの前へ出る。祭壇にシェイクスピアと家族たちのお墓があり、横に肖像がある。「わが骨を動かした者に呪いあれ」という自署の墓碑銘のために、墓を開いた人はいない。

ミーキンさんについて川沿いに歩いて行くと、Brass Rubbing Centreという建物があった。「何だか知ってる？」と聞かれたので、「さびたラッパを磨くところ？」と答えたら、吹き出してしまった。キリストや聖人の浮き彫り像の上に真鍮板を載せ、上からこすって真鍮板に像を写して装飾にするもので、墓石の石摺りに似ている。体育館のような広い工芸室で、数人が思い思いの絵で熱心にやっていた。

Dirty Duckで昼食後、River Avonの岸へ出た。こちら側は自然のままで、草が茂り、

木々が川面に垂れ、岸へ降りて行ける。向こう岸は造成してあり、公園である。カヌーが滑り、キャンプ用の屋形船が係留され、遊覧船がゆっくり通り過ぎ、白鳥が群れている。川幅は狭いが、どちらから流れているのかわからないゆるやかな流れだ。Opheliaが柳につかまったら折れて、流され、流されてもすぐには沈まず、歌を歌っていた、というのがこの川での出来事のように感じられた。大学2年以来の念願だったエイヴォン河に来られた感激で、胸がいっぱいになった。〔写真4〕

Royal Shakespeare Theatreの前で写真を取り、芝生で練習しているモダンダンスのグループを眺めているとジョイスが来て、Back Stage Tourがおもしろかったと言う。戻ってnoticeを見ると、午後にも1回あるではないか。まだ時間があるので公園へ行くと、イルゼとマチルダがいた。タラコのごとく、いつも一緒だ。これからどうするの、と聞かれたので、舞台裏の見学に加わるつもり、と答えると、イルゼも行くという。マチルダは木の下でテキストを読んで待っているという。待ち合わせを決めて、イルゼと町を歩いて20分ほど潰すことにした。今日がお誕生日だとのことで、アイスクリームを奢ったら、しきりに恐縮した。白鳥座の入り口に着き、有料だとわかると、彼女はお金がないから止めると言う。「お祝いにtourをあげるわ。」僅か80pだ。係の人は、私まで学生料金にしてくれた。

40分ほど舞台裏の仕組みやオーケストラボックスがステージにもできることなどの説明を聞いたり、大理石に見えるように塗ったベニヤ板のJulius Caesarのセットや、先端から赤い塗料の出る短剣などを見学し、夜の予備知識ができた。小雨がパラついたが、すぐ止んだ。ヘンリー5世、ハムレット、マクベス夫人、ファルスタフを台座に従えた公園のシェイクスピア・モニュメントを眺めたり、町をウインドウショッピングして歩いた。シェイクスピア産業の町で、魅せられるものばかり。

結局イルゼを祝って、マチルダも一緒に招き、エイヴォン河に張り出しているRSTのカフェテリアで、あひるの家族やたゆとう川舟を眺めながら、私も気分は大学生のバースデー・ディナーとあいなった。

Julius CaesarをJoseph O'Conor, BrutusをPeter McEnery, CassiusをEmerys James, AntonyにはDavid Schofield, PortiaをGemma Jones, CalpurniaをLesley Duffという配役である。大学3年の時に、Miss Mary Chappellの授業で、「この芝居の主人公はだれか」というテーマでレポートを書いたことを思い出した。今晩のブルータスは学者であることを考慮しても少しおとなしすぎ、アントニーは若すぎる感じがしたが、articulationやelocutionはさすがに素晴らしい。特にポーシャが良かった。ブルータス夫婦のようなやりとりを、日本人の夫婦はできるだろうか。アントニーが民衆を扇動し、反ブルータスに盛り上げてゆく「ほめ殺し」の雄弁は、台詞を読んでもすごいと思うが、舞台で聞くと、迫力が違う。

第1幕から第2幕までは、抽象的な舞台装置—例えば、舞台の天井近くに大きな白塗りの茨のかたまりが吊るしてあるとか、大理石の壁のみとか、椅子だけとか—に、ローマ人風の白いぞろりとした服装で、赤いひれを肩に掛けているだけの簡素なもの。ところが、アントニーの演説が終わって、第4幕の戦争場面になると、ガラリと変わる。第4幕、第5幕は極めて時代錯誤的で現代風にリアルな装置や道具が現れる。兵隊を積んできた装甲車からテントが出されて敷かれ、前線はこうであろうと思われるような細々とした道具類、ブルータス用の洗面器や折り畳み椅子などが並べられた。兵士たちは、第2次大戦の陸軍兵士の軍服さながらのカーキ色の服で、長靴をはき、鉄砲の代わりに槍と楯を持ち、兜を

かぶっている。監督Ron Danielsは意図的にこのような演出をしたのだろうが、観客は意表をつかれた。もっとも、シェイクスピア劇の演出は、意表を突くことをねらいにしたように思われるものが、評判になる。後年、RSTで観たRomeo and Julietでは、舞台上を真っ赤なスポーツカーが走り回り、乳母は日傘片手に自転車に乗り、Tybaltは黒い革ジャンにグラサンでジャックナイフを振り回し、父親たちの執務室には電話やテレビがあった。BBCの全作品上演では、伝統的なリアリスティックな演出だったが、先年、東京グローブ座のこけら落としの全史劇7作品の上演の際には、飛行機の爆音が轟き、大砲が唸り、ピストルが暗殺道具だったりした。演出を想像するのも楽しみのひとつだ。

7月19日(火) 晴

午前中はfreeなので、初めてダウンタウンへ買い物に行った。The MoorとFar GateとNorfolkは年中歩行者天国だ。7月21日がベスの満1歳のお誕生日なので、ピンクのワンピースを買い、折角刃物の町へ来たので、ナイフも求めた。Mappin & Webbの支店もある。本屋は丸善のように文房具も売っている。帰りのバス乗り場を探して右往左往した。シェフィールドのダブルデッカーはベージュと茶色のと、ベージュと緑色の二種類のツートーンで、時間表はない。ダウンタウンからVictoria Rd.まで7ペンス(27円弱)という安さに驚く。

午後はJulius Caesarについて。講師はまだ公演をご覧になってないので、私たちが感想を述べた。シーザーの性格と弱点、プルタークとシェイクスピアの扱い方の違い、劇の構成、ブルータスと妻、シーザーと妻、シェイクスピアとローマ人の女性観、キャシアスの劇の中での役割、ブルータスとキャシアスの関わり方、ブルータスのinconsistency、ブルータスとアントニーにとってのbloody sceneの意味、アントニーの道徳的欠陥、ブルータスとアントニーの出会い、性格を表す台詞、ghostすなわちthe vengeful spirit of Caesarが後半を支配する“revenge play”であることなどを話し合い、あっという間に時間が過ぎた。

7月20日(水) 晴

9時集合。バスはNottingham市の北、Eastwoodへ向けて南下する。ここは炭鉱町で、D. H. Lawrence(1885−1930)の父も炭鉱夫であった。道すがら、露天掘りの廃鉱跡がいくつも見えた。今は産業としては寂びれ、Nottingham laceが売物だ。因みに、Sons and Loversの主人公Paul Morelはレースのデザイナーである。静かな町で、ほとんど人通りがない。

初めに、ロレンスが2歳の1887年から6歳の1891年まで住んだThe Breachの一軒へ案内された。この家が『息子と恋人』のモデルになった家だ。赤煉瓦の二階家で、同じような炭鉱夫の住宅の並ぶ区画にある。一階だけが公開され、案内の婦人が説明してくれた。内部はよく保存されている。洗濯は、台所の裏の外の流しで、大盥に水を汲んでするので、冬は凍る冷たさとのこと。トイレも屋内にはなくて、裏庭の物置風の小屋がそれだ。浴室もない。大盥に水かお湯を汲んで身体を洗う。この家は、長屋の角にある。裏庭が一軒毎に煉瓦塀で仕切ってあり、狭い路地に面している。塀の内側には、表から裏へ幅数メートルのハーブの植わっている細いside gardenがあって、『息子と恋人』にそっくり描写されている。この小説は、大学1年後半から2年にかけて独力で英語で読んだ最初の長編で、今回読み直してみると、あの頃は読み飛ばし、わかっていなかったなあと思う。

ロレンスといえばLady Chatterlay's Loverだが、当時英国でも一時発禁になった。日本でもチャタレイ裁判が起こり、国会図書館へ裁判記録の新聞の切り抜きを読みに通ったことを思い出す。日本で発禁になったとき、買いそびれていた私に数学科の同級生が訳本を貸してくれた。共学の県立校から来たクラスメートが、「高校3年の時、男子はペーパーバックをちぎって、分担を決めて読んでたわよ。」というのを聞き、なるほどそういう風にしてやればすごく英語力がつくなあ、と感心したことがあった。女子部の生徒だった私には、思いもつかない勉強法だった。この度、佐久間良子のコニー役で上演されるという。どこまで原作を生かせるかわからないが、日本も性の表現に対する意識が変わった。露骨になったことは、当時はなかった週刊誌や漫画で明らかだ。

1981年版のJournal of The D. H. Lawrence Societyを買った。論文の中に、"Helen Corke and Lawrence—Extracts from her correspondence with Taiji Okada"というのがあった。日本人の名前から、ふっと、近年、ロレンス全訳という偉業を成し遂げられた日本ロレンス協会会長、日本ワイルド協会顧問の西村孝次先生の飄々たる話術を思い浮かべた。

次に、1891年から1902年まで住んだWalker St.の家の前を通り、Victoria St.に面する生家を訪れた。赤煉瓦造りの緑の窓枠の家で、ここも手入れが行き届いている。The Lawrence Societyの本部になっており、ミーキンさんのお頼みで、定休日ではあるが、案内者が来てくださった。

Church Cottageの前を通る。The RainbowでAnnaとWilがハネムーンを過ごした家のモデルだというプレートが貼ってある。この小説には、意識と生き方が時代の移り変わりと共に変わる3代のヒロインが描かれていて、興味深かったことを思い出す。近くのcollieryへ20分ほど歩いてみた。全員の入れるレストランがないので、分かれて昼食をとり、食後、The Parish Church of St. Maryの向かい側のSun Innに集まった。

午後はぐっと趣向を変え、イーストウッド北東約10キロにあるNewstead Prioryを訪れた。邸内に広い池やいくつもの庭園を持つ豪華絢爛たる城館のあるじは、Lord Byron (1788—1824)である。廃墟のNewstead Abbeyには入らず、ガイドの案内で城館を回る。室内装飾、家具調度品、肖像画、骨董品など全て超豪華だ。祖先はウィリアム征服王に従ってノルマンディーから来ており、バイロン卿は六代目になる。王たちを迎えたいくつもの部屋、豪奢な寝室。中にはThe Henry VII Roomという Japanese Roomもあり、畳こそ敷いてないが、壁面には鶴と波の大和絵が壁紙代わりに貼られ、屏風や、螺鈿と漆塗りの箪笥まで置いてあった。客間のテーブルは、鳥や昆虫を象眼した珍しい品。詩人がギリシャ戦役にかぶって行った自らのデザインになるヘルメット。口ひげをたくわえ、アルバニア風の衣装に身を包んだ肖像。恋人たちの肖像画。書簡及び詩の草稿。"When We Two Parted"はイギリスで今も愛誦されているのだろうか？城館の右側はCloister(修道院)の廃墟で、南東に広い池が広がる。南東端の日本庭園には、灯篭や四阿も備わり、木立の奥には小滝や流水もある。「バイロンと日本」という研究テーマがあるのでは？Rose Garden, Rock Garden, Kitchen Garden、Tropical Garden, Devil's Wood, Monk's Gardenなどが屋敷の周囲に設計され、随所に池や噴水や記念堂も配置され、飽きることがない。緑の木立が逆さに映り、家鴨がさざ波をたてる池辺に佇むと、Stehen Sie! Sie sind zu schön.と時を止めずにはおられない。(魂は売り渡したくないが...)裏庭の花車の上で羽を広げる雄孔雀の華やぎを、詩人も見たのだろうか。

今日は午前と午後で、ロレンスとバイロンという文学という範疇では同じながら、全く

異なる二人の生活背景を目の当たりにして、excitingな一日だった。再びChesterfieldの町を通り、All Saints Churchの捩れた斜塔を車窓から眺め、7時に帰宅した。

今晩は、8時半頃から、リチャードが自宅で学年末のstaff partyをする。社会科の主任なので、新任の先生の面接をしたり、一度決まった教員が急に止めてしまったりして、多忙そうだ。中学の先生は、50パーセントがカウンセラー、30パーセントが警官、20パーセントが教師だとボヤきつつも、研究発表会では、スライドで自校の紹介をして好評を博したそうだし、学校史を学校案内の小冊子にまとめたりして、貢献している。ドーセットの海辺の出身で、一家でヨットを持ち、イギリス海軍の伝統か、海に夢中だ。夏はよく一家でセーリング。3年後、ご両親に紹介され、雨の宵、ウェイマスに係留してあるヨットも見せていただいた。休暇には、British Museumへ船の資料を調べに行くそうだ。さて、慰労会は、たいてい夫婦か恋人のカップルで来るすごくat homeなパーティで、私も紹介された。手作りの料理か、ワインか、チーズを持って来ることになっていて、テーブルの上は、幾種類もの肉料理、サラダ、キャロルの調理したホットポット、パン、デザートのケーキや果物でいっぱいだ。皆思い思いの格好で椅子に掛けたり、立ったり、床に座ったりして、とてもリラックスした雰囲気である。年配の一人が背広のほかは気楽な服装で、女性もパンツルックだったり。先生は先生らしく、といった妙な固定観念はない。リチャードがガソリン節約のため一日交替でcar poolしている英語の先生は可愛らしい花柄のワンピース。平均して若く、50代の方はおられないようだ。音楽の先生が、道徳も教えておられたりする。とても暖かみのある問題児担当の先生とも話が弾んだ。リチャードはこの先生を親しみをこめてStripeeと呼んでいる。縞シャツを着ているからだ。シェフィールド市では、彼のようなカウンセラーが数校を担当して定期的に巡回し、問題が起きると、すぐとんで来るそうだ。学校が適切なカウンセラーを配置することは、生徒及び教職員の健康管理に欠かせない。このような制度を女子部も見習いたいものである。リチャードの学校でも登校拒否の男子生徒が出たという。私も高3で当該主管をした重症の生徒のことを話した。

7月21日(木) 晴

午前はJane Eyreで、Charlotte BronteのJaneの扱い方、Romantic tradition, Janeの独立と自由、キリスト教に関するRochester, Brocklehurst, the Livers, Helen Burnsなどの見方。ロチェスターとphallic symbolsとジェインの受け取り方。彼女の描いた絵について。Barthaについてなど。

午後はMr Mick MangenによるSons and Lovers。自然と産業の環境への影響。PaulがMiriam(田園)とClara(都会)の分裂に悩んだこととその結末。ロレンスを読むのがなぜ困難なのか。月、熱と冷たさ、花と匂いなどのイメージの使われ方。ミリアムがポールをもてあそんだのか、その逆か、作者はどう思っているのか。講師ミックの考えとその理由。(講師もfirst nameで呼ぶ。親しみを感じる。これが英語文化ナノダ。)Mrs Morelについて。クララとミリアム対母親。ポールはなぜ妹のお人形を壊して、燃したのか。ポールの性格。ポールと母モレル夫人。ロレンスと女性。ミックのロレンス観など。

5時頃帰宅すると、ベスのお誕生日を祝う子供客四人とそのお母さん二人とベスとトムとキャロルとで、賑やかなこと。部屋で喧嘩したり、裏庭のビニールプールで遊んだり。私も子供達とこのような時期を過ごしたのだったと、ノスタルジアに駆られた。

夜、サマースクールの皆はLark Riseという芝居(1ポンド)を見に行くが、私はリチャー

ドとキャロルを夕食にお招きした。ヴェジテリアンのキャロルのために、ヴェジテリアン用のメニューも用意してある小さいけれどおいしいという店へ連れて行っていただいた。ホテルはお高い上に、菜食主義者用のメニューがなく、main dishからmeatを抜いて出したりするそうで。2週間があっという間に過ぎたこと、とても楽しかったこと、女性と結婚・育児・仕事のイギリス事情、私の場合など語り合った。今キャロルは聴講生で、リポートを書く時期は猛烈に大変なのだが、リチャードは、いつも非常にhelpfulである。しかし、一般には必ずしもそうではないようで、友人たちのいろいろなケースを話してくださった。近くに親などがいないと、勉強や仕事をするために、ベビーシッターに頼むことになり、この地域では、保育所はなく、ベビーシッターは、sitする時間で、tokenという紙切れをやりとりするチケット制でやりくりしているそうである。日本には、介護ヴォランティアについて、時間を蓄えるという組織のことを聞いたことはあるが、子供については私は聞いていない。

7月22日(金) 晴

シェフィールドから南西へ20マイルほどにあるChatsworthは、先年、テレビ『ザ・貴族』で放映されたthe Duke and Duchess of Devonshireの華麗な居館である。これはダービシャーで最も素晴らしい館で、ヨーロッパ中でこれを凌ぐ豪華な館はないとさえいわれている。捕らわれたMary Queen of Scotsが預けられて滞在した美しい数室も公開されている。また、Jane AustenのPride and PrejudiceのMr. Darcyの大邸宅のモデルともいわれる。少し立派すぎるのではないかと感じられるが、外観や立地条件などはかなり当たっているのではなかろうか。往きのバスの中で、ミーキンさんは一節を読んでくださった。彼はシェフィールド大学で哲学のlecturerだ。さて、デヴォンシャー公爵夫人は、領地で生産されたバター、チーズ、肉などを市場に売りに出したり、この館や家族の歴史を本にして出版されるなど、精力的に活動され、近隣の尊敬を集めておられるそうである。豪華絢爛、華麗の極みの家具調度、室内装飾、壁画、天井画、壁掛、美術品など、武具以外ではウィンザー城に勝るであろう。広大な庭園(garden とpark)!には、今回は見そびれたが、別のテレビ番組の庭園シリーズで紹介されたCapability Brown設計の段滝もある。

リチャードとキャロルが、ある部屋の扉に「描かれたヴァイオリン」について、あらかじめ教えてくれていたのだが、Jan van der Vaart作のこの絵画は、どう見ても本物の楽器が懸けてあるようにしか見えない。

広い芝生の向こうに小川が流れている。リエットとBeatriceとで、小川の堤でお弁当にした。ビアトリスは何年も以前に、1年間ホテル・オークラに泊まって上智大学で経済を勉強したというアメリカ人で、日本のことをとても懐かしんでいた。本当は80歳なのに、サマースクールには49歳と書いて申し込んだので、滞在家庭で三階の部屋を割り当てられてしまい、毎度階段の昇降が大変だとボヤいているが、朗らかな人。この若さと元気を、私は80歳で持てるだろうか。親子連れの家鴨を眺めながら、それぞれの子供のことや、教育などを話し合った。暑いので、リエットと、厩舎を改造して馬の繋がれていたコンパートメントにテーブルとベンチをしつらえたtea roomで、冷たいジュースを飲んだ。

午後はHathersageに。この教会の境内の南端には、Robin Hoodの子分Little Johnの墓があり、彩りよく花が植えられていた。境内には、渦巻き模様が特徴の、非常に古いSaxon Crossがある。頭部が欠けている。

この教会に隣接する牧師館には、シャーロット・ブロンテの親友Ellen Nusseyの兄、Henry Nusseyが任官していたので、シャーロットも泊まりに来たことがあった。ヘンリーはシャーロットに求婚したが、彼女は丁重に断った。牧師館は今も使われている。

ハザセッジは『ジェイン・エア』のMorton村のモデルともいわれる。バスを降りて少し歩いた。羊の群を小屋へ追い込もうとしている2匹の牧羊犬に出会った。2匹で群を挟み、群からはずれた羊には、近寄って吠える。反抗して群から離れようとする羊には、鼻面に噛みついて言うことをきかせ、全部柵に入れてしまった。牧童(青年)は口笛で犬に指示していた。羊の牧場を初めて近くで見た。倒れた鉄柵に打たれて腸のはみ出た羊の死骸が、細い道にころがっている。英国人にとって、羊は、羊毛が貿易上、経済上重要であるのみならず、マトンやラム肉など食肉としてもポピュラーで、衣食に大変身近な生き物だ。"Mary had a little lamb." という歌を知識としてではなく、感覚でわかったと思う。後年、ケムブリッジ大学で獣医学科の女子学生たちと知り合いになったが、この学科の意義の大きさは、日本にいたときは認識していなかった。

近くに、牧童が2室に住んでいるだけのTower Houseという空き家があった。Thornfield邸のモデルのうちのひとつといわれるが、ロチェスターの屋敷にしては小さすぎる。3階から屋上に出て、眼下に広がる田園風景を堪能した。ミーキンさんは、屋上からバーサの落ちるまねをして、皆を笑わせておられる。

シェフィールドの近郷には、Methodism創始者John Wesley(1703−91)の生誕地があるそうだ。Pilgrim Fathersの運動の発祥地であるScrooby, Austerfield, Babworthなどを巡るtrailのための案内図もあった。この辺りが、1620年Mayflower号でアメリカへ渡った英国の清教徒団ピルグリム・ファーザーズの発祥地であることは、それまで知らなかった。

スコットランド女王メアリーは、従姉のエリザベス女王に捕らえられ、前述のChatsworth Houseに預けられたほか、この近隣の約10箇所の城館に幽閉されていたので、その牢獄巡りのガイドマップも出ている。旅の後半、エジンバラではThe Palace of Holyroodhouseで女王メアリーの生々しい悲劇に触れ、またスコットランド各地で、彼女の流転の跡を目にし、彼女を身近に感じるまでは、「スコットランド女王メアリー」は遠い遠い存在であった。物理的に近づくことは、心理的に近づくことでもある。

6時帰宅。いよいよFarewell Gatheringの晩だ。瞬く間だったが、これほど充実した2週間を過ごしたことは近年なく、改めてこの時期に許可してくださった院と女子部に感謝した。ミーキン氏ご夫妻、受講生の人々を初め、多種多様の人々と親しく触れ合う機会を得たことは幸運であった。特にクラマーご夫妻の親切は何物にも替えがたい。毎日変化のある朝食と夕食、必要なときは心の篭もったデザートつきのお弁当、適切な寝具と居心地よく整えられた部屋(平生はリチャードの勉強部屋で、William Morrisのカーテン、障子紙を張った和風ランタンと和紙に竹を描いたブラインドのある屋根裏部屋)、時々挿しかえてある花瓶の花。何よりも、暖かい家族4人が初めての英国生活の不安や困難をすっかり取り除いてくれた。孤独とは無縁だった。このお宅に滞在したことが、イギリスとイギリス人に、その後より深く親しむ契機となったと言える。いつの日にか一家が日本を訪れ、お返しをすることができるだろうか。

前例に習い、ワインを持参する。ミーキン先生と奥様が、セミナーの終了宣言と6人の講師へのお礼、大勢の受講生への労いの言葉などを述べられた。すぐ帰国する人、ロンドンへ行く人、当地にしばらく残る人など、さまざまだ。それにしても、ヨーロッパ諸国の

互いに近いことを改めて認識した。ロンドンーパリは飛行機で1時間、フェリーで日帰りできる。飛行機でなら、欧州どの国でも、数時間後には家族のもとに戻れるそうだ。もちろん旅費も日本からとは比較にならない。ミーキン家の末っ子の10歳のお嬢さんが、ヴァイオリンでお稽古中の数曲を弾き、パパは嬉しそう。10歳の子供らしさの中にもwell-educatedであることを感じさせる行き届いた躾の見えるマナーや言葉遣いに、いたく感じ入った。リエットの懇請で、グラスミアで求めたThe Daffodilsのポスターを贈った。彼女のお母様もお好きな詩だそうだ。9月、彼女からの手紙によると、お母様はとても喜ばれ、お父様がコピーして色を塗られ、ご主人が郵便局へ投函しに行ってくださったとのこと。それは11月6日に着いた。今も家の壁に張ってあり、折りにふれ、女子部の生徒への教材にもなる。

7月23日(土) 晴

お別れの日が来てしまった。もっと逗留したい、という後ろ髪を引かれる思いに駆られつつ、荷物をまとめる。リチャードが講習で使用した書籍類を運んでくれて、トムとベスと4人で郵便局へ出しに行き、帰りにfish and chipsの店へ寄った。噂に聞くイギリスの「庶民の食べ物」。おいしいと評判の店のlong queueに並んでくれていた間に、八百屋でプラムと桜桃を買った。

"chips" は長方形のじゃがいもの唐揚げ(フライドチキンに添えられるもの)で、ポテトチップではないことを発見。"fish"は15×10センチぐらいの淡泊な白身魚のフライで、味はキスに似ている。鮮度が良く、油も良質で、おいしかった。トムはサクランボを知らず、"beautiful" と感嘆している。「こうやって食べて種を出すの」と教えたら、種を飲み込んでしまって、"This is very good." とまじめな顔で言ったので、大人たちは大笑い。先日、ヨークのお土産にハワード城製のfudgeを上げたら、やはり "This is very good." と言ったそうだ。頭が良く、音感とリズム感もすばらしく、始終歌を歌っている。9年半たったこの間の手紙では、英語と実験が好きで、学校祭のJunior School Bandでトロンボーンのソロを吹いた由。

午後3時の汽車にしたら、との勧めに、少しでも一緒にいたい気持ちで揺れたが、やはりお昼の汽車で発つことにした。駅でオランダへ向かうヨウクに会った。クラマー一家4人がホームまで見送りに来て、イギリス流に抱き合ってキス。列車が来た。ドアの窓越しに手を出すと、トムが "Akiko, why are you going?" と叫んだ。ベスはママに抱かれて、ただニコニコしていた。キャロルとは、昔からの友達だったような絆を感じた。リチャードは、「必ずまた会えるからね。」と言ってくれ、握手を交わした。列車は動き出した。God be with you till we meet again!!

キャロルの元同僚の先生が偶然同じ汽車で途中まで一緒なので、ロンドンの情報などをお聞きした。St.Pancrassへ着き、タクシーでRussell SquareのThe Penn Clubへ。ここは、近藤いね子先生のご紹介のクェーカー教徒の宿泊施設である。悪い人はいない前提なので、個室に鍵がないのが特徴だ。(しかし、3年後には、管理人が変わり、鍵が付いた。)イタリア人の女の子が狭い急な階段を昇って、3階の部屋へ案内してくれた。スーツケースの中身を箪笥へ納めたり、絵葉書を書いたりするうちに、夕食時間になった。

テーブルに着くと、Mr Martin Vincentが、隣の空席へ招いてくださった。以後2週間、この方の親切のお陰で、快適なロンドン滞在を享受できることになった。初めの2、3日は、この方がwardenとは気づかず、お客の一人かと思っていた。食堂には、ペンシ

ルヴェニア植民地を開いたWilliam Pennの肖像画がある。residentの老婦人たちのほかに、短期・長期の旅行客が泊まり、宿泊客は交替するので、いろいろな方にお会いすることになった。二人の日本人にお会いし、半月ぶりに日本語を話した。活水学園大学の高月麗子先生は、暮れまでBritish Museumでシェイクスピアなどをご研究で、中条愛子先生は9月までご滞在のご予定だった。近藤先生がケムブリッジにご滞在中のことなども伺った。他に、アメリカ人の英語の先生、イタリア人の美術研究家、アメリカ人のピアニスト。もう何年もここに住む老婦人は、祖父がWho's Whoに載った聖歌隊長だった由。ロンドンにいるのだなあと感慨も一入である。夢のようだ。例年、やっと終業式を終えたころで、昨年の今頃は、暑い最中に三日続けて、父母との進学が絡む個人面談で汗だくだった。漱石はロンドンで神経衰弱になり、蠅の頭ほどの細字を書くようになったが、私にとってのロンドンはどういうことになるのだろう。パックツアーではないので、全て自分一人でorganizeしなくてはならない。この貴重な機会を与えてくださった学校のためにも、神経衰弱などになってはいられない。それに、漱石のように、体面にこだわる必要もない。苦労は、必要なことや欲することをどのようにして可能にするかの方法から探さなくてはならないことだ、しかも英語で。自室の窓に、リチャードに教わっていたWilliam Morrisデザインのカーテンが掛かっている。昨年の高3の教科書に、モリスが取り上げられていたが、このようなところで、また巡り会おうとは。

7月24日(日)　晴

午前は、Westminster AbbeyとBuckingham Palaceへ歩いていくことにした。大英博物館の前を通り、BloomsburyからOxford St.を横切り、Shaftesbury Ave.に入り、MonmouthからSt. Martin's Laneへ来て、Leister Squareへ出た。並べば芝居の当日券が半額で手に入ると教わった所だ。Charing Crossへ向けての一帯は、劇場や映画館が多い。名前だけ聞いたことのある憧れの小屋が軒並みだ。84 Charing Crossはこの辺りだったのか。Nelson's Columnには、上野の西郷さんよろしく、頭に鳩が止まっている。Whitehallへ入ると、両側には役所が並ぶ。Downing St.を横切り、Parliament Bridge St.を越えれば、向かって右がAbbey,左がParliamentの建物で、手前に櫓を組んで化粧直しの最中の通称Big Benがある。

ウエストミンスター寺院は、日曜は礼拝があるので、一般の観光客は入り口から中を覗くだけ。ゴシック建築を見上げ、とくと眺めてから、目をthe Houses of Parliamentに転じる。ビッグベンはこういう大きさなのか！これがテームズ河なのか！船が、停泊していたり、航行していたり。

Birdcage Walkの公園沿いの道を、赤坂離宮にも似たバッキンガム宮殿へ行くと、運良く衛兵の交替中だった。つむじ曲がりのガイドブックには、衛兵交替には“Don't go.”と書いてあるが、私は物見高いお上りさんだ。熊の毛皮の帽子も、赤い制服も絵のようで姿勢が良い。顔は目深い帽子で見えない。楽隊もある。ふと気がついたが、イギリスへ着いてから町で制服の軍人や兵隊に会ったことがない。Queen Victoria Memorialを眺め、St. James Parkを右手に見て、The Mallを歩き、再びTrafalgar Squareへ出た。人でいっぱいだ。少年たちが、ライオンによじ登っていた。来た道を戻り、MichelinのLondonを買い、宿で昼食にした。

午後は、ロンドンで一番行きたいと思っていた大英博物館へ。日曜は午後2時開館だ。ここの展示物はほとんどが自国の歴史文化ではなく、海外から集めてきた大英帝国の(略

奪)力を誇示するものだ。

エジプト文字解読の発端となったロゼッタストーンは予想したより小さい。石碑は薄暗がりの中でじっと佇み、見る人の想像力を飛翔させる。

広いミイラ室2室は圧巻だ。内棺は大きな目と直毛の黒髪の人体型に美しく彩色された美術品。ヒトそのものは、きっちり白布に巻かれて数千年の歳月を経、裸形ではないから顔など見えない。ラメセスII世のものとて、黄金のマスクの下は謎のままである。ミイラの数の多いことに驚く。猫や鳥の布巻きミイラまである。

先史時代(c. 3100 B.C.)のミイラJinger Jimは、人間の現実を直視させてくれる。すべての装い、肉付きまでも取り去った後のヒトは、もう5千年以上も骨に皮の張り付いた姿のまま、膝まづいてうつ伏せ続けている。黄泉の世界への旅にいつ出かけるのだろうか。ガラスケースに納められ、衆目に曝されて、羞恥に耐え難い思いをしているのではなかろうか。かわいそうに！

1階8室はElgin Marblesの部屋だ。KeatsはOn Seeing the Elgin Marbles for the First Timeの中で、次のように詠っている。

So do these wonders a most dizzy pain,
That mingles Grecian grandeur with the rude
Wasting of old time——with a billowy main——
A sun——a shadow of a magnitude.

第14室にはポートランドの壺がある。藍色の地に白でペレウスと彼の不死の花嫁テティスの物語が描かれている約25センチの高さの非常に美しいものだ。深い青さに魅せられ、白い神話世界に吸い込まれいくようである。キーツの有名なOde on a Grecian Urnにおける「ギリシャの壺」は、特定の壺ではなく、1816年に収納されたエルジン・マーブルなどの印象をもとにして作られたとされている。ポートランドの壺はローマ時代のガラス製品であり、「ギリシャの壺」は大理石製であるが、このポートランドの壺に見入っていると、“Beauty is truth, Truth beauty”という句の真実が実感される。後にWedgwoodが触発されたことも納得される。1785年にウェッジウッドが製作した「ペガサスの壺」と対比してみるとおもしろい。

大英図書館らしい所蔵品、Magna Cartaは、灰色のA3より大きい羊皮紙に手書きで書かれ、King Johnの彩色押印がある。1215年、ジョン王が王権制限を承認した議会民主主義発祥の書類で、数枚ある。イギリス史上、現代に対して最大の影響を与えた宝物は、このマグナ・カルタではないかと考えつつ、静かな感動に浸った。

彩色手書き聖書類、シェイクスピアのいろいろな版、ShelleyやDickensなどの詩人や作家の原稿や書簡、ヘンデルなど大勢の作曲家の楽譜草稿、ニュートンの著作やダーウィンの『種の起源』初版本など、何時間眺めても飽きず、何日間通っても見切れないであろう。今日はマルクスの特別展をしていた。

日本人の団体客が来ていて、日本語がスーっと入るのが不思議な感じである。

7月25日(月)　晴

いよいよロンドン見物をせんと、宿舎に置いてあるパンフレットの中からガイド付き1日ツアーを選び、8時半に出て、Eustonまでバスで行き、9時過ぎのconnection busでVictoria Coach Stationの先の観光バス発着所に着いてみると、今日の分は満員で売り切れていた。明日の予約をする。さて、どうしようか。昨晩、夕食の時に、Green Lineで

Windsor Castleへ行ったドイツ人大学生と同じテーブルになり、不要になったcoachの半券を貰ってあったことを思いだした。歩いていると、お誂え向きに、グリーンラインの案内所の前へ出た。すぐに予約してくれ、タイミングのいいことに、すぐ近くのバス停から、10時20分に発車するという。10時55分にウィンザーに着いた。

賑やかな商店街から、すぐ、Henry VIII門に入る。具合よく、衛兵交替が始まっていた。広い敷地の中の幾棟もの宮殿内には、公開されている部分と、非公開の部分がある。女王のご滞在中には、旗が掲げられるそうだ。Round Towerは、いかにも城郭らしい。The Lower Wardを歩き、The Norman Gateを通り、North Terraceへ出て、The State Apartmentへ入った。まず、Queen Mary's Dolls' Houseへ。これは実物を全て十二分の一にしたミニチュアで、精巧で豪華なことに驚く。一隅には、質・量とも超一流のお人形とお人形の道具や衣装のコレクションがあって、目が釘付けになってしまう。

「人形の家」とExhibitionは別途に入場料を払う。こちらでは、主として、ダ・ヴィンチなどのデッサンの展覧会をしていた。

The State Apartmentに入ると、エントランス・ホールの武器・武具の展示にびっくりした。剣・槍・銃・甲冑などが、円や格子模様や斜め交叉といった幾何学図形を描いて、壁面一杯に飾られている。ウィリアム征服王が11世紀に築城を始めたと知れば、ウィンザー城が本来軍事要塞であったこと、現在も英国(女)王は英国軍の最高統帥者であって、「象徴」と位置付けられている日本の天皇とは全く異なる存在であることが理解される。その後、ロンドン塔を初め、城郭でのこのような武器の展示は常套であることを知ったが、この時初めて見た武器による装飾は、日本に相対物が全く欠落しているが故に意外であったし、その異質な美的感覚にカルチャーショックも覚えた。

大宴会場のThe Waterloo Chamber,儀式用のThe Garter Throne Room,シャンデリアの華麗なThe Grand Reception Room,ガーター勲爵士たちの肖像画や甲冑や紋章旗の並ぶSt. George's Hall,ゴブラン織と天井画に飾り立てられたThe Queen's Presence ChamberとThe Queen's Audience Chamber,(女)王の寝室や賓客用食堂など、きらびやかさに圧倒され続けた。今年(1983年)も英国は不況で、前年の失業者数は38万人と報じられたが、それでもウィンザー城やバイロン卿の館やデヴォンシャー公爵邸やハワード城を見た限りでは、往年の大英帝国の栄華は名残を留めているように思われる。昨年(1992年)、ウィンザー城が失火から完全修復不可能なほどの損害を受けたことは、女王ならずとも大変悔やまれる。

Lower Wardの前にあるSt. George's Chapelでは、毎年6月にGarter Serviceが執り行われる。後年、ある奇縁で知り合ったThe Queen's Chapel of the Savoy(ロンドンのサヴォイ・チャペル)のChaplainもこの行事のために春は多忙になられる。礼拝堂の内部は、壮麗な天井を支える列柱、75人の聖人を描いた西側大窓のステンドグラスなど、見事だ。墓あるいは弔い方の感覚が日本人とは非常に違うものもある。堂内に安置された立派な棺の上に、王や貴族の夫婦の大理石横臥彫像が実物大で置かれるeffigyは、当初は見慣れぬために、はなはだ異様に、薄気味悪くさえ感じた。

1時50分までウィンザー城にいて、以前より念願だったウィンザー付近のテームズ河を、橋の中央から上流も下流も心ゆくまで眺めた。川はゆったりとして、ウィンザー側には木々が深々と茂り、枝が水面に垂れている。洗濯かごにかくれたファルスタフが、陽気な女房たちに放り込まれたのは、このあたりに違いない。木蔭には、小船やボートやモーターボートや屋形船が漂っていたり、滑っていたり。上流も下流も木立におおわれている。夏のバ

カンスを舟で過ごす人は多いのだが、静かで、穏やかで、日本の観光地ならどこにでもある歌謡曲や演歌やロックの喧噪は全くない。takeoutしたチキンサンドィッチとレモネードを、橋の中央のベンチで広げ、贅沢な昼食にした。

ここからEaton Collegeへは、徒歩15分程だ。橋のイートン側は、田舎町の雰囲気。時計塔のある古めかしい門を入ると、芝生の中庭で、それを囲む僧院風の回廊の二階と三階に、教室や教員宿舎になっている部屋がある。薄暗い回廊の壁面には、第1次世界大戦で王と大英帝国のために戦死した75名のイートン校卒業生の氏名が掲げられている。夏休み中なので、シルクハットに燕尾服の生徒はいない。生徒の宿舎は町の中に散在しているそうだ。裏庭は非常に広く、敷地がいくつかのセクションに分かれている。去年日本から研修に来られた先生をご存じの女性職員の方が、犬の散歩がてら、いろいろ話してくださった。庭の突き当たりがテームズ河である。

4時過ぎのバスで帰宅。夕食時、高月先生、中条先生、アメリカ人の英文学の先生のMr. Caseに今日の成果をお話しする。今晩はRegent ParkのOpen Air Theatreへ行ってみよう。「徒歩30分」を信じてベーカー街近くを通って歩いたら、1時間かかり、入るべき門を間違えたりしたので、8時半に着いた時には、門は閉ざされ、中途入場はだめと言われた。まだ明るい公園内は、薔薇園あり、池あり、芝生あり。バスで帰宅。

7月26日(火) 晴

昨日予約したA Full Day Guided Tour of Londonのバスに無事乗車。初老の男性ガイドは、音に聞くcockneyで、[ei]と発音するところは全部[ai]。8は[ait]で、todayはto dieだ。[s]は[∫]なので、「サーペンタイン池」は「シャーペンタイン池」となる。おまけに、早口。バッキンガム宮殿やウェストミンスター寺院の説明は、聞き取れなくてもそれまでなのだが、集合時間と集合場所を聞きそびれたらおジャンだ。バッキンガム宮殿では、騎馬衛兵の交替時だった。女性衛兵の白馬の乗馬姿に憧れてしまう。

perpendicularの天井を持つウェストミンスター寺院の内部は荘重豪華だ。入り口近くに、花に囲まれた無名戦士の碑がある。St. Edward's Chapelには、The Coronation Chairが木製のいかめしい姿で据えられ、1296年にスコットランドから奪ったthe Stone of Sconeがはめ込まれていた。エリザベス一世とスコットランド女王メアリーのお墓が、Henry VII's Chapelを挟んで、反対側にあるのは、奇しき縁か。Poets' Cornerをゆっくり見たいと思ったが、団体なので、足早に進む。お墓は床下にあるので、お墓の上を踏んで歩くことになるのは、妙な、申し訳無いような感じである。ニュートンやファラディの立派なのや、ギャリックやマコーレイやヘンデルのもある。シェイクスピアのお墓は、故郷ストラトフォードのホーリー・トリニティ教会の中だが、像はここにもある。

昼食はヴィクトリア駅近くのレストランの2階で、全員同じフィシュ・アンド・チップス。元北野高校の生物の先生で、アメリカの大学で医学研究をされている方のご一家4人と相席になり、ウィンザー城のことなど、お互い不案内の土地のこととて情報交換に励んだ。

St. Paul's Cathedralは、Prince CharlesとPrincess Dianaの結婚式の行われた聖堂である。結婚の誓言から、「汝、夫に従うや」の句を省いた新しさが記憶にある。聖歌隊が素晴らしいので、暇があったら聞くように勧められたが、今回は暇が作れなかった。

Her Majesty's Tower of Londonは、漱石の『倫敦塔』、William Harrison Ainsworth, The Tower of London(1840)の邦訳や、Shakespeare, Richard IIIなどから、イメージが作られていた。不気味な門を潜ると、観光客が群れている。中央のWhite Towerは現

在は宝物館で、王冠、the Star of Africaという世界最大のダイヤをはめた王笏、白テンで縁取ったガウンを初め、Crown Jewelsの数々が展示され、見物人の長い列ができている。地下室は、武器・武具の莫大なコレクションである。Royal Fusilier's Museumは軍事博物館で、軍服、戦争画など多くの収集品が見られる。Traitors' Gateは、テームズ河から小舟で運ばれてきた囚人が舟ごと通り、決して再び娑婆へ戻れぬ半月形の門である。門扉の上半分は斜め格子、下半分は縦格子の樫材。門内に河の水が引かれ、囚人は石の階段を12、3段登って、城内の庭に入る。Tower Greenは処刑場で、黒い大烏がいた。烏がいなくなると、ホワイトタワーも大英帝国も崩壊するという言い伝えがあるために、烏の羽を切って飼っているそうだ。漱石はこの烏の先祖を見たのだ。Sir Thomas Moreも、Anne Boleynも、Lady Jane Greyも、Sir Walter Raleighも、烏に不吉な思いを強めたであろう。Bloody Towerには、行く暇がなくなってしまった。Bell Towerの2階にはトマス・モアの、3階にはエリザベス女王の幽閉されていた部屋がある。出口の手前で見上げた独房の窓に、紅ばらが飾ってあった。アン・ブーリンの部屋で、その右隣りにはガイ・フォークスが捕らわれていたそうだ。

門外へ出ると、Tower Bridgeが眼前にある。歩きたいが、後日に譲ろう。近々ここでfestivalがあると、地下鉄の広告に出ていた。

夕食の食堂のドアを開けて入ってきたのは、何と、ベアトリスだ。一瞬目を疑った。彼女も棒立ち。それから跳びついてきた。ペン・クラブに払い込んで部屋を借りているそうである。若い頃、ヴァイオリンを習い、二度目のご主人はヴァイオリニストだったそうで、室内楽が一番好きなのだという。たちまち意気投合し、明晩聞きに行くことにした。彼女は前売りを買ってあるので、私は少し早めに行って、当日券を買うつもりだ。

7月27日(水) 晴

朝、CATHAYへ電話を入れ、帰国便の確認をした。イギリスの電話は、電話機の仕組みが七面倒で、すこぶる掛けにくく、実に苦労する。

次に、King's Crossへ行き、長蛇の列に並んでエジンバラとリーズへの往復切符の前売り券を買うのに時間がかかった。米語ではa round-trip ticketが英語ではa return ticketとなる。

次にベアトリスに教えられて、芝居やコンサートの情報紙What's Onを見て、Barbican Theatre近くの切符売り場でMacbethの券を買う。帰途、ウェストミンスター寺院の書店で、先日買いそびれたガイドブックと本2冊を買い、Oxford St.とRegent St.を歩いて帰る。

夕食後、ベアトリスとバスでWigmore Hallへ出かけた。バスの番号と行く先や乗り方を、とても親切に教えてくださった。

一番安い当日券が1.80ポンド(約700円。1ポンド=385円として)。日本の音楽会では考えられないお安さである。Takács Quartetの演奏で、次のような曲目だった。

Haydn : String Quartet in D, op 64, No 5, The Lark
Dvořák : String Quartet in A flat, op 105 (B. 193)
Brahms : Quintet for piano and strings in F minor, op 34

ハンガリーのカルテットで、ピアノはJenö Jandóの、とてもよい演奏だった。『ひばり』はone of my favouritesでもあり、素晴らしい晩だ。このホールは、クラシックな内装で、室内楽に向いている。

開演前に、ベアトリスに、「何をお飲みになります？」と尋ねたら、“cider”だった。3年3カ月暮らしたアメリカで“cider”と言えば“apple juice”のことだ。イギリス英語が違うと思わず、それでも念のために“Non－alcoholic?”と尋ねたら、“Yes.”だった。咄嗟に日本人らしいyesとnoの間違えをしでかし、ジュースと思って一気に干した。強くて悪酔いし、コンサートの始まる前に空を踏む感じがしてきた。隣席の家族連れに、「ciderなんか、飲んじゃだめよ。」と言われた。前の方の席のベアトリスは平気らしい。

7月28日(木)　晴

昨日は、シェフィールドの講習で一緒だったCharlieと奥様が食堂に入って来られ、びっくりし、ベアトリスと4人で再会を喜びあった。短大を定年退職されたアメリカ紳士だ。ちょうど、London Theatre Guideで何に行こうかと品定めしていた折で、最も評判のCatsに決め、今日はチャーリーも一緒に券を買いに行くことになった。Druary LaneにあるNew Londonに行ったが、売り切れ。今秋11月分まで売り切れているそうだ。もっとも、20ポンド出せば、当日売りが買えるそうだ。近くのドルアリー・レイン劇場で上演中のThe Pirates of Penzanceの券を買った。それから今日はThe National Gallery of ArtとNational Portrait Galleryに行くつもりと告げると、どうせ散歩がてらだから、美術館の前まで連れて行ってあげようとおっしゃってくださった。一人で迷いながら歩くのが心細くなっていた折でもあり、嬉しかった。今回の旅は、行く先々で幸運がついてまわるように思う。My Fair Ladyの面影はなく、ガラス張りのmallといった、一風変わった商店街のCovent Gardenを抜け、ナショナルギャラリーのtea roomで、一緒にグレープフルーツジュースで一休み。

一昨年の1学期に、高2の英文法の冠詞の例文に“a Turner”というのがあったので、図書館からターナーの画集を借りだし、『坊ちゃん』の「ターナー島」のくだりを読んで聞かせたりしたところ、夏休みにロンドンへ行った一人の生徒が、「ナショナルギャラリーでターナーを見ました。」と、ターナーの絵葉書を送ってくれたことがあった。ナショナルギャラリーは46室もあるので、忙しい見学者のために、16の必見の絵画を選んで、“a quick visit to the National Gallery”というパンフレットにまとめてある。私はともかくも全部眺めたい。Turnerの海とConstableやGainsboroughの樹木を特に見たいと思っていた。ターナーの、霧の彼方で燃え上がり、沈むこともできないでいるような海上の太陽の、魔術にかけるような激しさは、心を高ぶらせ続ける。いつかTate Galleryも訪れてみたいと思っている。一方、イギリス風景画の鬱蒼とした美しい樹木は、絵から樹木の芳香が発散されるようで、見る者に安らぎを与える。どちらの絵の前からも去りがたい。

国立肖像画美術館には、宗教画的なRichard IIやChaucerから、新しいところではチャールズ皇太子とダイアナ妃までの王侯貴族、政治家、文人などの肖像画が集めてあり、Queen Victoria, Darwin, Elgar, Garrickの大変魅力的な肖像画もあった。私には、政治家などよりもShakespeare, Blake, Keats, Byron, Jane Austen, the Brontë Sisters, Dickens, Scott, George Eliot, Carlyle, Henry James, Oscar Wilde, Thomas Hardy, Joyceなどの方が面白い。

Sohoを少し歩き、Hillの店も覗いてみて、Chatto & Windusの前を通った。

Theatre Royal Druary Laneは、1663年創立の王立劇場で、建物は改築されているが、My Fair LadyやOklahomaが当たりをとった劇場である。開演前、中央の吹き抜けのホールで女性3人のピアノ・トリオのサービスが，いやがうえにも気分を高める。

The Pirates of Penzanceは、愚かな乳母が、主人から託された坊ちゃんをpilotに育てるべきところをpirateにしてしまった、というGilbert & Sullivanのミュージカルである。歌詞が理解できないのは仕方がないとして、台詞も聞き取れない。早口の歌は、耳の横をかすめて飛んで行く。隣席の紳士は元海軍軍人で、佐世保に寄港したことがあるそうで、日本に好意的だ。退役後は船舶会社に勤め、海が好きで海賊ミュージカルを観にきておられるわけで、生活が一貫しておられる。「私にも歌はわかりませんよ。」と慰めてくださった。帰ってから、Mr. & Mrs. Davidsonやチャーリーやヴィンセントさんにこの話をした。

7月29日(金) 晴 暑い

船でHampton Courtへ行こう。昨日見ておいた船着き場へ行くつもりで、Enbankmentで地下鉄を降りたら一駅違った。Westminster Pierへ向かうと、足早に同じ方向へ歩いて行く同年配の女性は、案の定、同好の士。運よくすぐ乗船券が買え、5分で出航だ。並んでデッキに腰掛ける。道連れはアメリカの写真家で、今夏娘の行っているBrown University近くの出身だそうだ。Kew Gardenまでの2時間を、一緒に他愛ないおしゃべりをして過ごした。

船はParliament buildings, Nightingale's Hospital, London Castle, Tate Gallery, Henry Moor's statue, Chelsea Hospital(1692年にWrenによる建築),King's Church (Henry VIIIがJane Seymourと結婚した教会で、下部のみ古い),Chelsea居住地区, Hammer's Bridgeと進んで行く。かもめが舞う。Towerは12世紀のものだが、今はパブだ。Richmond Lockへ入る。約5分で上の水位に上がった。右岸には、芝生付きの家々の自家用車ならぬ自家用船が、屋敷の庭先の川岸に繋いである。左岸には、深い緑の堤や木立が、水面に影を写していた。1770年の橋は二重橋そっくりの石橋だ。Teddington Lockに入った。Runnymedeはマグナ・カルタを調印した場所である。炎天下に帽子もかぶらず4時間半デッキにいて、足にサンダルの網目がつくほど日焼けした。

ハンプトン・コートは、ヘンリー八世がCardinal Wolseyから召し上げた部屋数500ほどの宮殿であるが、現在は王室は使っていない。壁画、天井画、フレミッシュ・タペストリー、肖像画など立派だが、家具はあまり入れてない。台所とワイン貯蔵庫は一見に値する。〔写真5〕

Haunted Galleryを探して一階を2回歩き回ったが所在がわからず、案内人に尋ねたら、何と二階にあった。王に殺された王妃Catherine Howardの亡霊の声は聞こえてこなかった。この幅の広い廊下の写真を撮る間、好々爺の警備員は、いないことにしてくれた。

Tudor Tennis Courtはヘンリー八世によって造られたテニスコートの原型で、屋内にあり、今日も球を打ち合っていた。

円錐形に刈り込んだ大木の庭園は、一度見たら忘れられない。サイドガーデンに草花が咲き乱れている。Lion Gatesの近くに、生け垣のMazeがあるので、入ってみたら、これがなかなか一筋縄にいかず、出会う大人も子供も顔色を変えて焦っている。夜まで出られなかったら...

帰途は列車でWaterlooへ出て、地下鉄でOxford Circusへ出て、バスでラッセル・スクエアへ。念願のテームズ河の船旅を果たせた！

7月30日(土)　晴

午前はFoylesで本を買い、日本へ直送して貰った。日本では、洋書は高すぎる。

午後はRegent Parkの野外劇場へマチネーのA Midsummer Night's Dreamを観に行った。今夏は他に、As You Like ItとVirtue BesiegedとBashvilleを演じている。The New Shakespeare Companyの公演で、演出はChristopher Biggins。TheseusとOberonをPeter Woodward, HippolitaとTitaniaをJulie Dawn Cole, PuckをGraham Chinn, Bottom は Berwick Kalerであった。衣装は奇抜だった。演技は良かった。舞台は木立に囲まれた芝生で、岩もあり、階段で奥へ続いている。どういう仕掛けか、倒木の幹から、花や茸が急に現れたり消えたりするチャーミングな森である。終演後、仕掛けを確かめようと舞台に近寄ったら、上半身裸の警備の2人の少年に、制止された。

7月31日(日)　晴 夕立

朝食後、セントポール寺院で聖歌隊を聞こうか、Central Criminal Courtに行こうか、朝市にしようか、アンティークの蚤の市にしようか、などなど迷ったが、Hyde ParkのSpeaker's Cornerへ行くことにした。Marble Archをくぐる。ここは公園の東北の隅で、広い芝生の手前の繁みの下の空き地。そこここで、演説をしたい人々が、思い思いの場所に陣取ってスピーチしている。演台の上で、この暑いのに冬の山高帽に同じ黒のスーツに身を包んだ牧師さんが、神の恩寵について、手を振り上げ、大口を開け、熱をこめて説教の最中だ。黒人が、白い半袖シャツにカーキのジーンズで、社会問題をブっている。あちらの隅では、白人青年が、"Turn to God and read the Bible!"と叫ぶと、黒山の人だかりの中から、"Is democracy in Heaven?"と野次がとぶ。掲示用の横長の幕を2人の青年に持たせて、地面に輪を描き、しゃべるためにしゃべっているスリーヴレスドレスの若い黒人女性もいた。一人携帯椅子に腰掛け、"THE END IS AT HAND"(終末近し)と書いたプラカードを頭上に掲げている眼鏡の白人青年は、自身はすこぶる真剣なのだが、立ち止まる人もない。なるほど、これが日曜日のスピーカーズ・コーナーなのか。〔写真6〕

広い芝生は異例の晴天続きと暑さで白茶けてしまっている。雨が降らないと、青さは取り戻せまい。ロンドンは、白人のほか、インド人、黒人、中東の人々、東洋系の人々などの人種のるつぼの国際都市で、観光客でいる限り、自分が黄色人種であるためにコンプレックスを持ったことはなかった。The Serpentine Pondのほとりには、ズラリとデッキチェアが並べられ、家族連れ、子供連れ、犬連れ、二人連れなどが日光浴を楽しんでいる。人工池は遊泳禁止で、家鴨やボートがのんびり浮かぶ。池の中程にはピーターパン像があるそうだが。芝生や木陰にも、ラフな服装で憩うグループやじゃれまわる犬。四阿の野外音楽堂では、制服のブラスバンドが演奏していた。とさかヘルメットのパンクの少年少女や、とさかをバラ色に染めている子もいる。英国はこのような自己表現に寛容だ。日本人は宗教的には寛容というよりご都合主義で、あれこれ混ぜて取り入れているが、個人の自由あるいは個性の発揮に対しては極めて不寛容ではないか？珍しく黒雲が湧いてきた。芝生にはお待ちかねの散水になろう。飛び込んだバス停は、かなりの降りを避ける人々で満員になった。30分して小止みになり、オックスフォード通りに出てみると、日曜なので、デパートも商店も全部休業で、レストランとカフェテリアと、二、三の小さな土産物屋が店を開けているのみだった。日本の日曜とは違って、ホントに安息日っぽい。

明日はリーズに発つが、1週間後にまた戻ってくるので、スーツケースや書籍類を、ヴィ

ンセントさんにお願いして、事務所で預かっていただき、支払いをすませた。ベアトリスに教わって、donationをbonus boxに入れた。

8月1日(月)～8月6日(土)

The University of LeedsのFairbairn Houseで開催されたThe 8th Brontë Conferenceについては、『学習院女子部論叢第5号』で報告したので、ここでは省略する。

8月7日(日) 晴

ヴィクトリア駅の長距離バス営業所で、8月8日のCambridge行きの往復切符と、8月10日のCanterbury行きの往復切符を、long queueを作って買う。夏休みのため、どこもかしこも旅行者で大変混んでいる。ドイツ人らしい男が、待ち切れずに列に割り込み、係員に注意され、それでもまた隙を見て窓口で掛け合い、係員にたしなめられ、ついに大声で罵詈雑言をわめき散らしながら、スーツケースと靴でドアを蹴っ飛ばして出て行き、列を作って待っていた人達の爆笑を買うというひとこまもあった。手順を間違え、ヴィクトリアへ先に来たので、またキングス・クロスへ戻り、列を作り、エジンバラ行きの切符を確かめた。Inter－City Saver ticketは日本で調べたときは28ポンドだったが、32ポンドに値上がりしていた。

午前は予約などで潰れたが、午後、Bathへ行ってみようかとPaddington駅へ出ると、都合よく、数分で発車する。あと2時間早ければ、SalisburyやStonehengeまで行けたかもしれないのに・・・時刻表を見て、帰りの汽車を考える。

Bathまで、Inter－Cityで1時間15分ぐらいで、自由が丘に似た静かな佇まいの駅に着いた。早速ガイドマップを買う。ホームから、駅の南側が高台の住宅地になっているのが見えた。駅の北側を15分ほど歩くと、River Avonによって馬蹄形に囲まれた有名なローマ風呂などのある賑やかな繁華街へ出る。バース(浴場)は、紀元前500年頃、ある王子が癩病を治療したという伝説に由来するが、ローマ軍は43 A.D.に英国を占領し、410 A.D.に去るまで、大浴場として用いていた。その後、僧院が治療用に使用し、やがて廃墟になってしまったが、16世紀末から発掘が始まった。Queen's Bath(女湯)と、さらに大きなKing's Bath(男湯)の芋を洗うような情景のの絵画(1672年)に、当時が偲ばれる。1727年に金メッキのミネルヴァの頭像が発掘され、浴場再建に拍車がかかった。現在、50メートルプールのように見える長方形のGreat Bath,円形のCircular Bathなどのほかに、East Bath, West Bathなどが復元され、湯をたたえている。約46度のお湯が湧出しているそうだ。「王の浴場」に手を浸してみたら、40度ぐらいだろうか。驚いたことに、この熱いお湯の湯船に鯉が飼育されていた。浴場の周囲には柱廊があり、屋根を失った二階の列柱上には、立像神像が並ぶ。遊歩道に沿って歩くと、排水口、水門、復元中の浴場などを、ガラス越しに見学できる。隣接の博物館には、発掘された煉瓦、タイル、彫像、食器などの展示と、手工芸品の売店もある。

baths(浴場)から続くコリント式の柱の並ぶジョージ王朝風Pump Room(ポンプ室)は、18世紀以来上流社交界の人々の社交場としてFanny Burney, Evelinaなど、小説にも頻出する。今は大広間にシャンデリアがきらめくティールーム。片側の一段高い舞台では、ピアノトリオがブラームスを演奏し、スコーンと紅茶の素敵なティータイムは完璧だ。外に出ると、陽が眩しい。973年にサクソン王エドガーが戴冠した隣のAbbeyは、15世紀に建て替えられたもので、perpendicularの天井とステンドグラスがとても美しい。

この東側には広い芝生の公園があり、六角形の四阿では、ブラス演奏をしていた。一隅には英国国旗のデザインの花壇があり、人々は折り畳み椅子を持って来て、思い思いにひなたぼっこを楽しんでいた。

北へ進む。この辺りは歩行者天国。1771年建設のAssembly Roomとその地下のMuseum of Costumeを訪れた。この衣装博物館はヨーロッパでも屈指のものだそうで、眺めていてとても楽しい。

The Circusへ出、Brock St.を西へ歩くと、広々とした芝生を前にして、Royal Crescentが現れた。半月形に3階建の建物が隙間なく立ち並ぶのをCrescent(三日月)と言うのだが、ここのは規模が大きく、高級住宅地だそうだ。社交に明け暮れていた貴族達が住んでいたのかもしれない。小さいクレッセントはエジンバラにもあったし、ロンドンのリージェント・ストリートもこの一種だろう。

川沿いの遊歩道を歩くと予定の列車に間に合いそうもないので、町を突っ切って駅へ帰り、数分の暇に、裏手のRiver Avonの橋から、ストラトフォードにあるものとは別の同名のエイヴォン川を眺めた。

8月8日(月) 晴

9時発のバスでケンブリッジへ。駐車場からinformation officeへ行き、ちょうど定員に近いguided tourに加わった。ガイドは老紳士である。King's Paradeを渡り、白亜の直方体の四隅に尖塔の聳える後期ゴシックの華、16世紀最大のステンドグラスを持つKing's College Chapel(1446−1510)へ。祭壇にルーベンスの"Adoration of the Magi"が飾られている。"magnificent"(壮麗な)という語を具現する建造物は、このキングズ・コレジ・チャペルや、ヨーク・ミンスター、カンタベリー大聖堂、ウェストミンスター寺院のような宗教建築。世俗的華美を加味すれば、ウィンザー城、チャツワース・ハウス、ニューステッド・プライオリなど。このチャペルの石材は舟で200マイル運んだのだそうだ。Senate HouseとClare College(大学院大学)の間の路地を抜け、Caius Collegeの Humility, Virtue, Honourに捧げられた門の前から、クレア・コレジの芝生を横切り、Trinity Hall College(1350年創立。1988-9年、St. Edmund's Collegeに滞在したときの2軒目の大家さん、Dr. Alshaiiの出身校)へ。エリザベス一世当時の図書館には、chained booksがあるという。River Camをthe Backsから見た。憧れのケム川の低い両岸には芝生が広がり、水は平らで、静かで、プールのように穏やかだ。竿をついてパント舟が行きかっている。〔写真7〕

ケンブリッジ最大のTrinity Collegeは、1546年にヘンリー八世創立の王立大学で、チャールズ皇太子の出身校である。ここからNewton, Bacon, Byron, Macaulay, Tennyson, Thackeray, Bulwer Lytton, Dryden, Rutherford, Bertrand Russellを初めとする偉人が輩出した。手初めに、1676年にChristopher Wrenの建てた図書館の中を見学した。部屋の中央の通路を挟み、両側に開架式の書棚が何十あっただろう。蔵書数9万冊。ガラスケースには、Milton, Paradise Lostを初め、稀覯本の展示もある。Jacobian風の建物の前に広い芝生のcourtがあり、それを挟んで、学寮が威容を誇る。Oxbridge中で最大のこの中庭には、Grammar, Law, Divinity, Physicsを表す像が立っている。the Backsを繋ぐのは、やはりWrenの建造した石造の三重のアーチ付きの橋Trinity Bridgeだ。

次に、川沿いに隣接したSt. John's Collegeへ。1511年にLady Margaret Beaufortの創立によるこの学寮は川を挟んで東西に広い。正門のSt. John(1666)の彫刻の美しさは

比類ない。ブロンテ姉妹の父Revd. Patrick Brontëの母校でもある。裏手には、1831年にNew Courtと繋ぐために造られた形の美しい渡り廊下風のthe Bridge of Sighsがある。guided tourはここで終わった。

表通りを戻って、Queens' Collegeへ。Queen Margaret of AnjouとEdward IVの妃Elizabeth Woodvilleがパトロンであったのでで Queens' なのである。

St. Andrew's St.へ出て、Emmanuel Collegeへ。ここにはWrenの建てたChapelとCloisterがある。ハーヴァード大学創立者John Harvardはここで学んだ。(数年後、隔週に、学長官舎へ、Mrs Elizabeth Brewerのsupervisionを受けに通う幸せに恵まれることになるとは、神ならぬ身の知る由もなかったが。)

さらに道を上がると、右手にChrist's Collegeがある。これもSt. John's Collegeと同じく、Henry VIIの母、Lady Margaret Beaufortによって建てられた。広い中庭には、上野の国立博物館前のユリの木(tulip tree)のように大きなmulberry tree(桑の木)がある。この木陰で、ミルトンはLycidasを書いたといわれる。Milton研究会で、Paradise Lost, Paradise Regained, Samson Agonistesなどを齧ったときには、離れた存在として畏敬していた遙かな遠い国の偉すぎる詩人と、同じ木の下に立ち、不思議な感動を覚えた。

heffersでCambridge Collegesと絵葉書を買う。Branwell Brontë's Flute Bookはない。3軒目の楽譜店Cambridge Music Shopで棚に1冊だけあるのを見つけ、Anne Brontë's Song Bookとともに買った。手書きのファクシミリであるから、清書しなおさなくてはならないだろう。学寮のガウンを売る店のショーウィンドーを眺めたり、青空市場の野菜や果物を眺めたりしてから、両岸の緑が川面に垂れて濃い蔭を落とすケム川のほとりにしばし佇んで憩った。Girton Collegeへ近藤いね子先生をお訪ねしようか、いやいや予告なしにお邪魔しては悪い、それにGirtonまで2キロ歩いたら、帰りのバスに乗りそびれるかも知れない、と逡巡し、5分歩いて引き返し、郵便局からお手紙を投函した。

ペン・クラブに帰宅すると、近藤先生から、「内田道子先生がいらっしゃるので、一緒に8日朝10時半からのKing's College Choirを聴きにいらっしゃい。」というご懇篤なお誘いのお手紙をいただいていた。1日違いで残念なこであったが、ありがたい先生方である。内田先生は大学時代、E. M. Forster, Aspects of the Novelの小さな輪読会(浜田先生もメンバー)の顧問と、弦楽部Ensemble Fiolitaの顧問を引き受けていただいたのに、大変ご無沙汰しており、お懐かしい。(10月3日Prof. Francis Beryによる"Coleridge and Kubla Khan"という講演会でお二人に、また近藤先生には、関西大学でのHardy大会でもお目にかかった。)

8月9日(水) 晴

9時15分発のCity Link Service 190でOxfordへ。駐車場から少し離れたinformationで地図を買う。表道路に出ると、ミニバスツアーの運転手兼ガイドが、「あと一人だけ乗れるんだが。」と呼び込んでいるのにぶつかった。walking tourと異なり、メモを取る暇がない。Merton, St. John's, Trinity, Kebleと、市内を小1時間走り回り、印象だけを残して終わった。

手初めに、High Street沿いに歩く。浩宮殿下の入学なさるMerton Collegeは、水曜日は閉鎖されているので、前を通ったのみ。The Highの西側は大学の建物で、間隙を縫って、銀行や商店が点在する。Brasenose Collegeの奥のLincoln Collegeでは、食堂に入っ

た。一段高い教壇状の台の上に、教員用のテーブルHigh Tableがあり、このひな壇に直角に結婚式風に学生用の長いテーブルとベンチが3列並ぶ。John Wesleyは、結婚するまで25年間、ここでFellowであった。

All Souls Collegeの双子塔付きの門の装飾に見とれた。

Queen's Collegeは入り口に"THE COLLEGE IS CLOSED TO VISITORS"という札が立ててあるが、覗くと、門から真っすぐに中庭を突っ切って建物へ続く歩道があり、両側に、赤、白、黄色の花が植えられていた。

Magdalen Collegeは、午後2時からオープンなので、道を引き返す。

Queen's Laneの路地を曲がって、New Collegeへ。ここはMr. Coxの出身校である。コレジの中は広く、奥へ進むと、僧院や、Monument Towerという中世の城の塔のような所へ出た。ここのチャペルは、オックスフォードの中でも、最も美しいものの一つで、祭壇の奥の、通例ステンドグラスになる壁面には、キリストを中心に、約50人の天使や聖人の像が飾られている。人気のない小諸城址のような趣のあるところを迷いながら歩くうちにCatte St.に達し、有名なBodleian Libraryへ。図書館を大切にする人々の気持ちが伝わってくるのを感じた。

Broad St.に出ると、Blackwell'sがある。古書部を覗き、Oxford: the Golden Guideと絵葉書を求めた。すぐ隣がTrinity Collegeである。中を歩き回っていると、いつのまにかSt. John's Collegeの中に来ていた。この学寮は最も広く、裕福なのだそうで、美しく手入れされた芝生や花壇や木立を持つ庭園は広く、町中とは思えない静寂が漂っていた。裏から入って、St. Giles' St.に面した表門から娑婆に出てきた。

広い大通りの向かい側は、お誂え向きにAshmolean Museumだ。たまたま裏の入り口から入り、一階の日本の屏風や中国の陶磁器などの展示を見ながら表玄関まで来て、館内案内で目当てを探す。一つはHillの楽器コレクション、もう一つはSir Arthur Evansのクノックスの遺跡発掘品の室である。ヒルの展示室は、弦楽器の古楽器、珍しい変形楽器、螺鈿や彩色のある美術品の数々。Andrea Amatiの黄褐色の"Charles IX"(1564)や、Antonio Stradivariの赤い"Le Messie"(1716)の前では、優美さに心を奪われ、音色を想像して立ち尽くしていた。浮世を忘れていると、たちまちけたたましいベルで、現世に引き戻された。警備員が閉館だと言う。4時閉館とは！言われて見ればなるほど、正面入り口にはそう書いてあった。エヴァンズには心を残し、パンフを求め、次回に譲る。

University Museumは残念ながらカットし、Cornmarket St.を行き、再びHigh St.をまっすぐにモーダリン・コレジへ向かう。現代の桂冠詩人John Betjemanの母校である。先日クラマー夫妻が、ベッチマンの詩の面白いものをいくつか読んでくださったことを思い出す。かってOscar Wildeも学んだので、受付の学生たちにワイルドの居室を尋ねたが、だれも知らなかった。帰国してからワイルド協会の井村君江先生に、ワイルドの部屋の向かい側から、川越しに友人が恋のさや当てにピストルを打ち込んだことがあり、その弾丸の跡のあるガラス窓が保存されていて、その部屋はtea roomになっていてお茶が飲めると教わったが、後の祭り。Bell Towerの下には、Holywell Mill Streamがゆるやかに流れている。奥の鹿園には鹿がいた。昨日ケンブリッジの徒歩ツアーで一緒だったアメリカ人の女子大学生とばったり遭遇。声をかけるとびっくりして、「昨日と服が違うので判からなかったわ。」「明日はどこ？」「ヨークよ。」と彼女。「私はカンタベリー。」「じゃ、明日は会えないわね。」このような邂逅も気楽な旅の楽しさを増す。モーダリン橋の上から川面を眺めると、川幅4～5メートル、両岸から深々と樹木が川面に覆いかぶ

さり、薄暗く、静寂そのものである。ずっと立ち尽くしていたい。

High Streetを戻ると、左手にUniversity Collegeがあるが、closed。挫けず守衛に頼むと、快く入れてくれ、道順を教えてくれた。目指すはShelley Memorialである。広い8角形のドーム状の室で、天井は青く、樫材らしい羽目板の上部は白壁の、盛夏なのに寒々とした空間に、左脇を下にして横たえられた大理石製の裸像が安置されている。像の乗っている畳1畳ほどの大理石の板を、黒ずんだ小鬼共が支えている。詩人の像を背に、上半身裸の婦人の銅像がある。彼女は黒地に白い流状紋のある石に腰掛け、右手を頬に当てて、詩人の死を悼み続けている。「幽玄」と評したい魅力に満ちていた。〔写真8〕

外に出ると、斜め向かいのUniversity Churchの美しい尖塔に登っている観光客が目に入った。背後には卒業式や学位授与式を行うSheldonian TheatreとRadcliffe Camera(図書館)がある。

High Streetを上りつめ、十字路を左折すると、ウルジー卿の発案創立になり、Tom Towerを持つChrist Church Collegeの前に出る。Alice in Wonderlandなどの作者Lewis Carrollは、本名Charles Lutwidge Dodgson(1832−98)といい、このコレジの数学教授だった。コレジの前を通り過ぎると、まもなくAlice's Shopに着く。物語りの登場人物たちや場面を描いた皿、タオル、置物、マスコットなどを、小さな店に所狭しと並べてある。

足を延ばしてSt. Aldatesを下り、Folly Bridgeに着く。ここはテームズ川とTrill Mill Streamの分岐点で、貸パント舟屋やレストランがある。パント舟でテームズ川を上下する人々から、昨夏生徒の見せてくれた写真を思い出した。ガウン屋、コレジ・マーク入りのネクタイやTシャツの店を覗きつつ、駐車場へ急いだ。

バスをMarble Archで降り、地下鉄に乗り換えた。入り口のそばの席が空いていたので、見ると、隣に同宿の喜多川愛子先生が掛けていらした。私はCharing Crossで下車し、パブレストランSherlock Holmesへ。一階はパブで、日本人の社用族らしいのが大勢騒いでいた。2階はこじんまりしたレストランで、一隅にシャーロック・ホームズの部屋を再現した一室がある。ソファ、外套、帽子、ステッキ、ヴァイオリン、実験道具の載ったテーブルなど。(この時、フィルム1本失敗したので、この後のカンタベリーも、ロンドンも、残念ながら写真はない。)メニューと紙ナプキンを記念に持ち帰った。地下鉄のホームに上半身裸の男がいて、電車が来たら、シャツを着た。今日の日本では考えられない。

8月10日(水) 晴

カンタベリーへのバスの車中、隣席の男がしつこく話しかけてくるのと、その英語が聞き取れないのとで往生した。本人は英国人と自称していたが、ホントかいな。発音に訛りがあるというどころではなくて目茶苦茶なので、紙に書いて貰おうとすると綴りも分からない。変な人と乗り合わせて疲れた。黙っててほしいヨ！彼には家族も定職もない。下車してからも、案内を買って出たり、町中で偶然出会ったふりをしたり。

町は城壁に囲まれている。バスはDane John Moundという小山を迂回して、しばらく走り、駐車場へ。informationは大通りのちょうど反対側にある。環状道路を大通りが貫通するのだが、駐車場が東京駅で、informationは新宿駅という感じだ。この間、徒歩20分ぐらいである。

ともあれ、Chaucer, Canterbury Talesを念頭におき、pilgrimsの参集したCathedralへ。大聖堂は、市の北東部に位置する。イギリスのお伊勢詣では今も盛んで、日本と同じ

く、信仰からというより、観光客で一杯だ。大聖堂の門も、東照宮ほどではないが、装飾が施されている。

この地はローマ時代以来Dvrovernvmとして知られた町で、410年にCantawarabrigと改名した。St.Augustineは、597年にここに来た。現在の大聖堂は初期のものではないが、602年以来、この聖域はキリスト教のメッカとなっている。

大聖堂の外観は重厚壮麗であるが、想像していたよりも簡素で質実剛健の趣がある。内部は高い天井のperpendicularの会衆席(nave)など、大主教の座にふさわしく、また、Wife of BathやSquireやYeomanやNunが馬を“canter”して詣でるに適した味わいが滲み出ている。ヨーク・ミンスターの壮麗豪華さとは一味違っていると感じた。

Thomas à Becketが1170年12月29日、Henry IIの4人の騎士に刺殺された場所が側廊に保存してあり、その情景を描いた大きな絵画が壁に掛かっている。英文学史で習った事跡が手に触れられる近さにある！

Henry IV(1367−1413)と王妃のeffigyや，Black Prince(1330−76)のeffigyもある。ケースに展示されている黒太子の武具、手袋、甲冑などは、弁慶のもののように大きい。中央の塔に登るつもりでいたのだが、明日の映画のロケ準備のために、今日はもうおしまいになってしまった。

大聖堂を出て、繁華街を抜け、Roman Pavementを見る。というより、その上を歩いた。これがローマ時代から2000年近くも続いた舗装道路なのだ！よく保ったものだ。

門の近くに、St. George's Towerが、時計を横に突き出している。ここは、戦争で破壊されたSt. George's Churchの塔を復活させたもので、Christopher Marloweは、この教会で洗礼を受けたと記録されている。この辺り、古い建物とガラス張りの商店などが、混在している。

門外へ出て、St. Augustine's Abbeyを訪れた。廃墟であるが、敷地も建物も広く、一幅の絵のようだ。歩き回って正面入り口を探すうちに、見覚えのある風景だと思ったら、大聖堂の境内に出ていた。

High StreetのTourist Officeへ向かって右側にEastbridge Hospitalがあり、小さな潜り戸から中に入ると、お祈りの部屋もある。Canterbury Weaversの横には、River Stourが流れている。旅をしてみて、どの町も川と結び付いているのだと実感した。

大通りの西側のWestgateは、donjon風の2本の円柱に挟まれた壁の部分が、わずかに通行できるだけ、アーチ型に抜いてある。典型的な城塞都市のgateだ。写真で見る門は写真でしかない。実際にその土地へ行き、量感や、感触や、圧迫感や、市内の市民の安心感などを感得することが門を「理解する」ということなのである。

8月11日(木)　晴

Foylesで本を買い、Sohoを歩き、Beareを訪れ、書籍小包を三つ作り、まとめて絵葉書を書いた。

Mrs. Davidsonは、アメリカ人の中世音楽の研究者で、夏の間、大英図書館に資料調べに来ておられる。外出時は車椅子で、中世のmiracle playの研究者である夫君が、いつも付き添っておられる。彼女が食堂におられるかどうかは、非常に美しい声なので、姿が見えなくてもわかる。ピアノもとてもお上手だ。夕方、ロビーのピアノでBranwell Brontëの手書きのフルート曲を、右手はフルートのメロディー、左手は即興の伴奏をつけて、ほぼ全曲弾いてくださった。

8月12日(金)　晴

午前中、郵便局から小包を出した。なかなかの大仕事だ。

午後は、歩いてHolbornへ出、まずLincoln Innへ。これはbarrister(法廷弁護士)養成のための四つの法学院のうちの一つで、広い敷地内に、教会と、時代を異にした幾棟もの建物がある。事務所で許可証を貰い、Innに入る。大きな図書室では、黒いスーツの若い男女が、白人も黒人も、音も立てずに、見学者の私に気迫が伝わるような必死の勉強ぶりである。この部屋に到達するまでにも、膨大な勉強があったのだろう。コピー機が使えないので、分厚い法律書や判例集を一生懸命にノートしている。

Innの本来の目的は旅宿であったので、一同でdinnerを摂り、会食を通して研鑽を積み、親交を結ぶことも、大切にされてきた。それ故か、食堂は結婚式場のように広く、名士の肖像画が飾られ、隣室にコーヒーのための小部屋が付属している。「写真を撮ってもよろしいでしょうか？」と尋ねたら、係員は、「わたしは見ていないからね。」と言ってくれた。イギリスへ来てから、親切に便宜を図ってくれる多くの人々との出会いの連続だった。渡英前には、対日感情が悪いのではないかと危惧していたが、皆に温かく遇され、幸運にも恵まれて、楽しい思いの連続である。

芝生の中庭を、栗色の髪の上に、慣習どおり、金髪のかつらをかぶった若い裁判官が少しはにかんでやってきた。厚かましくも写真を撮らせていただく。門に隣接した書店で、Lincoln's InnとGray's Innの絵地図を求めた。

Chancery Laneを右折するとRoyal Court of Justice(王立裁判所)で、見学できる。赤煉瓦の非常に大きなゴシック調のいかにもイギリス的建物で、60ほどの法廷があった。ある法廷では、お皿のように浅いカールしたブロンドのかつらをかぶった黒い法服の若い女性判事が審理中なのが、窓越しに見えた。

Dickensの家がこの近くにあるような気がしていたが、近くにあるのはOld Curiosity Shopだった。しかし、それを忘れて、ディッケンズの家まで30分ほど歩いた。各部屋には、家具、陶器、初版本、草稿、家族の肖像画、登場人物の挿絵などが並べられ、系図まで張ってあった。台所も公開されていた。活力溢れる典型的ヴィクトリア朝作家が、暖かい心でメロドラマと誇張とに託した150年前のロンドンの薄汚い雑踏を思い描く。

Old Curiosity Shopは、リンカーン法学院と王立裁判所の中間に位置しているので、また同じ道を戻った。緑色の店は、ディッケンズの頃から同じ店構えなのであろう。小さい店で、骨董品や古物が、所狭しと足の踏み場もないほど、ぎっしり並べられていた。二階は屋根裏部屋で、狭い急な階段を登ると、床にも一見ガラクタとしか思えない品々が置かれていた。値が高いのか安いのか、わからない。

足が棒になった１日だった。

8月13日(土)　晴

明日はエジンバラへ発つので、不要と思われる書物やパンフレット類を小包にして東京へ送った。ヴィンセントさんが空き箱を探してきてくださった。知らぬ土地では、このような空き箱探しが意外に大仕事で、ヴィンセントさんのご好意が身に染みてありがたい。午後、RSCのマチネーのMacbethをBarbican Theatreへ見に行った。バービカンというのは、中に大小の劇場や映画館を含む人工の一大劇場センターである。標識を頼りに噴水のある屋外カフェテリアまで歩いてくると、リーズでお別れして以来の児玉先生にばったりお会いした。隣席の日本人の専門学校生は、語学研修のために4月からロンドンに来て

ベビーシッターをしているのだが、家事手伝いばかりで、あまり遊んだり旅行したりできなくて、とこぼしていた。でも本場の『マクベス』が観られるじゃん、と慰める。

Bob PeckのMacbeth, Sara KestelmanのLady Macbeth, David WallerのDuncan, Malcolm StorryのMacduff,監督はHoward Davies。今回の演出は、プログラムの表紙が暗示するように、まことにbloodyであった。the weird sistersは、初めは3人とも両手で両目を覆ったままで台詞を言ったり所作をしたりするが、やおらその手を目からはずすと、目も目の回りも手のひらも、血で真っ赤だ。魔女たちはsexyで、身ごなしは軽快、一人は黒人であった。11世紀のスコットランドに黒人の魔女がいたかどうかは問うまい。舞台装置としては、中2階のフロアとそこへ達する階段、うらぶれたロンドンのオフィスで今も使っていそうな木製の机といす。魔女に出会うシーンでのマクベスとBanquoのマントなどはリアリスティックであったが、それ以外の場面では、登場人物たちは、現代の軍服めいた服装をしていた。マクベス夫人は巧みではあったが、少しスケールが小さいように思われた。20余年前に、ニューヨークで見たOld Vicのマクベス夫人の秀逸な演技と迫力と女優のスケールの大きさが忘れられない。今回のマクベスは、人間的弱さもよく出ており、好演だったと思う。敗れるシーンは残酷で、目を開けていられなかった。Macduffは急所を刺し、マクベスは七転八倒の苦しみを演じる。舞台上での写実的な肉体的苦痛を観客も共有することを課せられ、見る方にも忍耐力が要求された。

この芝居は、Rutgers Universityからの演劇担当の先生のご指導で、授業を取っていた3年生が主役をし、たまたまESSに入っていた私たち2年生も参加して、大学祭で上演したので、特に思い入れが深い。浜田先生は刺客役で御登場だった。私は第5幕で、夢遊病のマクベス夫人を見守る医師の役をした。ただでさえ日本人的発音なのに、舞台の上から客席の隅まで聞いて貰える大声を出すのは一世一代の大仕事で、矯正に時間をかけたことを思い出す。Out, out, brief candle! / Life's but a walking shadow;というくだりあたりは、目の前で見守るマクベスに自分の心を預けたような思いがしていた。

イギリスへ初めて到着してから5週間暮したことになる。人間同士という意味で、英国人と私日本人の間には、共通点や類似点を発見することが多かった。しかし、建造物を見ても、シェイクスピアを観ても、イギリス人もイギリス文学もイギリス演劇も、手の届かぬもの、障壁で隔てられたもの、と感じられる。ヨーロッパ文明とは異質の文化の中で生きてきた者が、僅かな勉学の後に、全欧米文化を背後に持つ英国の言語文化に魅せられても、理解も観照もままならぬ。しかし、もし今回の旅がなければ、今回の僅かな「発見も確認も」せぬままに、歳を重ねることになったであろう。そういう思いがしている。

夕食後、ヴィンセントさんに心からお礼を述べ、親切なペン・クラブの皆さんにご挨拶をして、出会いの楽しさと別れの感傷を分かちあった。ベアトリスは涙を溜めてキスをしてくださった。

3年後、ペン・クラブは、病気で退職したヴィンセントさんを、遠いヨークシャーの養老院へ送ってしまっていた。「これほど長年ペン・クラブのために尽くしたのに、あそこに年金生活者として住まわせてくれませんでした。」という切々たるお手紙をいただいた。何か英国病の一端を垣間見たように思った。その後、英国に1年滞在しながら、交通不便な場所のため、お見舞いに伺わずにしまったことに、気が咎めている。

8月14日(日) 晴

規定より早い朝食をお願いし、タクシーでKing's Xへ行き、10時発のInter－Cityでエ

ジンバラへ向かう。親類同士の二組の家族とテーブルを囲むことになった。あいにくこの車両だけ冷房が切れ、電灯もつかない。“hot and humid”と連発したら、なんと、扇子を貸してくださった。目は窓外の風景に釘づけとなり、窓から目をそらすことができない。イギリスの田園は実に美しい。草地に、牛や馬や羊が放牧され、その草色を、濃い緑色の木の列が仕切る。あれはelmか、birchか。一本一本の美しい木が、ゆるやかな傾斜の斜面を区切り、まるで御伽の国のようだ。灌木のhedgeもある。Doncaster, Yorkと北の方へ行くにつれて、stone wallが使われだし、Sheffieldを懐かしく思い出す。英国小説には、しばしば生け垣や石塀が描かれているので、どのようなものかと思っていたが、今回、一挙に解決された。北上するにつれて、再びヒースに覆われた原野も見えだし、風景を深く吸い込む感じである。Tyne河畔のNewcastleを過ぎる。Carlisleからこのすぐ近くまでローマ皇帝の遺跡Hadrian's Wallsが続いているはずだが、見えない。(1989年春に訪れた。)汽車は美しい海岸線に沿って走り、初めて北海を眺めた。海岸は時折、田畑の後に消える。この辺りはNorthumberlandなので、シェイクスピアの史劇などを思い浮かべた。思っていたほど北の国らしくないのは、真夏のせいだろうか。山地といっても、日本の中央部とはまるで違い、なだらかな丘陵地帯である。汽車は速度を落とした。これでは予定どおりに5時間では着けまい。Tweed河を越えた。ツイード布地はこの周辺が原産地なのだろう。1時間遅れて、4時にやっとEdinburgh駅に到着。定刻より1時間も遅延したのに、車内アナウンスは一言もなく、乗客も動じない。ホームは相変わらず薄汚いが、さすがに大きな駅、スコットランドの首府だ。

さて、どこへ行けばよいのか？イングランドにいた5週間の間に調べておくべきなのに、日々の忙しさにとり紛れ、肝心なことをしそびれていたので、宿泊先がわからない。公衆電話ほど苛立たしいものはない。このころはまだどこも旧式の電話機で、電話機の横に書いてある指示どおりにするのだが、つながらない。やむなく100番で交換手を呼び、ようやく大学につないでもらったら、あいにく日曜のこととて、宿直の人しかいない。間をおいて調べてもらってかけ直し、受け入れ先の家族の氏名、住所、電話番号がわかった。coinを大分無駄にした。left luggageでお札をくずしてくれた駅員は、日本でよい思いをしたらしく、御機嫌で助かった。

タクシーを拾い、Castleの手前の坂を上り、町並みを抜け、meadowを横切り、3階建の古い石造住宅のびっしり立ち並ぶ通りのひとつのドアの前で止まった。ここが125 Warrendar Park Roadだ。あとで地図を見ると、市街地図の中に入るか入らぬかの境目の南端(旧市街)にあった。中央部で2センチは擦り減っている石段を上り、二階のドアのベルを押すと、ドアが開き、白い半袖シャツに、白いショーツで、頭頂の毛の薄い、チョビ髭のポーランド人Mr Pankowiakが顔を出した。職業は何だろう。「テニス選手？」と尋ねたら吹き出した。パン職人さんだった。チェコ人の奥さんは、8歳のお嬢さんと3歳近い坊やを連れてチェコへ帰省中で、明晩帰宅される。部屋へ案内された。ロンドンの宿の狭い部屋に比べ、遙かに広く、住み心地よさそうだ。これから3週間のよい予感に胸が踊る。机兼用テーブル、ロッカー箪笥、引き出し、ベッド。棚に置物。ベッドの横に墨絵調の水彩画の額。

荷物を置き、地図をお借りして、早速大学の場所を探す。本部は21 Hill Place。何番のバスに乗ればよいのかお尋ねしたが、「いつも車なので、バスのことはわからない。」とりあえず車で大学本部の前まで連れて行って頂いた。歩いても20分ぐらいらしいので、ひとまずホっとする。帰途、手頃な食事場所として、中華料理店“Lee－One”(好運)を

教えて頂く。夕食をお誘いしたが、固辞されたので、一人で行き、渡英以来初めての中華料理に、5週間ぶりにお箸を持ち、中国茶も味わった。

8月15日(月) 晴

パンコヴィアックさんの受けていた指示どおり、9時15分までに大学のCommon Roomに着いた。私の申し込んだEnglish for University Studentsのコースの学生のほかに、Spoken English, Courses for teachers of English(母国語がフランス語,ドイツ語,イタリア語,スペイン語,オランダ語など印欧語の者に外国語としての英語を教える教員のためのコースで,母国語が日本語の者への英語教授法のコースではない。), English for Academic Purposesなどの学生も一緒に集まり、Director of StudiesのDr. G. R. Fergasonによる簡単な開講の辞があった。わずか3週間のコースなので、英語に熟達するのは無理であるが、真剣に課題に取り組むことによって、それなりの効果を挙げることができるのだから、各自一生懸命に励むように、という趣旨である。次に、class teachersやadministrative officersやsocial and cultural coordinatorsや事務担当者のご紹介があった。

EUSのクラス18人は、授業の行われるDavid Hume Tower(David Humeは18世紀の哲学者、歴史家、政治家)へ出かけ、早速クラス分けのためのEnglish Proficiency Testを受けた。明日発表になる。次に、コースに関するinformationのプリント類—午前用のreading, listening to tapes, writingのためのものと午後用のヴィデオ教材—の配布があった。Morning Modulesには5種類のテーマ別教材が含まれ、全部で107頁。afternoon video modulesは19頁あった。実際は、授業の度に、随時に数頁のプリント類が配布されたし、用意された教材全部を使うわけでもなかった。

Students' Refectoryへ昼食に行くと、かなり広いのに非常に混んでいて、長い列ができていた。サマーコースの学生以外に、一般の学生、エジンバラ大学で開催されたInternational Language Therapy学会の出席者、8月23日頃終了の国際教育協議会(?)主催の日本人英語教師研修ツアーのEnglish for Japanese Teachersの約20名も一緒だ。四国の精神科の看護婦さん、ご夫婦で大学で学んでおられる方、母上に付き添われた聖心女子大4年生、教員コースの国立音大の英語の先生、これから2年間アイルランドで音楽教育を勉強なさる藤田芙美子先生などにもお会いした。たまたま向かいの席に座られた生物学の老教授は、お嬢さんが日本人ビジネスマンと結婚されたと自己紹介なさった。午後、藤田先生と大学近くで地図3種類と絵葉書を買う。

Common Roomには、アルファベット順に郵便受けが並び、壁面にはtripsやtheatresの掲示と参加希望者の氏名を書き込む一覧表が貼られている。8月18日(木)のSalonicaと、8月20日(土)のSt. AndrewsへのDay Tourと、8月27日(土)〜28日(日)のHighland Trip,その途中にマチネーで見るTwelfth Nightに申し込んだ。定められた日時に費用を払い込むことになっている。部屋の一隅のテーブルには、市内の催し物のパンフレット類や広告の類いが山積みになっていて、便利だ。

希望者には、2時からバスによるguided tourがあったので、地図とボールペンを用意。Hill Placeを出て、Surgeons' Hall前を通り、NicolsonからSouth Bridgeに入る。左折してChamber St.に入り、Greyfriars Bobbyの像の前へ出た。この小さなスカイテリヤは、エジンバラ版忠犬ハチ公で、14年間も亡くなった主人の墓守りをしていた。背後にGreyfriars Barというのがある。後に、中2の授業でHeart−Warming Stories(開拓社)

のボビーの話を読んだ時は、エジンバラでボビーに会い、伝記を読んだことが、大変に役立った。Parliament Houseでバスを降り、説明を聞く。バスはRoyal MileからCanongateへ出、John Knox's Houseを左手に見て、Palace of Holyroodhouseの前を通り、AbbeyhillからRoyal Terraceへ向かった。Calton Hillには、City ObservatoryとNelson MonumentとNational Monument(Dugald Stewart Monument)が立っている。最後のものは建造開始後3年で資金が尽きたために未完成である。Princes Streetへ出、St. David St.を上がり、St. Andrews Sq. 脇を通り、Scottish National Gallery and Museum of Antiqueを右に見て、Queen St.に入る。Heriot Rowに入り、Moray Placeの前を南に下り、Georgian Houseの前のCharlotte Sq.からGeorge St.に入り、右折してFrederick St.へ。左折して、Scottish AcademyとNational Galleryの前のThe Moundを通り、George IV Bridgeへ出て、ここからCandlemaker Rowへ入り、タータンの店や書店を示され、Hill Placeへ戻った。見るべきものが多いが、このうちいくつ見られるだろうか。Princes St.には、Woolworthまである。旧市街と新市街の対照がおもしろい。

この夜、Mrs Pankoviakが、二人のお子さんと帰宅された。本来の契約はB&Bであるが、前以てお願いすれば、夕食も一緒にさせて頂けることになった。このスコットランドの家庭とも親しくなれそうだ。

8月16日(火) 晴

テスト結果発表にまずは安堵。教員の体面(?)と弱気の交錯する3週間の幕開けである。クラスメートはイタリア人5人、ベルギー人2人と私。もう片方のクラスには、イタリア人、フランス人、ドイツ人。先生は若い女性のGilly。(先生も学生もfirst nameで呼び合う。)私のクラスのAnnaが、"What class am I supposed in?"などと尋ねている。

初授業は、32頁の"Minorities"。私のクラスでは、私がminoritiyである。授業は活発なディスカッションで進められ、皆よく考え、発言する。発言しないと当てられる。昨晩、読んでおいてよかったヨ！ヨーロッパの人達にとっては、英語は外国語であるとはいえ、音や文字や構文や思考回路が母国語と同じ言語系統に属するので、母国語の語感とさして変わらないらしく、極めて容易に英文をキャッチし、読んだり話したりできる。listeningにはほとんど困難を感じていない。彼らがつかえるのは、語彙と語法のようだ。私の英語は約35年前からの「勉強」によって得られた知識によるものが大部分で、生活環境からのacquisitionはごく僅かだ。だから、vocabularyとgrammarでは今のところ彼らを越えていると思いたいが—彼らは私の子供や学生の年齢なのだ—身についた言語ではないという点で、根本的に彼らよりinferiorだと思う。内容や話し手の英語にもよるが、聞き取ろうと神経を集中しても、私には聞き取れないことも多い。彼らは今でこそself-complacentの名詞形に首をひねっているが、語彙が増えれば、あっという間に35年を追い抜くだろう。

10時45分から11時15分までcoffee break。六階(5th floor)から地階(basement)の集会室へ降り、コーヒーやクッキーで一休み。会話クラスも一緒で姦しい。(しゃべるために遠路はるばる来ている人たち!)

その後、ホールで、スコットランド名家のご出身Mrs Mona Tennantによる"Who are the Scots?"という題のスコットランドの歴史のlectureがあった。キリリとしながらも微笑みをたたえ、ユーモア溢れる明晰な話ぶりに魅せられた。

午後(2:00—2:45)はEUS二クラスと会話クラスが一緒にテレビを見た後、教室に帰り、

今見たヴィデオについて討論した。“Do you think you know your rights?”という題で、法律上許されることと許されないこと—例えば、消防夫が断りなしに家へ入ってくるとか、ボールが投げ入れられたとき—について考えるものだった。常識が役立つ問題もあったが、法律上の知識がないと正解の出せないものもあった。

夜8時から10時まで、Common RoomでScottish country danceを教わった。大勢の受講生が、キルトの若い女性にフォークダンスを習って汗だくになった。帰りはタクシーで帰宅した。パンコさんから、夜10時以後はmeadowを一人歩きしないようにと注意されていたからである。これまでタクシーには、初めて着いた駅から宿泊先へ行くときぐらいしか乗らなかったが、エジンバラで頻繁に乗るようになったのは、地の利の関係である。

8月17日(水) 晴

昨日は、“Minorities”のsummaryを書き、発表しあったが、今日も同じ箇所を、節ごとに細かく見て行く。何を述べているか。どのような態度で書かれているか。

第1節 themeの提示
第2節 emotive adjectivesの使用による議論の発展
第3節 hypotheses
第4節 emotive adjectivesの使用と議論
第5節 hyperbole
第6節 his own ideas

コーヒーブレイクの後は、テープの会話を聞き、配布されたプリントの空所を補うヒヤリングの授業。他の学生たちは気楽にこなしているのに、私は苦手なので必死で、皆のfriendshipに助けられる。dictationが意外に大変だ。

12時45分に授業は終わり、昼食後、希望者は、予め申し込んで置いた小見学に出かけた。この日は、Edinburgh Crystal, Scottish Grain Distillery, Cramond(walking tour), Football Games, Monkton Hall Collieryの5コースが設けられており、私はウィスキー工場見学にした。国際教育協議会(?)主催の夏期英語研修の中学高校の先生方約20名も一緒のバスだ。ついでであるが、この企画はイギリスのReading大学とスコットランドのここEdinburgh大学とアメリカのGeorgetown大学の3コースがある。エジンバラ大学での教材を見せて頂いたが、EUSの教材の方が遙かに面白いように思われた。加えて、常に同じメンバーの日本人だけで行動するので、外国へ来るメリットが薄れるのではなかろうか。

Scotch whiskyはmaltとgrainに分けられる。malt whiskyはbarley(大麦)だけから作られる。他方grain whiskyはcorn(小麦)が主原料で、大麦と小麦の割合のいかんで、品質や価格が決められる。発酵にはyeastを用い、琥珀色の発色にはカラメルを混ぜる。炭酸ガスで圧縮する。6～7人でグループを作り、広い工場内を白衣の技師さんに連れられて、階段を昇ったり降りたり、自動制御装置付きの子供用プールのような発酵容器のガラス窓を覗いたり、樽のたがをはめる機械や樽の修理をしている職人の仕事ぶりに感心したりして、最後に何百もの大樽の並ぶ貯蔵室へ案内され、特別に槌で穴を開けた樽から純粋のモルトウィスキーをご馳走になった。70%の強さに、むせてしまった。応接室に戻ると、またさまざまなspiritsが待ちうけていた。

8月18日(木)　晴

1時限目は昨日に引き続き“Minorities”についてで、節ごとの著者の意図や語義についての質疑応答が活発に交わされ、AlabamaのSegregation Lawsや、South Africaのapartheitなどにも触れた。

新しいプリント4枚。The Day the Black Revolution Began by Lerone Bennett Jr.と、Portrait of a Decade by A. Lewisと、Martin Luther King:Freedom Fighter by Edward Preston(Doubleday and Co., 1968)。同じ話題について、3人が3様の視点から、事実関係を正確に、あるいは省略し、あるいは想像で歪曲して書き記した文である。内容はアメリカの人種差別反対運動の発端となった実際に起こった事件である。すなわち、デパートに勤める黒人女性Mrs. Parksが、帰途のバスで腰掛けていたところへ、白人男性が乗ってきた。運転手は黒人乗客達に「立て」と命じ、彼女以外は立って席を譲ったが、彼女一人は無視して座り続けたために警官に逮捕された、という。それぞれの作者の描写方法、事実関係の扱い方などを表にまとめるのが課題であった。

2時限目はモナ・テナント夫人の“Scottish Structure and Scenery”というスライドを用いた講義であった。スコットランド各地の美しい山々、海岸、樹木や草花、動物や鳥などが、四季折々の姿を見せる。必ずしも優しくない、というよりは厳しいといった方が当たっている自然条件の中でのスコットランドの人々の生活が垣間見られた。

3時限目のヴィデオは“The Sentence of the Court”という題で、テレビには不潔な刑務所の室内、受刑者たちや刑期短縮の意見を述べる識者・学者と、status quo(現状維持)を支持する刑務所長などの意見が次々に現れる。プリントのlistening tasksに従って意見の交換をしてから、教室へ戻り、discussion questionsを討議。テレビには、強盗に押し入って捕らわれた初犯の少年が、押し入った家の人に会いに行くシーンがある。その家の奥さんが、少年に、“How do you do?”と言って握手を求めたのが印象的だった。見ながら皆笑った。少年が、「自分の家に、もし強盗が入って、ごっそり銀器を持ち去ったらさぞ嫌なことだろうと思う。」と改悛の情を見せ、同情を引いた。(「銀器」という点がヨーロッパ文化的だーージャン・バルジャンを想起した。)後の議論は、このような犯人と凶悪犯を同じように扱うことはできないというところから始まった。

過日ロンドンで帰国当日の早朝のエジンバラーロンドン間の飛行機(British Caledonian)を予約したが、いざこちらへ来てみると、早朝に市の郊外の空港へ行くよりも、前の晩に夜行列車で発つ方が楽に思われ、Railway Informationへ10:30 p.m.の汽車を予約しに行った。21日に、これを11:30 p.m.の寝台車Night Scotsmanに変更した。

7時45分、皆でRoyal Lyceum TheatreへSalonicaを観に行った。(£3の席が£2。EnglandでもScotlandでもentertainmentの安価なのがありがたい。)Louise Page(27歳のplaywright)はAndrea Dunbar(27歳のSalonicaの作者)と共に本年度のGeorge Devine Awardを得ている。Charlotte(Gwen Nelson, 80歳位)は、第1次大戦で戦死した夫の墓参のために、未婚の娘Enid(Sheila Burrell, 60歳位)とギリシャのサロニカへやってくる。海岸の砂浜に、素っ裸の青年が俯せになって眠っている。舞台の幕は最初から開いていて、青年は20分以上も眠ったまま身じろぎもしない。シャーロットは60年昔の若い夫を回想する。と、舞台の隅に夫が昔の姿のまま軍服に背嚢を背負って現れ、彼女を見守るが、彼女には夫は見えない。そこへ身寄りのない老人が現れ、彼女を口説き、結婚しようというのだが、この男のヨークシャー訛りは甚だ聞きづらい。定年退職後のイーニッドは、母親に嫉妬する。さて、砂浜の青年Peterは墓守りで、仕事が暇なので昼寝をしていたのだ

が、シャーロットの夫が実は戦死ではなく、海へ投身自殺したのだと告げる。イーニッドとピーターは淡い好意を持ち合うが、彼は突然発作を起こして死ぬ。

要は反戦思想を盛った芝居なのだが、まずnudeにびっくりした。ピーターは目を覚ますとやおら起き上がり、すっくと観客席に向かって立つ。公の場で美しい男性の裸身を女性も鑑賞できるのは、スコットランドやイタリア。日本、ドイツ、ベルギーでは、この劇は上演できないだろう。彼が急死すると、イーニッドはシャツやズボンを砂地の上で引っ張って脱がせ、素裸にしてから、魔法瓶のお湯でタオルを濡らし、ていねいに拭い清める。『チャタレー夫人の恋人』を発禁にした国としては上出来だ。

8月19日(金) 晴

1時限目は106頁の“Big Ben”の話を年代順に整理した。chronologicalに書かれていないので、読み間違えたり、読み落としたりしないようにするには、ゆっくり読まねばならないが、スピードが落ちると、課題をこなすのが間に合わない。reading skillの欠陥を身にしみて感じた。(BartやSilviaは冴えている！大学生に負けちゃう！)書き方、強調のための対照にも注意を払う。

2時限目は、107頁の“The Torrey Canyon Disaster”の図解を見て口頭で表現する練習を交替でやり、一人ずつ皆の前で述べる。これをnarrativeに書いてくるのが、今日の宿題になった。

金曜日の午後はフリーなので、昼食後、大学近くのRoyal Scottish Museumを訪れた。“Man and Music”と題する特別展を開催中で、各国の主として古楽器と民族楽器362点が展示されている。東南アジア、中近東、インド、アフリカ、ヨーロッパなどの弦楽器、吹奏楽器、打楽器など。ヴァイオリン族とハープの中間のような、舟形のゴンドラ状のネックから船首にかけて弦を張った楽器は初めて目にするもので、非常に興味深かった。蛇皮線もあった。アルマジロを胴にしたもの、椰子の実を半分に割ったものなど、人間と自然と音楽の直接の結び付きが明解に示されている。

日本の展示物には、気になるものが数点あった。その1は、お琴を弾いている日本髪の婦人の側に立っているちょんまげの男性に、(ちょんまげにも驚くが)「羽織りを着た和服姿」という意味の英文の説明がついているが、「羽織り」ではなくて「どてら」を着ている。その2は、黄檗山万福寺の食堂の入り口に吊られている玉を口に含んだ大きな木製の魚と木魚を取り違えて説明されていたこと。しかも、前者は食事の合図に叩くのだろうが、勤行中に叩くと説明されていた。その3は、鼓をfsuzumiとtとfを誤記してあったこと。守衛さんに話して、Senior Exhibitions OfficerのMr. Hector Fernandezにお会いし、正式に手紙を書けば、専門職員と相談してくださることになった。

常設展示物には、スコットランドの甲冑、刀剣、銃砲などの武具・武器類、中国の陶磁器、日本の焼き物や根付けの収集など、民俗学的なものから、エンジンなどの機械工具類までが、やや雑然と並び、動植物の博物館も併置されている。

夕食は家でStefaniaやJohnと一緒で賑やかだ。パンコ夫人は昼間は大学の事務に勤めておられるが、夕食はきちんと調理なさり、同じメニューが繰り返されることはない。外食と異なり、家庭料理は飽きることがない。彼女はステファーニャを叱りすぎると思うが、私にはとても親切で気を遣ってくださり、お陰で竜宮へ来ている気分だ。ホームステイをして、自分で食事の支度をしない生活をしてみて、食事の世話のないことがいかに楽なものか、世間一般の男たちがいかに楽をしているかが、よーくわかる。献立を考え、店へ行

き、財布と相談して買い物をし、下ごしらえをし、料理し、後片付けをし、また次の食事の手順を考え、準備する。この膨大なエネルギーと時間の負担がいかに大きいかは、それをやらないことによって知り得る。その上、食事作りは、時間的にも体力的にも行動を制限し、狭める。今回、学生寮で自炊することにしていたら、これほど自由に動き回れないであろう。しかし、今夜10時からのCommon Roomでのディスコは遠慮した。

8月20日(土) 晴

9時30分にHill Placeに集合し、バスでRoyal Palace of FalklandとSt. Andrewsを目指す。Firth of Forthを横切るForth Road Bridgeは、鉄道専用の橋と平行し、約2マイルの英国で最も長い橋だそうだが、なんと、ジョギングしている人がいた。Loch Levenを左に見る。この湖中の島の今は廃墟の城には、かってMary Queen of Scotsが一時匿われていて、そこでお定まりのlove storyが始まり、城主の18歳の息子が逃がしたという言い伝えがある。青い水を静かに湛えた湖と、淡黄色の廃墟と、緑の木立が一幅の絵をなしている。

フォークランド宮殿は、チューダー朝の歴代の王の狩猟用の宮殿で、現在はThe National Trust for Scotlandが管理している。背後にヒースの咲き乱れる山を持ち、前面は、手入れの行き届いた花壇が芝生を縁取り、芝生は前方へなだらかに傾斜している。The Chapel Royalには、マリア像が、1542年からの彩色画天井の下に安置されている。モナの説明で宮殿内を見学した後、近くのtea roomで、紅茶とケーキで一休みした。静かすぎる町だ。

St. Andrewsの町は北海に面しており、St. Andrews Cathedralの廃墟とSt. Andrews Castleの廃墟とは、2マイル隔てて海岸に立っている。大聖堂の長はこの土地の領主で、城に兵隊を養って、一帯を治めていた。つまり、彼は教会すなわち精神世界と世俗世界の両方の首長だった。広い廃墟の敷地内に物見の塔があり、塔頂からは海と城跡と町並みが見晴らせ、ワンダフル！大聖堂の廃墟の一隅に小さな博物館があり、古い石の彫像や、サクソン人のものらしい石の十字架や石棺などがあまり整理もされずに並べてある。係のスコットランド人が、「日本人がなぜEnglishを勉強するのか。」と絡んできた。Scottishならよいのかネ？

芝地を囲む城の廃墟も海に面し、見張り兵の詰所や、台所や、水牢にもなる地下牢(本当の落とし穴を初めて見た！)を、石塀の一部や半ば崩れた塔が、廊下のように繋いでいた。城跡に登り、壁や塁の窓から青い海を望む。城というものは、17世紀に入ると、大砲の発明・使用などにより、防備の価値が薄れ、また居宅としては住み心地よからず、もっと快適な住居に移ったので、次第に廃墟になっていったそうである。青い海を背にした緑の芝地を囲む黄褐色の廃墟の不規則なたたずまいは、時が一時停止したかと思われるほど、あくまで穏やかで、我を忘れさせる。日本から来た日本人であることも、意識から消え去っていた。

セント・アンドリューズのゴルフコースは、ゴルフ発祥の地といわれ、ゴルフに無縁の私も一目眺めて、話の種にするつもりでいたのだが、廃墟に心を奪われ、訪れる暇がなくなってしまった。藤田先生と町を少し歩き、ミートパイを求め、大聖堂の芝生のベンチに座って、まばらな観光客や家族連れを眺めた。そろそろ皆集まり始めたようだ。

Fifeの突端の漁村Crailでバスを降り、小雨のパラつく中を、モナに続いて細い路地を岬へ下った。細い堤防の内側の浅瀬には、小さな漁船がもやい、浜にはロブスター捕獲用の

網箱が積み上げてある。浜辺の小屋では、蟹とロブスターを茹でて売っていた。大きい蟹は2ポンド、小さい蟹は1ポンド、ロブスターは4ポンド50ペンス。パンコさんへのお土産に求めようかと迷ったが、好まれるかどうかわからないので止めにした。

この地方では、海水から塩を作り、オランダへ輸出し、帰途に空船で帰るのはもったいないので、オランダのスレートを積んで帰った。赤みがかったスレートを屋根に載せた家は、この地方独特である。また、政府は傷んだ家を買い上げて修理し、新しい買い手に売り、そのお金で次の古い家を買って修復して売り、その資金でまた別の家を買い...という政策を取っているそうで、二階にそれを示す小さなプレートのある家を示してくださった。古い家を大事に保存して伝統を守る気持ちなのであろう。小雨が上がった。

バスに戻る路地脇にPotteryと書いた塀があって、狭い中庭の奥に工房がある。色も手触りも益子焼そっくりだ。益子からこんなに離れた地球の反対側に、類似した鄙びた焼き物を見つけたのは、感動だった。

8月21日(日) 晴

朝、部屋で傘を広げて干していたら、ジョン坊やがやってきて、私のサインペンで絵を描いたり、懐中電灯を点滅したり、ロッカー簞笥に出たり入ったりしていたが、やおら傘を上向きにして中に乗った。傘は一本しか持って来てないから、壊れると困る。"Get off the umbrella, please."

今晩はパンコ氏のご両親の金婚式。ポーランド人で、英語は駄目で、特に80歳を越えたお母様は全くおわかりにならないので、夕食は別でよいかと一昨日から言われていた。Hill Place近くの花屋で、ピンクと朱色と藤色のグラジオラスの大束を三つ買い、お祝い用に包んでもらった。開く店を確かめておいてよかった。これは上出来だ、というのは、日曜は町中のほとんどの店は閉まり、花屋も閉店が多い。たいていのスーパーも休みで、開くのは、インド人かアラビア人の店で、この花屋もインド人らしい。アラビア系らしい小さな店で、昼食用にパイ、サンドイッチ、ジュース、黄桃を買って帰ると、パンコ氏がステファーニャと洗車の最中だ。"Hi, for your parents' golden anniversary!"と花束を振ったら、"To my parents? Thank you."と嬉しそう。ステファーニャが一緒に部屋へ上がって来て、くっついて離れない。ジョンも入って来て、私の買った食べ物を見て、すぐ食べたがった。「今、皮をむいて切ってあげるから。」と言うのも待てずに、ジョンは桃をかじり、ステファーニャはサンドイッチをパクつく。騒ぎを聞きつけて、ママが来て、二人を引っ張って行ってしまった。

お花にグリーティングカードを添えてパンコ氏に謹呈し、Bruntsfieldへ行くと、もう藤田先生は見えていた。ベンチでEdinburgh Festivalの券とFringeの券の申し込みの点検をしてから、バスで出掛け、High StreetのFringe OfficeとMarket StreetのFestival OfficeとTattoo Officeを探した。いずれも大変な混みようで、FestivalのLondon Phil.(Miriam FriedのヴァイオリンでMozart:Concerto in D, K 218とMahler)は売り切れていた。Tattoo Officeはとぐろを巻いた長蛇の列で、何時間待つかわからない。今日は諦めることにした。Princes Streetの方から、風に乗って賑わいが聞こえてくる。早く行きましょう。午前中に案内所で寝台車に変更しておいてよかった。

エジンバラ国際芸術祭前日の祝賀パレードが始まり、陣取ったG.P.O.前のベンチの前を、次々に行列や山車が通り過ぎて行く。バグパイプと太鼓で行進してくるキルトの楽隊、バトン・トワラーの先導するグループ、原爆反対の一団、緑化運動グループ、レオタード

で踊り狂う女の子たちを乗せたトラック、中国の踊り子のトラック、キャンデーを投げる道化たち・・・午後1時頃に始まり、2時半頃終了。興奮の余韻が残り、市街を歩いてみることにした。George Streetに上がって、Rose Streetから下る。閉店の店を覗き、カフェテリアで一息入れる。藤田先生が、「おいしいカレーを見つけたの。」と夕食に誘ってくださった。Princes Streetの開いているスーパーで食料品を補充し、バスで学生会館へ。個人の家だったそうで、前庭に薄いピンクのヒースが一群れ咲いている。人なつっこいスーダンの獣医さんがキッチンへ来た。ワイシャツを床まで伸ばしたような白い部屋着を着て、お鍋をかき回し、自室へ持って帰った。彼は料理が好きで上手で、今日も友人たちが集まっており、テープが聞こえてくる。スーダンの音楽は不思議に日本の音楽に似ている。沖縄の民謡や韓国のアリランの調子を思い起こす。藤田先生にBruntsfield Linksのmeadowの端まで送って頂いた。

帰宅したら、パンコ一家、パンコ氏のご両親、ご両親と16年来同じアパートの友人ご夫妻で、家の中はすごい賑やかさだった。ママが私を紹介したいとおっしゃるので、着替える。パンコ家では、日本人はとても好評である。最初に滞在なさったのは、ほとんど英語の話せない花時計の専門家の学者で、とてもよい方だったそうだ。(因みに、エジンバラが初めて花時計を始めたとのこと。)次に滞在された女性は、帰国後、2カ月がかりで千羽鶴を折って贈られたそうで、その千羽鶴は台所に吊ってある。今回大学事務局から、イタリア人か日本人の受講生を受け入れてくれないか、という話があったとき、即座に「日本人」と答えたとおっしゃった。私も日本人の評判を落とさず、今後滞在する方々のために、よい滞在者でありたい。ワインが出て、チーズとパンがそれぞれ数種類出た。イングランドでもスコットランドでも、チーズはデザートのように、食後に供される。それからファミリー・ルームへ移り、世間話やサマースクールの話に時を過ごす。ポーランド人は花好きで、(だれしも好きだと思うが、)私の贈り物をとても喜んでくださった。ナチを逃れて来られたのかもしれなかったが、楽しい雰囲気を壊したくなくて、お聞きしそびれた。

8月22日(月) 晴

少し冷たい澄み切った朝、犬が駆け回っているThe Meadowsの並木道を歩き、まだほとんど車の通らないMelville Driveを横切って図書館の下を抜け、DHTへ着くのに迷わなくなった。

1時限目は7頁の会話文について。List 1には、いろいろなfunctionの8例文が載っている。(1) Conversation Opener (2) Agreement (3)〜(8) Request。List 2では、formalな表現とinformalな表現;Would you please 〜?や、Would you mind 〜?;informationを求める表現法、など。

word gameをした。8人が2組に分かれ、ある語句に関する三つのヒントを出して、相手グループに当てさせるものである。今日の出題は(A) "to be at a loose end" (B) "to be ripped off" 解答は、(A) "to be bored; to have no idea what to do" (B) "to be cheated into paying too much for something"である。

2時限目はテープで夫婦が妻の性格を話し合いながら表に記入している対話を聴いた。Loving, Selfish, Sexy, Loyal, Jealous, Secretiveにつき、おのおのがOutstanding, Above average, Average, Below average, Poorで評価する。(なぜか夫の分はしなかった。)私共も、テープを聴いて表に記入するのが、第1の課題である。どのような点で、二人の評価が一致したか?第2の課題は、隣席の学生と、答えをdiscussし、その後、先

生やクラス全員と話し合うことである。口を切るのに好都合なphrasesがいくつかプリントに示されている。最後に、プリントの男女各3名の写真から、声の主を当て、その理由を話し合ったが、おもしろいことに、クラス8人の意見がほぼ一致した。写真の人物の性格や職業まで、類似した予想になった。

授業後、The Royal Scottish Museumへ宛てた手紙の英語を、Gillyに見て頂く。

3時限目はテレビで、16頁のModule 'D': Social Attitudes Through Humour—What Do the British Laugh Atを観た。これは、"Not the World Cup"という題で、1980年以降のBBC—1 &2のニュース、situation comedies, the chat show, pop musicなどから成るが、今日観たものは、1982年の分である。31のスケッチから構成され、教材プリントの上方には「笑う」理由が七つ挙げてあり、下方には31のスケッチのタイトルが載っているが、8箇所は空白である。テレビを観ながら空白を埋めるのが課題だが、画面がどんどん変わるので、気を締めてかからねばならない。

教室へ戻り、二人で、あるいは小グループで、あるいは全員で、観たばかりのテレビのおもしろかった点について話し合った。特に、"definitely not to be acceptable"なものがあったか、あればどれであったか、を話し合った。盲人が横断歩道を渡ろうとした時に腕時計のアラームがカチカチ鳴りだし、それが横断オーケーの信号音と同じであったために、横断し、車にはねられることを暗示したスケッチに、全員がクレームをつけた。the powerfulをlaugh atすることは、大変結構であるが、the weak/handicappedをlaugh atすることはけしからん。

3時限目は3時40分頃終了し、4時から5時近くまで、Dr. Ian CampbellのScottish Literatureの講演があった。2枚のbibliographyは、後日の勉強に非常に参考になる。手初めに、Muriel Spark: The Prime of Miss Jean Brodieを読もう。

EUSは事前にこの講演の連絡を受けておらず、藤田先生とTattoo Officeへ行くお約束をしていたが、ご一緒できなくなった。講演後、一人で行ってみると、一層長い列だ。がっかりし、それでも並んでいたら、前の人が、当日売りはもっと短い別の列で買えるはずだと教えてくれた。運よく10分ほどで、2枚入手し、帰宅後に藤田先生に電話し、夕食後出かけた。Lothian Roadでバスを降り、Johnston Terraceの城の崖下まで来ると、すごい人出だ。狭いCastlehillの急坂は人で埋まっている。道路の上に、旗や幟がはためき、お祭り気分を盛り上げている。さきほどTattoo Officeで見かけた日本人の大学生と一緒に3人で歩いた。彼はこのフェスティヴァルのためにロンドンから今日着いたそうだ。城の衛兵と同じ格子柄のズボンをはいているので、すぐわかった。

Military Tattooは9時に始まった。スコットランド各地のさまざまな軍団が、それぞれの固有のキルトをはき、バグパイプや太鼓に合わせて分列行進をする。服装を眺めているだけでも楽しい。バグパイプの音色は、勇ましいというよりは、憂愁と諦念に満ちていて、軍歌とおぼしき曲でも、泣きたくなるほどだ。Amazing GraceやScotland the Braveや、Loch Lomondのように民謡を編曲したものもある。Lowland Marineとか、部隊名のアナウンスがあるが、軍隊に疎いので、よくわからない。純白のロングドレスに身を包んだ女性たちのフォークダンスもあり、先日、Scottish danceのステップを習ったので、なおさら楽しかった。軍隊のショーであるから、工兵隊が二組に分かれて、橋を組み立てる競争や、トラクターが地上のタイヤを吊り上げる競技もあり、軍用犬が、いくつかの箱の中から隠された銃砲を嗅ぎ当てたときは大喝采を浴びた。

城門に照明が当てられ、城門上の2層の城壁に、伝統的軍服や、軍隊ごとの制服の兵士

が並ぶ。城門にスライド用の幕が掛けられ、第1次大戦、第2次大戦の戦闘写真や、古い情景が映し出される。やがてAuld Lang Syneがバグパイプで奏されるうち、明かりがひとつずつ消え、11時に終了した。Tattooは軍隊のパレードであるから、お金を費やしたくないというイタリア人のクラスメートもいたが、Edinburgh Festivalの代表的な催し物で、エジンバラでなければ観られない。ところで、第2次大戦は、欧米の戦勝国・敗戦国の間にどのような感情を生み、今日まで続いているのだろう？

8月23日(火)　朝のうち雨のち曇

1時限目は、Mr. Collin Bellの“The Press”というlectureに変更になっていたのをGillyがお忘れになっていらしたため、遅れて始まった。(以下要旨のみ)

スコットランドにおける新聞の弾圧は次の理由による。

1) Rival Lawsのせいで、法律はthe rich & the powerfulを擁護する。
2) 殺人容疑で逮捕された被疑者について、新聞は、陪審員に偏見を与えるといけないからという理由で、何一つ記事を書くことができない。
3) 検閲が存在し、政府のスパイが暗躍する。
4) 新聞はすべて、一族のビジネスである。例えば、The TimesやThe SunはNugent Familyが、The Daily MailはThompson Familyが経営する。

その他、印刷の時刻は、ロンドンのTimesは前日の午後5時、スコットランドのTimesは当日の午前3時、など。

2時限目は、14頁のMatchmakerのquestionnaireの表に各自記入。日本のみならず、ヨーロッパの上流社会には、marriage marketがあるので、仲人も存在する。宿題は、この表をできるだけ利用して、自分を仲人に売り込む文を書いてくることになり、大学生たちは張り切っている。

月曜に提出した宿題が返された。辞書を引かず、安直に書いたため、不注意なミスが多く、反省した。Very Goodを貰った学生もいるというのに、教師がGoodとは何たることぞ。今晩は気を入れてきちんと書こう。

プリントのテープ教材(Housing Problems)のdialogueを聴き、二人1組でMr. MoonとMrs. Moonの台詞を読む。ユーモラスな対話で、ヨーロッパ人学生たちは、時々間違えはするものの、苦もなく楽しみながらこなしているが、normal speedのrole playは私にとっては大変だ。BarbaraとAnnaがテープに吹き込み、先生が講評なさった。

アナが“Educating Lita”という映画をOdeon座で観てきた。途中まで粗筋を話してくれたところで、ジリーが、「結末は楽しみのために取っておきましょう。」おもしろそうだが、映画までは、とても手が回りそうもない。

Enzoの提案で、昼食後、クラス全員がヴィデオ授業を放棄して、Casabrankaという、映画をもじった芝居へ行くことにまとまった。いずこも同じ学生気質！今日の午後の新しい先生は、さぞがっかりなさるだろう！ジリーによろしく伝えて頂くことにした。3時～5時で、カクテル付きで2ポンド50ペンスの由。3時までに芝居小屋へ行く約束をして、Fringe Officeへ予約券を取りに行った。予約不能のものや、売り出し前のものもあったが、ジョンの誕生祝いに約束したThe Magical Princess 3枚が買えたのでホっとした。彼は9月6日に満3歳になる。(観劇料金は、大人1.4ポンド、子供1ポンドという日本では考えられない安さである。)

歩いては遅れそうなので、タクシーを拾った。『カサブランカ』は劇場でではなく、テ

ントでやる。3時には間に合ったが、切符は売り切れで、エンゾも懸命に掛け合ってくれたが、どうしようもない。テントの片隅に教壇のような舞台があり、数列ベンチが並び、わがクラスメート7人は最前列に陣取って、心配そうにこちらを注目している。テーブル席もあり、誰も彼もカクテルのグラスを手にしている。前衛風の服装の男女の役者が、テントを出たり、入ったり。どのような『カサブランカ』になるのだろう。でも、ま、仕方がない。外に出て、見上げると、お城がある。ちょうどいい、お城を観てこよう。

エジンバラ城は、海抜135メートル、West Princes Street Gardenから82メートルのCastle Hillの上に建っている。Castle Rockは、火山性の黒々とした岩山で、地下牢の一部では、岩がそのまま剝き出しになっている。エジンバラの名物に、千歳飴のような堅いCastle Rockという飴がある。この岩山には、600A.D.頃から人が住んでいたらしいが、11世紀にKing Malcolm IIIとQueen Margaretが王城にしたという記録がある。息子のDavid IIが要塞の中に母のために建てた美しい小さな礼拝堂、St. Margaret's Chapelは、おそらく最も古い建物であろう。

王宮の中庭を囲む南側の建物、Great Hallは、儀式の式場や、スコットランド議会の会議場として用いられた。Charles IやCromwellのために、宴会の催されたのもここである。今は、軍事博物館で、武器、甲冑、軍服、勲章などの展示がある。

東側には、スコットランド女王メアリーが、スコットランド王James VI兼イングランド王James Iを出産した小さな寝室がある。西側はThe United Services Museumになっている。

隣接するCrown Roomには、スコットランド王家の象徴である宝冠、王笏、宝刀などが展示されている。スコットランド産出の金で作られている王冠には，94個の真珠、10個のダイヤモンド、33個の宝石がちりばめられていた。

牢には、French PrisonとScottish Prisonがある。前者は戦争で捕虜になったフランス兵を収容する牢で、大勢いたのだろう、かなり広い。後者はいわゆる営倉であろう。岸壁が牢内にはみ出し、空間を狭めている所もある。

地下室にMons Megという名前の15世紀の有名な大砲がある。Monsは制作者名で、Megは彼の妻の名前である。ここになぜかセント・アンドリューズ城の見取り図があり、地下トンネルによる城壁外からのattackと、それに対する城内からのcounter attackの図面があった。セント・アンドリューズを訪れた後だけに、大変興味深かった。警備員は、私の質問に親切に答えてくれた。

見晴台に出る。9月の『フォーカス』で、浩宮殿下が歩いておられる高台だ。市内を一望すると、Royal Mound,その下の公園、その向こう側のPrinces Streetと新市街、エジンバラ駅。ガイドブックから想像していた「新市街と旧市街を隔てる谷」とは、この美しい緑地公園だった！自分が今、日本を遙かに離れたエジンバラ城に立っていることが、夢のようである。傍らに、高山植物の庭園もある。城壁の外側に、1段低い6畳ほどの墓地があり、小さな軍用犬のお墓が17基あった。よく働いた賢い犬だったのだろう。

城門を出て、再び城を仰ぎ見る。堂々として風格があり、円形の建物が優美さを添えている。門外に、高校生の年頃の少年見張兵が立っていた。先程は横の上り口から城門に出たので、切符売り場の場所を尋ねたら、口をきいてはいけない規則らしく、一生懸命目で合図してくれた。一緒に写真を撮りたいというアメリカ人観光客と並んだところで、"Say cheese." と言ったものだから、彼はこらえるのに苦労していた。

Tattooの催されたEsplanadeを通り、外へ出る。すぐ左手が以前は貴族の邸だった

Outlook Towerで、Visitor Centreになっている。この時は、ここにcamera obscuraのあることを知らなかった。売店でScotlandという大判の写真集やスコットランド民謡集、ヒースを埋め込んだブローチなどを求め、Castlehillを下り、Lawnmarketのウィンドーショッピングを楽しみ、The Moundを下ってPrinces Streetへ出た。

Princes Streetの西端、Lothian Rd.と交差する角に、St. John's Churchがあり、今晩6時30分から、The Mondrian Trioの演奏会があった。Richard Friedmanのヴァイオリン、Haflidi Hallgrimsonのチェロ、Bryn Turleyのピアノで、曲目は次の通りである。

Trio in G major	Hob 25	Haydn
Trio in C minor	Op. 1, no. 3	Beethoven
Trio in C major	Op. 87	Brahms

このトリオの演奏は派手ではなく、誠実な弾きぶりで、曲の心をよく表現していると思った。五彩のステンドグラスを背に、altarでの演奏と、pewの聴衆。エジンバラは9時半頃まで明るい。リーズでも、教会でのコンサートは素晴らしかったが、再びしっとりした気分になった。演奏者は3人とも背広上着に替えズボンというラフな服装だった。

すっかりよい気持になり、ふわっとした気分で帰宅した。『カサブランカ』騒ぎと、お城と、室内楽で頭が一杯になり、8時からCommon RoomでScottish Eveningのあることを完全に失念するという大失策をやらかしてしまった。

8時過ぎに、台所で今日買ったスコットランド民謡集を広げ、Amazing Graceのテープをかけ、歌集とテープの歌詞のチェックをしていると、ステファーニャがやってきて、スカートをつまみ、くるくる踊りだした。スコットランド特有の、先日教わったあのステップ！とても身軽で、実に可愛らしい。How agile you are！一緒に踊りましょうと、手を引っ張られ、やむなくドタドタしていると、ジョンが来た。somersaultして、とせがむ。somersaultってなあに？とママに聞くと、笑い出した。今、ジョンがやってみせるから。でんぐり返しだ。「スカートじゃできないのよ、ジョン。」

絵葉書を書いたり、洗髪したり、洗濯をしたりして、11時半頃から宿題にとりかかった。この前に懲り、今度はsatisfactoryに近いもの(!)を書こうという意気込みだけはあるが、疲れた脳みそは眠たがっている。パンコママが、濃い紅茶と、クッキーと、リキュールを運んできてくださった。書き上がったのは暁の4時10分前、頭がカリカリしている。

8月24日(水)　晴

今朝ほどびっくりしたことはない。これまで、たいてい毎朝教室に1番に着くか、先生の次、生徒としては最も早く来ていたのだが、今朝は眠かったので数分遅く家を出て、定刻の9時15分に着いた。いつもだと、三分の二が集まる時刻だ。ところが、ドアを開けてみると、すでに皆着席していて、いっせいに気遣わしげにこちらを見た。

『カサブランカ』だ。私だけ観られなかったので、皆が気に懸けてくれたのだ。特にエンゾは気を遣ったようだ。悪いことに、Scottish Eveningを忘れたので、私が気を悪くして行かなかったのではないかと、ジリーまで心配なさっていらしたのだった。彼らは大学生で、私は教員。しかも、親の世代。彼らは西欧人で私だけ東洋人。すべての相違にもかかわらず、また、クラスメートになって10日経つか経たぬかだというのに、これほど仲良くなっていた。彼らの友情を私は忘れることはないであろうし、この体験が私にある自信を与えてくれるであろう。私は今日遅く来たことを詫び、『カサブランカ』の券が売り

切れていたのは、私がFringe Officeへ寄って遅くなったからで、いつも運の悪いエンゾでなくて私でよかったこと、同じ体験を共有できなかったのは残念だが、前から訪ねたいと願っていたお城を訪れたので、それなりに楽しんだこと、6時半からchamber musicを聴いたあと、8時からのScottish Eveningをすっかり忘れたので、全く他意はないことを告げ、安心してもらった。

1時限目は15頁のMAKING FRIENDSの中の"How to Win Friends and Influence People"の2頁を読み、討論した。

[I] 二人ずつのグループに分かれ、友人を得る方法をいくつか考えて意見をまとめ、発表しあった。A, B二つのグループの例を挙げる。

(A) 1. To smile to him/her. 2. To listen to him/her.
3. To talk to him/her. 4. To be kind to him/her.
5. Not to beat him/her.(Enzo's idea)

(B) 1. To smile. 2. To listen to him/her and to try to understand him/her.
3. To be kind to him/her. 4. To have fun all together.

[II] 語義を調べる。例えば、empathize, flatter, to beat about the bushなど。

[III]このDale Carnegieの文について、意見を述べあった。the botanistの逸話やZiegfeldの薔薇の話はalmost absurd and impossibleで、Shakespeareからの引用と知りながら、その場を繕うために聖書からの引用だという発言に賛同するのはhypocriticalだという意見と、このようなことも、人の和を保つために必要なこともあろう、という意見とに分かれた。Fabienneは、"Frankness is more important than politeness"と強く主張する。一本気な彼女は、鼻息は荒いけれど、根は優しい。(3年後、ブリュッセルで新婚の二人に再会した。)全員、本気で討議した。

[IV] 各節を要約し、このエッセイが誰を対象にしたものか、どの程度のものか、検討した。"Not very profound"とか、"Readers' Digest的で、low brow向き"とか、"For the people too old to make friends."などと、なかなか手厳しい。

2時限目は、プリント2頁の"Back to Nature"と題する文でcontrast and comparisonを勉強した。

[I] village & country life(rural life)とcity life(urban life)のそれぞれについて、本文に基づいてadvantageとdisadvantageとに分け、表にする。

[II] 語句の形と意味の確認。"cóntrast"と"to contrást", "comparison"と"to compare", "préference"と"to prefér A to B", "advantage"に対して"disadvantage"など。

[III] contrastを表現する語法をテキストから拾いだす。テキスト以外からも指摘する。

1) more important than/less important than
2) Whereas(=While) in the past, nowadays...
3) X(cars)..., while(=whereas) Y(bicycles)...
4) X..., on the other hand...
5) While it is true..., it's also true...
6) But...
7) You can compare/contrast A and B by...
8) A comparison between A and B lies in...
9) X differs from Y in being...

[IV] (dis)advantageの表現法。

1) X has the advantage of verb-ing

2) X suffers from the disadvantages of having bad weather.

3) One of the advantge of verb−ing in...

[V] Preferenceの表現法。

1) Given the choice/opportunity(=chance), I'd prefer to...

2) I'd rather X than Y.

《宿題》 contrast between X and Yで書く。

- X/Yは、car/bike, bus/taxi, your country/Britain, married/singleの中から選択する。
- 形式は、(1) ababab (2) aaabbbのいずれかを用いる。
- advantage & preferenceの結論をつける。

昨日の宿題が返され、各自個人指導を受ける。Very Goodではあったが、いろいろミスあり。

午後、見学コースの集合時刻までに、少し間があったので、BartとRoyal MileにあるGladstone's Landを見学した。17世紀のエジンバラ商人、Thomas Gladstoneの家である。1620年に完成し、Green Roomのみ、1740年頃に増築された。17世紀初め、徳川幕府の始まったころ、an Edinburgh burgess(自治都市の市民)が非常に裕福であったことがわかる。彫刻を施したベッド、ベッドカヴァーと共布の天蓋、天井画、簞笥、額絵、デルフトの食器、銀器。スピネットまである。戸棚や簞笥の円や放射線を組み合わせた独特な象眼。階下では羊毛を紡ぐところから、織物を実演している。製品のセーターやタータンの販売コーナーもある。

今日は別の初老の婦人だったが、バートのhost familyの奥さんも、交替でこの家のガイドをなさるそうだ。イングランドでもスコットランドでも、城館や宮殿や邸宅のガイドには中年以上の女性が多い。子育てのほぼ終わった主婦のパートの仕事であろうが、説明が手慣れており、親切で、明るく、ユーモアも自然で、聞いていてcomfortableである。

今日の見学は、B.P.Grangemouth(Linen Manufacturers), Beverage & Erskine, VAT 69(Whisky Blenders), Football, Scottish & Newcastle(Breweries)もあるが、モナ引率のOld Town Walking Tourに参加する。

Castle Esplanadeに始まり、Castle Hill, Lawnmarket, Parliament Square, High Street, Canongateを通り、The Palace of Holyroodhouseまで歩き、両側の家々や、closeという路地の説明などを受けた。St. Gile's Cathedralを初め、John Knox's House, Canongate Tolbooth(Walter ScottのThe Heart of Midlothianの題名は、この牢獄のこと),The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hideのモデルとなった、昼は市会議員で夜は泥棒だったBrodieの住んだBrodie's Closeなど、軒並み訪れてみたい。ScottやStevensonやBurnsの文学漫歩の宝庫である。(5年後にジョン・ノックスの家を訪れ、2階の小部屋にある木製手桶の用途を知ってたまげた！夜の間に溜まった排泄物を、毎朝2階の窓から往来にぶちまける。だからヨーロッパでマントとハイヒールが有用だったのだ。ヴェルサイユ宮殿にもトイレはなかったそうだし。少なくとも大都市については、江戸の下水設備は世界に誇れるものであっただろうし、江戸の方がロンドン、パリ、エジンバラより遙かに清潔であったと思われる。)

旧市街には、石造りの四階建がびっしり建てこんでいる。旧市街しかなかった時代には

全ての階層の人々が一軒の家の中で住み分けて暮らしていた。普通、2階と3階に貴族やお金持ちの家族、地階が召し使いの住居区域で、4階の屋根裏は部屋代が安いので、売春婦が住み、共有階段で皆が顔を合わせる、という暮らしであったそうな。新市街ができてからは、居住様式も変化した。

4時頃、ホーリールード宮殿前で解散になり、宮殿見学組と Salisbury Cragsへ登る組に分かれた。今晩はパンコさんに夕食を予約してあるので、Cragsへ行けば、6時半には戻れまい。(5年後に登った。)宮殿を見学することにした。

この宮殿は、1128年にDavid Iによって建立され、今は廃墟になっているAbbey of Holyroodのguest houseとして創建された。スコットランド女王メアリの即位したこの礼拝堂の廃墟で、1829年、20歳のメンデルスゾーンは、交響曲第3番『スコットランド』の出だしを見つけた、と手紙に書いている。さて、宮殿の最も古い現存の建物は、1529年にJames Vによって建てられたが、大部分は、1671年以降、Charles IIによって建てられたもので、現在は英国女王陛下のスコットランドにおける公邸となっている。

ここは、女王メアリが、悲劇的6年間を過ごしたことで有名である。女王のsupper roomには秘密の抜け穴が作ってあったのだが、暗殺者たちはここに潜んでいて、身ごもっていた女王と夫のDarnley卿の目前で、女王の愛人のイタリア人宮廷音楽師David Riccioを刺殺した。ズタズタに切り裂かれたリッチオの死骸の放置された女王のouter chamberの床には、真鍮のプレートがはめ込まれていて、惨劇の生々しさを物語る。夫ダーンレイ卿が首謀者だったといわれるが、彼もまもなく暗殺される。

Picture Galleryには、111人のスコットランド王の肖像画がある。近年、ある物好きな王様が、歴代の王の肖像画を飾ることを思いついた。ところが、どのような顔立ちであるかはわからない。そこで、エジンバラの町の通行人を何人か連れてきて、モデルになってもらったそうで、よく見ると同じ顔が何人もいるのは、このためである。こういうのをRoyal Scottish humourとでも言うのかな？

帰途、Canongate Churchで一休み。先程、モナが、ここのコーヒーはおいしいから、寄ったらぜひ、と薦めておられたので、そう伝えると、牧師さんは、「モナが推薦してくれたのか。」と大喜び。クッキーが付く。

再びRoyal Mileを上り、キルトのおじさんの写真を撮らせてもらったり、店の前で羊毛の玉から糸を繰り出し、糸車で紡いでいる少女の写真を撮らせてもらったりしながら帰宅。

9時からのtwo－men recitationを、refectoryの隣の建物へ観に行った。出し物は、E.A.PoeのThe Masque of the Red DeathとThe Tell－tale Heart。役者は、Cambridge Sad Companyのメンバーで、一人は医学生、一人は化学分析の会社員。『赤死病の仮面』を一人が語り、演じる間、もう一人は舞台後方の椅子に腰掛け、声でtick, tick, tick,...と時を刻み続ける。『秘密を漏らす心臓』では、一人はthump, thump, thump,...と動悸を打ち続ける。バートが、「月曜に観て良かったよ。」と薦めてくれたのだが、期待に違わぬ物凄い熱演で、観客も満足。遅いのでタクシーで帰った。

8月25日(木)　晴

1時限目は26－27頁のテープ教材、"The British Love Animals"を用いた。

1) 自分が猫が好きか嫌いかの理由を表に記入。

2) テープを聞き、JohnとJoの意見を表に記入。

3) 6種類の動物と11種類の性質を線で結ぶ。
4) JohnとJoの会話を聞き、教材下部の空所補充。
5) 教材の文の口頭練習。
6) 強調文例の口頭練習。
7) "last" や "just" のような/t/が発音されない6例を読みあう。

2時限目は、"Britain and the Common Market" という題で、Mr. S. Buddの講演。

石油政策：　日米の圧力にcompeteしていかなくてはならない。
女性の労働：　equal pay, equal opportunityへの要求。
失業対策：　communityが適切な処置をしてきていない。
ヨーロッパ共同体：Britainは参加していない。1975年の投票を契機に、public opinionが変化し始めた。
経済：　日本のテープレコーダーに対抗して、separate video recorderを作った。(しかし、パンコさんは日本製のテレコと車を使っているし、クラマーさんの車も日本車だった!)
汚染：　公害汚染のフロンティアは広がる一方。
対外政策：　アメリカとはtextileについて、ソ連とはfishについて話し合う。
当面の課題：　英国内の白人と黒人の問題及び南北問題。

続いて聴衆からの質問。

Q1．フォークランド戦争で何が失政だったか？
A.　軍事的にはフォークランド島を奪回したので、勝ったが、軍や政府が国民に秘密にしたことが多かった点が失敗だった。
Q2．ECへのソ連の進出への対処法は？
A.　例えば、ワインの問題については、イタリア、フランス、スペインなどとも十分に話し合うべきだ。
Q3．スコットランドの問題は、どのように解決するのか？
A.　スコットランドの問題は、スコットランドでしか解決できない。(答になっている?)
Q4．西欧先進国の後進国への態度をどう思うか?
A.　selfishである。というのも、過去において、大学を作ったり、農業を改良したり、膨大な費用を費やしたので、今後は出費を押さえたい。出費を増やせば、catastrophe に直面するであろう。

この講演では、日本非難がかなり顕著で、テープレコーダー、自動車などが槍玉に上がった。終了後、急に愛国心が燃え上がり、級友たちに、「日本には石油や鉄鉱石のような天然資源が徹底的に不足しているので、輸入原料を製品化して売らざるをえない。また、小麦粉、魚、果物、飼料なども大きく輸入に頼っている。言語(英語)は完全にイギリスやアメリカ側の輸出超過じゃないの。」などとまくし立ててしまった。

昼休みに、大学のタイプライターで、The Royal Scottish Museum宛ての手紙を打ち、放課後に届けた。私も観光通訳の端くれなので、妙な日本紹介がなされると、じっとしていられなくなる。

3時限目はヴィデオ教材の12頁。Social Attitude Through Humourの中のAttitudes to Foreignersを観た。English for foreignersのクラスへ、イタリア人、ドイツ人、スコットランド人、アラビア人、中国人、日本人、ギリシャ人、インド人、スペイン人、フラン

ス人、パキスタン人などの男女が入ってきて、national stereotypesとincorrect Englishで笑わせる。日本人は背広をきちんと着た紳士で、首からカメラをぶら下げ、いちいち丁寧にお辞儀をする。このテレビのせいで、その後、「カメラ好きの典型的日本人」と揶揄される羽目になった。

ヴィデオ教室で難しい語彙の説明があった後、教室に戻り、討論した。Scottish Jockや彼のScottish dialectについて。学生が間違えやすい英文。国別、地方別のステレオタイプ(独断と偏見に満ちた紋切り型の決めつけ)について。このような番組は、偏見を助長するのか、それとも無害なのか、それとも偏見是正に役立つのか。ステレオタイプにtruthがあるか。各自の出身国の人の特色をうまく表す逸話か笑い話があるか。各自の母国語が外国人にとって習得・理解に困難な点は何か。British peopleは外国人の英語の誤りに寛容か。間違えたら、訂正してくれるか。それぞれの国の移民の状況、及び、その困難の状態と救済策、などなど。

夜8時から、藤田先生とCesarinaと一緒に、SheguiとJanet Russellのスコットランド民謡とアイルランド民謡のジョイント・コンサートに出かけた。ジャネット・ラッセルは微笑みを絶やさず、ナレーション入りの弾き語りで、エジンバラ版お登紀さんといった趣だ。シェグイは5名から成る楽器奏者のグループで、これもナレーション入り。一人で代わる代わるいくつもの楽器を演奏する。例えばある人は、ヴァイオリンとギターとマンドリンと歌。ある人は笛を縦でも横でも6種類くらい。会場は熱気ムンムンで、酒を片手に一緒に楽しんでいる。知った調べはなくても、民族の心を肌で感じた。

帰宅後、作文の宿題をした。英国と日本の比較をしたが、どうみても小学生の作文。熱はコンサートで発散してしまい、ライティングには篭もらない。

8月26日(金) 晴

1時限目に、初日のクラス分けに使ったEnglish Proficiency Testの答え合わせ。最高点はバートの102点で、私は101点に採点ミス3点加えて104点。テキは学生、教員にしてはお粗末でした。倒置の仮定法過去完了形に正解を出したのが私一人であったため、黒板での説明を求められた。待ってました！ふだん教室でやってること。仮定法過去の普通の形から始める。

If I were a bird(=Were I a bird),I could fly to you.

If I had wings(=Had I wings), I could fly to you.

If I had been a bird(=Had I been a bird), I could have flown to you.

If I had had wings(=Had I had wings), I could have flown to you.

一同初めて聞いたような顔をしている。wereでなく、wasではないか、と質問した子もいた。「ンだ。口語ではwasも用いられるが、文法上はwereが正用法。」平生のlistening abilityのdeficiencyを埋め合わせて、心理的に平衡を保とうとしているのかも。この事はすぐに伝わり、別のクラスの子が、「文法がよくできるんですってね。」と言ってくれた。日本ではteacherなので、当たり前のことで、喜ぶべきことでもないが、目下当地ではstudentなので、分裂状態にあり、複雑ににこにこして、“Thank you.”

それにしても、英語教育は、日本とヨーロッパ諸国とでは、ずいぶん違う。今朝の答え合わせでも、否定の副詞(never, scarcely, notなど)が文頭に立つ倒置文も、他の学生たちは、あまり習っていないようだった。日本では高校3年までの学校文法で、一通り教えるし、大学入試にも必要なので、受験生は必ず詰め込まれる。ヨーロッパの学生たちは、

英文科でも、ここまで系統的に習っていない。その代わり、聞く、話す、書く、となると、すごい。聞くことに関しては、日常会話には全く不自由せず、テープやヴィデオをほとんど完璧に理解する。迷ったり、考えたりすらしない。西欧では英語放送も多く、テレビ映画も、映画も、吹き替えなしの英語のままだそうで、身の回りに英語が溢れているので、聞く機会に事欠かないそうだ。話すことに関しても、日常困ったり、苦痛を感じている学生は身近に一人もいない。イタリア人たちは、子音の後ろに母音をつける癖があって、ballをballaと発音したり、母音で始まる語にhを付加してみたり、語頭のhを脱落させたりして、“You Italians, be careful...”と注意されたりはしているが、元来音韻は共通しているものがほとんどなので、苦労しているとは思えない。否定疑問に対する答え方も、彼らの母国語と英語は同じであるから、英米人と同じく、全く自然に、考えることなく、口をついて出る。日本語は逆だから、日本語の頭でいる時には、考えてから答えないと反対になる。日本人が苦労する冠詞、前置詞、性や数の語尾変化や屈折に関しては、英語のほうがフランス語、イタリア語、オランダ語、ドイツ語などよりも単純だろう。あるとき、Coach Stationを探して道を尋ねた女性もたまたま予約に行くところで、歩きながら話した。彼女はフランス人だが、3週間でフランス語から英語にclickしたそうだ。私は20年程前に初めてアメリカで2年暮らすことになった折、ある時期に“click”してきたナ、と感じた頃、一種の知能低下を自覚したことを思い出す。例えば、テレビでSupermanばかり観るというようなことで、我ながらおかしいと思った。2年経って日本へ帰った時、今度は日本語に“click”するのに—アメリカで、家庭では日本語の生活だったにもかかわらず、全面的に日本語の生活に合わせるのに—再び低能状態になって、『桃太郎侍』を見続け、我ながら変だと思った。日本語と英語の変換は、私にとって非常に負担だったのであろう。ところが、ヨーロッパ人の場合は、clickすることは、少しも負担ではないらしい。語彙を増やせばすむ、と言っても言い過ぎではない。その証拠に、友人の学生たちは、皆一人で数カ国語を使える。アナはイタリア人で、外国語学科の学生だが、英語のほかに、フランスでフランス語を学んだし、秋にはドイツ語の勉強のために、ドイツへ2カ月行く予定だ。同じくイタリア人のバーバラは、英語のほかにフランス語ができ、ドイツ語もやり、日伊協会のようなところで、日本語を勉強しており、漢字まじりで日本語を書く。授業最終日に私の辞書をあげることにしている。エンゾもイタリア人、言葉が出て来ないと、両手をくるくる回し、alternativeを見つけて補ってしまう。チェザリーナとシルヴィアもイタリア人。6週間前に当地に着いた頃は、あまり話せなかったそうだが、今では日常会話はもとより、テキストの内容についての議論もしっかりやる。ベルギー人のフェビアンヌは、英米文学科生。ワロン語圏なので、フランス語が母国語だが、オランダ語は同様に達者で、ドイツ語もでき、日常生活での英語に、何の支障もない。国際関係(政治)の学生バートは、ベルギーのフラマン語圏出身なので、家庭ではオランダ語だが、フランス語は自在、ドイツ語もでき、英語の学力も抜群だ。Spoken EnglishのクラスのRaffaeliはスイス人の英米文学科生で、家庭や学校はイタリア語だが、フランス語、ドイツ語ができ、英語もまったく自然だ。Agnesも、会話クラスから移ってきたルクセンブルグ人で、国会で秘書のような仕事をしている。数ケ国語のfluencyが必要とされると言っていた。新しく習うことがあるのだろうか。Reginaも会話クラスがつまらないと移ってきたイタリア人で、なぜ英語を勉強しに来ているのかわからない。彼ら彼女らも、英語を書くとなると、間違いもするようで、作文を直されてはいるが、書くこと自体が苦労ではなく、しかも短時間でこなすらしい。

読むことに関しても、情けないことだが、スピードも内容理解の正確さも私を越えていよう。例えば、あるパラグラフを30秒で読みなさい、とか、1頁を2分読んで内容を尋ねられる、というようなとき、私はテストででもあるかのように必死になって集中し、それでも不十分なのだが、クラスメートたちは、いともやすやすと、気楽にやってのけ、要点を摑んで落とさない。日本にいると、英語の文字が日本の文字と違うことに疑問を抱かず、むしろ、さあ外国語を習うんだ、という出発点のように見なされているが、今ヨーロッパ人学生たちに混じって勉強してみると、文字の違うことが大きな負担であることを、しみじみと感じる。文字が同じだということは、漢文を引き合いに出すまでもなく、すごいメリットなのだ。新しく文字を覚える必要がない。文字形が同じのみならず、借入語や語源を同じくする語句も多い。教会名、道路名など、例えばSt. Maryは、何語でも似ていて見当がつく。印欧語族の西欧語間では、音、文字、統語法等に共通点が多い。例えば、not only ～, but also ～に該当する表現が彼らの自国語にそれぞれあるわけで、readingは、頭の中では置換作業に類似した知的作業なのであろう。

今春、4年ぶりに中一を教えることになり、1学期は既習組を担当した。初等科でブロック体は学習済みの生徒であるが、いまだに間違える生徒もいる。筆記体にいたっては、個人指導をしてもなかなか自分の名前も書けない生徒もいる。あまり能力の高くない生徒にとって、文字の負担は想像以上であろう。もし、今ロシヤ文字や、アラビヤ文字や、エジプト文字を強制されたら、私を含め、たいていの日本人の大人がパニクるのと同じだ。

Muriel Spark: The Prime of Miss Jean Brodieのブロディ先生はエジンバラの私立女子中学校の教師で、教育理念で校長と対立する。“education”はex(外へ)の語幹eとduco(私は導く)に由来するのだから、生徒の心にあるものを導き出してやるのが教育だとブロディ先生は考える。一方校長は、教育は外から知識を与えることだと信じるので、ブロディ先生にしてみれば、校長のやることは“intrusion”—in(中へ)とtrudo(私は強く押し付ける)、つまり「押し付け」——としか思えない。教育には両方の要素が必要だと思うが、受容の限界を越えた知識の押し付けは受容を不可能にするのみならず、苦痛を増すのみである。教育が個人の願望(内在するもの)と才能(内在するもの)に知識(外在するもの)や訓練(外在するもの)を付加して、環境に適応でき、かつその人自身立派な人間に作り上げることだとすると、本来個別的な作業であるから、担当生徒数の多すぎる大量生産的なやりかたでは、平均的な枠にはまらない優れた生徒は育てきれまい。

コーヒーブレイクの間に、大学近くの旅行社で、始業前に依頼しておいたCathayの帰国便確認をすませた。意外に厄介な仕事だ。

コーヒーブレイクの後、チェザリーナとシルヴィア以外の全員が、The Kick Theatre CompanyのThe Tempestを観に行くことになっていたので、予習することになった。図書室から二人に1冊の割りで借り、1幕1場を交替で読み、シェイクスピアの英語に慣れておくことにした。英文科の学生も多いのに、『嵐』を知っていたのは私だけだったので、粗筋を話すことになった。

The Tempestの会場、St. Cuthbert教会は、一見体育館。椅子を窓際と祭壇下の三方に並べて観客席とし、中央の床で演じられた。これほどリアルに汚らしいProsperoとMirandaは初めてだ。Arielは女優が演じた。Calibanは白人男性なのだが、メイクも衣装も限りなく獣に近く、縄で縛られ、打たれ、はなはだマゾ的演技だった。Ferdinandにいたるまで、全員が台詞を絶叫し、早口でまくしたてたので、観ながら力が入ってしまい、終わったら疲れ果てた。やはりfringe,小道具係は、手の空いている役者が衣装のまま、

観客席の入り口で、薄のような草の大束を新聞紙の上でこすって波の音を立てたり、天井から客席の上に斜めにかぶさって吊るした帆布を揺すって大風の効果音を出したりする小さな劇団だ。

終わってから、Coach Stationで、8月30日のGlamis Castle行きのバスの予約をし、G.P.O.で、書籍を送るためのダンボールを買い、楽器屋でスコットランド民謡集4冊を買った。ここの店員は、何を勘違いしたのか私に、「日本は輸出超過だ。何とかしてほしい。」と文句をつけた。「ホレホレ、このとおり日本はスコットランド民謡を輸入してるよ。百年も前からスコットランドは日本へ民謡の輸出超過なんよ。」

8時からUsher HallへPinchas Zukermanのヴァイオリン・リサイタルを聴きに行った。ピアノはMarc Neikrug。今年はブラームス生誕150年のため、オール・ブラームス・プログラムである。

Sonatensatz
Violin Sonata in G, op. 78
Viola Sonata in F minor, op. 120 no.1

ズッカーマンは落ち着いた演奏で、ヴァイオリンは沈潜した深い響きがあり、ヴィオラは対照的に諧謔味があった。二階最前列中央の私の左席の気さくな中年ご夫婦は、「ほら、ここにもエジンバラ市の花の薊の彫刻が施してあるんですよ。」と、木の手摺りの羽目板を指された。右席の大柄な黒人青年は、白人女性とのデートに必死で、妙なる音色も耳に入らぬ様子だった。

8月27日(土) 晴 Highland Tour 第1日

好天に恵まれ、9時30分に、バスはHill Placeを発車。ガイドはIsabella,大学からはDickが添乗。English for University Studentsのほかに、English for Academic Purposes, Spoken English, Courses for Teachers of Englishのコースからの希望者で、バスはほぼ満員である。

エジンバラを出て、長いForth Road Bridgeを渡るとほどなく、Dunfermlineへ着いた。ここでAbbeyを見学する。城塞風の修道院で、スコットランド王Robert the Bruce(1274－1329、在位1306－1329)と王妃の墓所である。外側は薄茶色の煉瓦造りで、正面中央の塔の頂に、透かし彫りのKINGとROBERTの文字が青空に浮き出ている。白い雲が棚引き、時々塔をかすめる。王は、1314年にBannockburnの戦いでイングランド軍を破り、スコットランド独立を成し遂げた国民的英雄である。Fifty Famous Storiesで馴染みのある人だが、遠い異国の人だった。現実にこの地に来てみると、実在の人だったことを実感する。これが旅の効用であろう。お墓は内部にある。約1畳の黒光りする御影石で、床にはめ込まれ、紺地に金の十字架の紋章飾りが墓頭を飾り、近年建造の木彫装飾を持つ木製の二階建ての祭壇が、ステンドグラスで飾られた一隅に設けられている。王の心臓は、エジンバラ市東南のMelroseに葬られているといわれる。〔写真9〕

寺院に隣接して、Dunfermline Palaceの廃墟がある。Malcolm Canmoreの時代に、寺院のゲストハウスとして建てられ、James VIの妃、Anne of Denmarkの時代から王宮となった。Charles Iは1600年にここで生まれた。草地を背に、上部がアーチ形の窓の並ぶ黄灰色の煉瓦を積んだ宮殿跡。床面は部屋によって、高く、あるいは低く、石が敷き詰められている。谷に面した横長の邸で、あまり広くはない。破れた窓越しに深緑の景色が望める。

バスはLoch Levenの傍らを過ぎ、Perth(土地の人は[pere]と発音する)の町を通る。River Tayに面し、かってはスコットランドの首府であった。Sir Walter ScottのThe Fair Maid of Perthの舞台で、The Fair Maid's Houseというantique shopがある由。再びテイ河に沿い、Dunkeldの町に入る寸前、イザベラが、「今通った右手の森がBurnam Woodよ。」とマイクでアナウンス。魔女たちが、「動かないうちはマクベスは負けない。」と予言した森が、ここにあった！よく見れば地図にも載っているが、うっかり見過ごすところだった。

テイ河に懸かる橋の中央に立つと、上流に向かって右岸は芝生、左岸には木立が水辺まで繁って川面に影を落としている。河は流れているかどうかわからないほど平らで静かで、光の帯のようにきらめきつつ、緑の間をうねっていく。町へ出た。昼の休憩時間のせいか、人通りはなく、店もほとんど閉まっており、物音がしない。と、キルトスカートにハイソックスの老紳士が、白いむく犬を連れて歩いて来た。「スコッチテリヤ？」「ノー、ハイランドテリヤ。」なるほど。ローランド紳士とハイランドテリアの写真をパチリ。〔写真10〕

ミートパイとジュースを買い、先程の川岸の芝生に藤田先生と来てみると、幾組ものグループが楽しいお弁当の真っ最中。左手の五つのアーチを持つ煉瓦造りの名橋と悠然と流れる河の眺めは、安らぎを与えてくれる。と、私たちを歓迎するように、向こう岸の緑滴る木立の奥から、バグパイプの演奏が聞こえてきた。最高に豪華な昼食だった。

この町には、大聖堂の廃墟や、1689年のthe Battle of Dunkeld以後にthe TrustとPerth City Councilによって建て直された17世紀風、18世紀風の切妻に白壁のスコットランド家屋が20軒あるのだが、河に見とれていて、訪れる暇を失ってしまった。

PitlochryでバスをPitlochry Festival Theatreで降り、2時からThe Pitlochry Theatreで Twelfth Nightを観る。ロビーにはガラスのブラインドがある大変モダンな近代建築の劇場である。

演出はJoan Knight。主な配役は、OrsinoをAlec Heggie, ViolaをKate Ingram, MariaをClare Richards, OliviaをSarah Benfield, malvolioをFrank Moorey。風変わりなのはColin Winslowによる装置で、舞台の向かって左手に、南欧風の白亜のアーチ付きの玄関のあるオリヴィアの二階建ての邸があり、右手には同様の二階建てのオーシーノ公爵の館。この2軒が、舞台中央を横切る二階レベルの渡り廊下のような無蓋橋で繋がれている。下は公道で、真ん中に揚げ蓋の地下牢があり、可哀想なマルヴォーリオは、後にここに幽閉される。オーシーノもオリヴィアも玄関前へ出て台詞を言う。Sir TobyやSir Andrewが、偽手紙を拾って有頂天になったマルヴォーリオの独白に合いの手を入れて冷やかすのは、2軒を繋ぐ橋の上からである。サー・トービーたちがマライアと真夜中に乱痴気騒ぎをしでかすのも、ヴァイオラとサー・アンドルーがチャンバラをするのも、この公道上である。マルヴォーリオは少し重々しすぎたようだが、難しい役だ。重すぎても軽すぎてもいけない。黄色のガーターは膝下に一重に単純に巻いてあるだけだった。衣装はオーソドックスで奇を衒うものではない。俳優たちも一生懸命で好感が持てたが、強い印象を与える演技ではなかった。しかし、comedyはそれでよいのであろう。シェイクスピアも“or, What You Will”と付加している。

芝居がはねてから、劇場のレストランでhigh teaにした。ハイ・ティーの実体が日本にいてはわからなかったが、supperと思えばよい。レストランなので、数種類のうちから選択でき、夕食として十分だった。

バスは5時に出発し、Glen Garry沿いにheath/heatherの咲き乱れる山麓を走る。こ

の辺りのヒース／ヘザーは濃いピンクで、ぼーっと霞んだピンクが蓮華畑のように山一面を覆っている。ブルッフはスコットの小説に心を動かされて、『スコットランド幻想曲』を作曲したといわれている。これを書いている今、ヒースに彩られた山々や、深く冷たい水を湛えた静かな湖を想起しながら、ハイフェッツの名演を聴くと、二つのイメージは重なって強め合い、鎮めることのできない郷愁の淵に私を沈める。

Avimore辺りでバスを降りる。（正確な地名を記録し忘れたが、地図に印がついている。）なだらかな山を背に、白い城館があるが、閉じている。領主は財政難のために売りたいのだそうで、常住していない。広々としたmeadowに続いて、柵に囲まれたdeer parkがあり、つぶらな目の鹿が草を食んでいる。牧場脇の軽い傾斜の、美しい並木道を登っていく。カンスタブルかゲインズバラから抜け出したような素敵な樹木の列。両側に何本ものlime treeの大木が、小指の爪ほどの小さな緑色の細長い実をサクランボのように垂らしている。「これがドイツ語のLindenbaumなの？」葉は掌ぐらいの大きさで、先端が三つに分かれている。シューベルトの『菩提樹』はこのような樹だったのか。釈迦はこの木の下で悟りを開いたのか。気持ちがのびやかに和み、木々にも、一緒に歩いている友人たちにも、限りない親しみを感じた。私たちみんなが、まだ明るい田園に溶け込んでいった。

歩きながら、イザベラとディックにheathとthistleは見たけれど、bluebellはまだ見られなくて、と話すと、bluebellは５月か６月に咲くから、８月末では無理そうね、とのこと。また、二人ともnightingaleは聞いたこともないそうだった。動物園で飼っているわけもなく...

River Speyの岸伝いに北上し、Tomatinに着いたのは、８時頃であったろうか。外はまだ明るく、広漠と広がる草地の中にポツンと建つFreeburn Hotelのほかには、建物はおろか、人の気配すらない。このホテルと、バスで15分ほど離れたもう１軒のホテルに分宿することになった。藤田先生と私は、離れのプレハブ平屋で、隣室には、イタリア人の女の子たちが泊まる。

ロビーでコーヒーとサンドイッチをつまむうちに、もう一軒のホテルの連中もやってきて、Highlandの夜への期待がいやが上にも高まる。ロビーの奥の扉を開けるとバーだ。先程は、人っ子一人いない寂しい土地柄だと思ったのだが、酒場は満員の盛況だ。どこから湧いたか、老若男女が、グラス片手に、頬を染め、目の縁も染め、熱くなってしゃべりまくっている。この地方は水が良質なので、八つのdistilleryがあり、この人達は、そこで働く人々とその家族だ。アル中はないのかと、余計な心配をして尋ねたら、「ある」という返事。スコットランドでは穀物を「命の水」（whisky／whiskeyのゲール語の語義）と称して気違い水にして飲むことに精を出すため、アル中は社会問題なのだそうだ。それでも飲まずにいられない。誰も彼も非常にfriendlyだ。Tomatin Whiskyはpure maltで、１本８ポンド。お土産にいいよ、と薦められ、後で買おうと思っていたが、翌朝ケロリと忘れてしまった。pure maltの小さいグラスを手に、「賑やか」を通り越したすごい大声と音楽の喧噪の中に紛れ込んだ。もともと混んでいたところへ、バス１台分が更に加わったのだから、座る席を探すことも、それどころか、人をかき分けて歩くことすら、容易ではない。皆にこにこと如才なく、ただそこにいることを楽しんでいる風情だ。私も相手構わず誰彼としゃべっていたが、何をしゃべっていたのか、あまり記憶にない。戸外は日本の秋のように肌寒く、厚地のセーターかジャンパーが必要だが、室内は熱気ムンムンで、あちこちにセーターやジャケットの山ができた。スコットランド民謡がかかり、大学生たちは、先日習ったばかりのステップで、踊り始めた。

10時半頃、4マイル離れた狩猟小屋へ行くことになり、小型トラック2台にぎゅう詰めに押し込まれた。夜道に野兎が跳び出して、急ブレーキ。猟期にハンターが泊まるこの小屋に、今晩は男女の学生10人ぐらいが、バイトで来ている。旗を持って、数メートル置きに並ぶところへ、ハンターたちが、撃ってくるのだそうだ。グラスゴーから来ていた看護学の女子学生に、「怖くない？」と尋ねたら、「大丈夫、怖くないわ。」という答え。私だったら怖いなあ。毎日12時間働くのだそうだ。それでいくら稼ぐのか、聞き漏らした。トマーティン・ウィスキーの効き目と、一層すさまじい喧噪のため、ボーッとしている。音楽がけたたましいので、罐ビールを手にした誰も彼もが、しゃべるというより叫んでいるが、目の前の人の声が、耳をそちらに向けないと聞き取れない。おまけに土地のエーゴだ。12時が鳴り、シンデレラよろしく帰ることになった。オヤ、戸外で涼んでいる二人！皆で二人の回りに輪を作ってぐるぐる回りながら歌った。寿司詰めミニトラックでホテルに戻ったのは12時半。

8月28日(日)　晴　Highland Tour　第2日

7時20分起床。シャワーの後、清々しい気分で柵の外へ出ると、朝日を受けた小川はキラキラ光り、低い山並みは新鮮な緑の濃淡に彩られていた。

食堂はまだ空いている。イザベラの手招きに応じて、スペインの専門学校生と藤田先生とテーブルにつくと、一本のbluebellを手に、「昨日、見たいと言ってたでしょ。ちょうどあったの。あげましょう。」「スコットランドの釣鐘草」は、青というより藤色で、直径は2.5センチくらいの5弁の花。桔梗を小型にしたような花が、枯れかけた茎の先端についている。(イングランドではharebellと呼び、イングランドのbluebellは別の花である。)イザベラの思いやりに、胸を打たれた。諦めていたので、夢のようだ。イザベラはブルーベルとヒースと薊を一緒にブーケにしてくださった。ブルーベルだけ手帳に挟み、残りの可憐な花たちはイザベラの胸を飾った。

朝食はScottish breakfastに決めた。まずporridgeつまりオートミール。これを食べるということは、“to put your brain into your stomach”すなわち“to become very brave”というイザベラの言葉に、“like Robert the Bruce”とノってしまう気分はハイな私。「今朝は食べる前から勇気が出て、柵を乗り越えて、川を見に行ってしまいましたのよ。」porridgeで思い浮かぶのは、Goldilocks and the Three Bears。元来ペローの童話だが、フランスでも porridge は庶民の朝食なのだろうか。スコットランドのporridgeは、日本のオートミールと全く同じだという新しい発見をした。kippersは、燻製鰊。パンコ家では、毎朝全く同じcornflakes with milk and sugar, bacon & egg, bread, teaという朝食が続いていたので—結局最後まで3週間続いた—このヴァリエーションは嬉しかった。

Invernessへ着く。橋の中央に立ち、川上と川下の両岸を眺めた。Beauty FirthとInverness Firthとの接合点から流れるRiver Nessの河口の近くだ。川幅はテイ河と同じくらい。片岸はNess Walkという遊歩道。河口に向かって右側には、車も通り、高台のCastle NessがRiver Nessを見下ろしている。この河の続きの湖に怪獣が住んでいるのかいな。橋のたもとに人だかりがしている。数日前に盗まれた自転車が、河に捨ててあり、拾い上げたところだ。こんなに北の国でも、人間の生活は相も変わらぬ。ネス河は、インヴァネスから7マイルほど上流から、ネス湖となる。インヴァネスの東北約10マイルに、Thane of Cawdorであったマクベスの城Cawdor Castleがある。ネスカフェ・コーヒー

のCM第２弾で、領主のコーダー伯爵が居間で湯気の出ているマグカップを手に、「違いのわかる男!」。(第１弾は岩城宏之の「違いのわかる男！」)それから夫妻が犬を連れて庭園を散歩される。あのコーダー城へ、残念ながら今回は行かれない。(５年後に訪れた。)Loch Nessのほぼ中央、DrumnadrochitのVisitor Centreでバスを降り、Loch Ness Monster Exhibitionへ入った。(入場料£1.35)1933年以降の目撃者の証言や、科学的調査の数々が展示されているのだが、イマイチ。ネッシーは雄ではなく、Miss Nessieなることを発見。そう言えば、ieで終わるのは女性でした。売店には、タータンのベレーをかぶったネッシーや、リボンを首に巻いたネッシーの縫いぐるみや絵葉書など、ネッシー・グッズだらけ。オルゴールをおなかに納めたネッシーは、何と鳴くのかなあ？牛の食む牧草の匂いがバス道路まで漂っている。バスは、歩いている人を拾いながら、10分ほどで、Castle Urquhart前で止まった。

ハっと息を呑むほど美しい古城！空は青く澄み渡り、眼下でネス湖は静かに水を湛え、緑の芝生に覆われた城山、崩れた本丸や石垣の黄色、淡灰色の石を畳んだ路やなだらかな石段などが、絵そのものだ。対岸の緑の丘陵が湖に影を落とし、陽光が、ネス湖も、城址も、私たち皆をも包み込んでいた。管理人小屋は閉鎖され、だれもいない。私たちは、遠足の児童のように駆け出し、斜面を下り、柵を乗り越え(!)、城跡に突進して行った。イザベラは少し気掛かりの様子。万一咎められたら、みんなで謝るからね。ウルクハート城は、1509年に築城され、スコットランドでは大きいものだったが、1689年、Jacobites Risingの後で破壊された。今も秘密の部屋が二つあって、一つには宝が、もう一つには毒が貯えてあると信じられているが、どちらか開けてみようとした人はこれまでいないそうだ。〔写真11〕

芝生で、先生のディック、ガイドのイザベラ、藤田先生、スイス人のラファエリ、ギリシャ人のマリア、ベルギー人のバート、イタリア人のレジナと婚約者、ベルギー人のフェビアンヌ、ドイツ人の男の子とイタリア人の女の子たちと円座でピクニック。食後、また小学生のように、廃墟を探検して回り、ネス湖に手を浸した。(帰国後、ある写真勉強会でのウルクハート城の写真の評は、「ネス湖がこんなに明るい筈がない。」)

《妖精の城》を後にして、ネス湖沿いに南下し、River Oichを過ぎ、Loch Lochyに沿って走り、Fort Williamsへ着く。ここでloo stop。左手にBen Nevis(4408フィート、1322メートル)が聳える。山肌に幾条も走る氷河の爪痕は、真夏の濃い緑に覆われている。Loch Linnhe沿いに走り、Glencoeへ着く。ここは部族間の抗争で、女・子供ぐるみ全員が虐殺された悲劇の地だ。約１時間の小休止になり、有志は山を歩くことになった。下車すると、キルトスカートのおじさんが二人、バグパイプを演奏しているではないか！スコットランド民謡が、山の澄んだ空気の中へリューリューと響き渡り、大空と山々に吸い込まれてゆく。10ペンス置く。二人の前には、ヒースの鉢植えまでも置いてある。うまい商売だと思ったのは東京へ帰って来てからで、その時は感激の極みだった。山は一帯がヒースに覆われた湿地なので、一歩ごとに足がふわりと沈み、運動靴が濡れる。ヒースは白いのも、薄いピンクのも、濃いピンクのも、花の大きめのもある。イザベラが、「根ごと引き抜いたヒースを、うまくじゃがいもに植え込むと、１年はもつわよ。」と教えてくださったので、試してみよう。ハワースでムアを歩いた７月は、カンカン日照りの暑さ続きで、地面は異常に乾燥してカチカチに堅くなっていたが、本来はジクジクした湿地の原野なのであろう。私たち６人は清冽なglenを渡り、急な山路を30分登り、フーっとヒースに腰を下ろした。登山者も来ない静寂と、蓮華色に染まった山並みの眺望の素晴らしさは、忘れ

られない。〔写真12〕

Loch Earnに面したLochearnhead Hotelで夕食後、湖の桟橋に出てみると、小舟が係留され、家族で潜水を楽しむ人たちで賑やかだ。ボートが滑ってゆく。漕ぎたいな。足をぶらつかせていると、レジナとフィアンセと、フェビアンヌとイタリア人の女の子が来た。日本の歌を所望され、なぜか松井須磨子の『カチューシャ』を歌った。バートも来た。フェビアンヌがふざけて後ろ向きに落ちるまねをして危ないよー。みんなの笑い声が、湖面を渡って余韻が残った。

9時頃、バスはPrinces Streetの西端に着き、Lothianから市バスで帰った。「ネッシーを釣ってくるわね。」という約束は果たせず、パンコさんは、ネッシー・ステーキ・ハウスをまだ開けない。

8月29日(月) 晴

1時限目は現在完了形の練習。

(1) テープで六つのdialogueを聞き、プリントの何番の絵と合致するか書き込む。
(2) それぞれのdialogueについて、プリントの数問に答える。
(3) 八つの現在完了形の文に関して、プリントの数問に答える。
(4) いくつかの慣用表現及び語法上の注意。

2時限目。黒板に、"The genius baby begins its climb."と書かれている。これが何を想起させるか、二人ずつペアで考えをまとめ、発表しあう。私の組以外は、genius babyとは、異常に発達したコンピューターのことだと比喩的に考えた。私の組は、天才児が大人になって、social staircaseを登るのだと推量した。実は、これは、1983年8月21日の新聞記事の見出しで、推定IQ200の満1歳を迎えた赤ちゃんが、階段を昇り始めた、という意味であった。で、私は、昨夏の毎日新聞の、カリフォルニアの大金持ちがノーベル賞受賞者などから提供を受けて精子銀行を設立した、という話題を提供し、日本では、夫に原因があって不妊の夫婦に、慶大医学部の学生がdonorになって子供を設けることもできるということも披露した。ついでに、ある女優の結婚申し込みに対するBernard Shawの有名な断りの文句で皆を面白がらせた。この種のgenetic engineeringには、次のような理由で、全員が反対した。(1)自分の出生を知った時の子供の精神的外傷、遺伝の問題、親の心理上の問題。(2)子供は親をadoreしなくてはならず、初めに愛があって、子供が生まれるべきなのに、愛とは無関係だから非人間的で不道徳。(3)冷たく、無感覚で、非情だ。今後は卵子提供も採り上げられるだろう。

本題の記事は、坊やの名前がDoronでdonorのanagramになっていること、母親のこと、提供者のことなどいろいろ出ており、それらについてもQ&Aや議論に沸いた。

3時限目はvideo&discussionで、テキストは20頁のThe Effects of Technologyの"Robots"。これは、BBC−2"Money Programme"のヴィデオで、いろいろな所で使われるさまざまなロボットの例が出る。中で静岡のテレビ工場が長々と写し出された。黄色の制服と清潔な工場。東京からのリモコン操作で動き続ける機械類。英国人は8時間労働であるのに、日本では24時間操業をして生産台数を上げると、日本を非難めいた調子で写し出していた。

プリントで、formal English and informal Englishの難しい語句の説明があった。

教室に戻り、テレビで使われた語句の中から"to liquidate"の語義と説明がなされ、to liquidiseやliquidityとも比較。pair workで3点を、group workで4点を話しあった。

ロボットのadvantageには15、disadvantageには13の項目が出された。

4時から1時間、Mr. Michael RidingsによるHenry James, Joseph Conrad, D.H. Lawrence, Virginia Woolf, James Joyceの5人以降の"Contemporary Literature in English"という非常に興味深い講義が、次の八分野に分けてなされた。
(1) The Death of the Novel (2) The Campus Novel (3) Women Novelists (4) The Lost Domain (5) The Novel as Sociology:Perspective on Society (6) "The figure in the Carpet" (7) Journalistic——a man on the spot (8) Historical Novels——Seasons in Hell

1頁半ほどのreading listが配布された。First Choiceの中のWilliam Golding: Rites of Passage(1980)に丸印が付けられているが、今朝(1983年10月9日)、彼のノーベル文学賞受賞のニュースを耳にしたばかりである。(1993年6月19日没)

終わってから、皆が先日の教室風景のスナップを見たいというので、現像を依頼。36枚の2本で6.58ポンド。

8月27日がバースデーだったパンコパパのためにフルーツゼリーを作ろうと、パイナップルとプラムと黄桃の缶詰とゼライスを買って帰る。日本のゼライスと違って、溶けにくい。

パパは今晩night shiftなので、夕食はママと子供達二人と私だけである。ハイランドへ出かけた週末にお貸しした"The Bluebells of Scotland"と"Bluebell Polka"の楽譜が、大騒ぎを引き起こしていたのだった。土曜の晩、ステファーニャがピアノを練習した後、ママが弾き始めたら、パパが入って来て、黙ってテレビのスイッチを入れたそうだ。「あなたならどうする?」と彼女。「ピアノを弾いているのだから、一言断ってもいいんじゃない?」と彼女が言ったところ、彼は怒りだし、揚げ句の果てに、一人でポーランドへ帰る、とまで言い出したのだそうだ。この種のごたごたは私も経験済みよと言って、二人で涙ぐみ、ステファーニャもジョンも思い出して湿っぽくなった。

8時半から、博物館の向かいのFestival ClubへThe McGibbon Ensembleによる18世紀のScots Fiddle Musicを聴きに行った。ヴァイオリンはEdna Arthur,ハープシコードがBryce Gould,チェロはDavid Johnsonで、1979年にトリオを組み、あまり知られていないスコットランド音楽を放送したり、自国内のみならず、オランダなどに演奏旅行もしている。ジーグ、子守歌、行進曲、民謡などを、各楽器のソロやトリオで演奏。バロック音楽との類似を感じた。8曲のうち、出版されているのは、Charles Mclean の Sonata no.9 in Dのみだが、楽譜は買いそびれた。ヴァイオリニストはロングドレス。ハープシコード奏者はキルトスカート、白ワイシャツに同じキルトのネクタイ、ナイフを刺したハイソックス。曲の解説者のチェリストはキルトスカートにベージュのワイシャツ、ノータイ、ソックスにサンダルばき。キルトは日本ならさしずめ紋付き羽織り袴。演奏に酔い、終了後はワインに酔う。

8月30日(火) 晴

1時限目は、昨日配布された黄色いプリントの残り2枚で現在完了形の勉強。「時と条件を表す副詞節では、未来形を用いずに、現在形あるいは現在完了形を用いる」など、平生教えていることで、まあリラックス。

次に新聞について(91—92頁)。実物のThe Guardian, The Times, Daily Telegraph, The Sun, The Observerを、極左、左寄り、中庸、右寄り、極右などに分ける。お手

上げだ。次に、自国の有名紙について、同様に区分する。自信なし。ベルギーは自国で新聞を発行せず、Le Mondeを読むそうだ。新聞を発行しない文明国があるなんて、信じられない！蜂の巣を突ついたような騒ぎ。

GabbyとJohnの新聞批評のテープを聴き、プリントの線結び作業の後、再びテープを聴き、Gabby, John, Editorの会話の中の空欄を補う。テープで使われているいくつかの語句や表現――I would rather say――などを順に口頭練習する。

コーヒー・ブレイクの間に、バスでNorth Bridgeの写真屋へ写真を取りに行き、銀行でＴＣを現金化する。

２時限目は、Current Affairs Forumで、大階段教室の壇上には、Mr. Tennentを含めて４人の講師。

銘々が前以て討議の案件を提出しておくことになっていた。

（１） フォークランド戦争について。

A. 必要。有用な破壊活動だ。

B. 受け身。

C. 不必要で恥ずかしい。政府のやりかたにむかつく。

（２） Princes Streetの店に空き家の多い理由。

A. 市の中心街の税率が非常に高く、維持できない。駅の近くにJohn Lewesのような大きなセンターができた。プリンセス・ストリートの店は、オーナーがチェーンストアにしたいのではないか？

D. 景気後退で、市民はお金を落としたがらない。店は遠くなる。

B. 郊外居住者が増え、市内で買い物をすることが減った。

（３） 英国リーランド社の解雇者について。

D. 会社は共産主義者が働くのは好まないが、止める法律はない。

B. 政治上の策。

C. 共産主義者であることや、解雇されたことを願書に書けば、雇われる見込みはない。大学入学も、Ph.Dも無理であろう。

A. 制限は必要。

D. 解雇された場合、解雇不当を申し立てると、会社は補償として2000～3000ポンド支払うことになっている。現在、英国全土で、約40万の失業者がいる。

（４） 家庭内の夫婦の役割分担について。共稼ぎの場合、所得税の割引きはどちらが受けられるか。（私の質問）

C. 法律上は、教育の機会均等、就業の機会平等、賃金の平等が謳われている。しかし実際は、女性は低賃金労働に従事することが多く、エリザベス女王とサッチャー首相を除き、トップの地位にはつけない。困難あるいは差別に類するのは、次のような場合である。

(a) 夫が転勤すれば、妻は仕事を止めて従う。

(b) 妻が大学に応募するとき、第一に尋ねられることは、子供の年齢。

A. 家庭内での分業は差別とは言えない。夫がリーダーシップを取るのは、妻が夫より受け身だからであろう。

D. 国会議員の数は650名だ、今、女性議員は24名にすぎない。それでも、総じて女性の雇用は他のヨーロッパ諸国より多い。失業者数としては、女性の方が多いのであろうが、なぜか女性は失業者の数に入っていない。妻だけが稼ぎ手のとき、所得税の減

税を得られないことが問題である。

(5) スコットランド人の自意識の強さについて。

イングランド人の自己満足が鼻につく。

地方性を認めたい。

イングランド人は政治的に保守的すぎる。

スコットランドは歴史上虐げられた。

イングランド人は小さくて貧しいスコットランドを羨んでいる。

EnglishはScotsにフットボールで勝ってほしくない。

(6) 平均年収は？(私の質問)

約7500ポンド。

昼休み、今でないと間に合わないので、先程の写真の注文取りをフェビアンヌに依頼してから、中国食品の店で、筍の缶詰2缶買う。

3時限目はヴィデオ。"War of the World"という1953年のSFシネマを見て、プリントの下線部を補ったり、問いに答えたり。宇宙人が円盤の宇宙船に乗って飛来し、人間たちを火器で焼き殺すという荒唐無稽な話。

授業が終わってすぐに、Bedlam TheatreへBelfast Morning ShowによるW. B. YeatsのThe Cat and the Moon(1924)を観に行った。地上ながらアングラで、舞台を囲んで半円形に客席が10列ほど。猫も月も登場せず、聖人と盲目の乞食と跛の乞食と、二人の楽師だけだった。公演時間は30分強。

George IV Bridgeのレコード店で念願のテープを入手した。「野鳥」シリーズで、この中にnightingaleの声が入っているはずだ。

夜、チェザリーナとThe Duchess of Malfiを観にいくために、YWCAへ前売りを買いに行った。GPOでアナに会った。

この救いのないWebsterの悲劇を、今回の演出では、まことにbizaarでmacabreで不気味なものに纏め、この世の地獄を現出した。男性はタキシード、女性は黒のワンピースと黒の帽子ばかり。声の効果音とマイムの多用も恐怖感を煽った。匂いつきの煙幕の使用が加わって、肩も脚も緊張でカチカチになり、終わった時には、「私は生きている！」チェザリーナは同じ学生会館の女子学生3人と来ていて、一緒にLothianを歩き、家まで送ってくれた。

8月31日(水) 晴

9時30分、Eastern ScottishのバスはAndrew Squareを発車し、マクベスのGlamis Castleへ向かった。私の隣席と前座席には、60〜70歳代の3婦人。早くもthree weird sisters(?)に会えた、と有頂天。教員や骨董店店主の未亡人の仲良し3人組で、時々旅行を楽しむ大変に親切な方たちだ。バスの通り道の目に入る建物を次々と説明してくださる。ガイドも兼ねてマイクで説明する運転手のマイクを通した音がひどく悪い上にScottish訛りがあって聞き取れないのを、通訳してくださる。私の地図を取り上げて、通過地点に丸印を付けてくださる... バスはFirth of Forthに沿って、Linlithgow, Falkirk, Stirlingと来て小休止。tea houseと売店がある。Doune Motor Showでは由緒正しい古い車種の展示。駐車場は野原の真ん中で、3本のナナカマドの大木が、黄、朱、赤の実をいっぱいつけていた。Dunblane, Blackford, Anchterarderと来て、Perthで1時間昼食休憩。牛肉と野菜をホワイトソースで煮込んだBelgian Casseroleに舌鼓を打った。

Balbeggie, Coupar, Angus, Meigleを通って、Glamisに着く。ライオンとサチュロスが門番をしている“Devils Gate”を入り、昔は狩りをしたと思われる林や草地や牧場を両側に見て邸内の並木道を5分くらい走ると、突然前方が開け、正面にいくつもの石造りの円塔を備えたグラームズ城が威容を現した。城の全面は広々とした芝生、背後は青々とした木立。

ここはthe Queen Motherのご生家で、14世紀に当主がグラームズ城主になって以来、王室と関係が深い。現当主は第十七代Strathmore and Kinghorne伯爵夫妻で、エリザベス女王のいとこに当たられる。明日は母后陛下の御成りとのこと。

Macbethは、1603年にイングランド王ジェイムズ一世を兼ねることになったスコットランド王ジェイムズ六世のために書かれたといわれている。グラームズ領主も王に随行してイングランドへ来て、マクベス悲劇を話したのかもしれない。1040年にマクベスがいとこのDuncan Iを殺害したのはこの城ではなく、Elgin近郊といわれ、この地は領主領ではなかった。しかし、偉大なるシェイクスピアのお陰で、城内には、グラームズ領主がダンカン王を殺した“Duncan's Hall”という伝説上の一室がある。あまり広くなく、石を積み上げた内壁は剝き出しで、アーチ型天井を持ち、アーチ型の暖炉や、小さい格子窓がある。鹿の頭が壁に掛けられ、立ち上がった熊の剝製が置いてあるだけの殺風景な部屋である。

ガイドさんの案内で、マルコム王記念室、王たちの寝室、ベッドの天蓋にエリザベス女王を含む11人の子供の名前が刺繍してある母后陛下の寝室、礼拝堂、一つ一つの調度は立派だが意外に質素な客間、肖像画が飾られ、白地に金の陶器、クリスタルガラス、銀食器のセットされた豪華な食卓のある食堂、ルーベンスの『果物市場』とネブカドネザル王の事跡のタペストリーのあるビリヤード室、地下室の武器庫、衣服、刀剣、時計、などの拝領品や、人形、馬車などの展示室なども回った。喫茶室に改装された古い食堂では、グラームズ・ウィスキーも売っていた。バス出発時刻が近づいた。裏のイタリア風庭園へ急ぎ、並木の入り口で、自称“three bonnie lassies”の写真を撮った。後日お送りし、お礼状と3人からクリスマス・カードが送られて来た。

ピーターパンの作者James Barrieの生誕地Kirriemuirを過ぎると、Blairgowrie辺りは延々とラズベリー畑が続く。手で摘まねばならないので、商業ベースに乗らず、農家にとっては引き合わない作物なのだそうだ。再びPerthで1時間のハイ・ティー。

明日のためにパンコママにお願いしておいた材料を、今晩のうちに下準備しておこう。ママが2羽の冷凍鶏を大きくさばき、私が一口大に切る。ピーマンは日本の4倍くらいの大きさだ。筍も切り、大蒜は皮を剝く。明日はカシューナッツと一緒に炒めればよいクィック・クッキング。彩りのよいフルーツゼリーも冷蔵庫の中。缶詰のパイナップル・ジュースが少し残ったのを見て、ママが、「tonicで割るとおいしいわよ。」と二つのコップにトニックを注ぎ、「vodkaを入れるともっとおいしいわよ。」と言って、私のコップに少々、彼女に方にはドブドブとウオッカを注いだ。

9月1日(木) 晴

昨日配布されたプリント6枚をアナが預かっておいてくれた。皆は宿題を提出している。

1時限目は、まずDavid DaichesとAnthony Burgesの不和について。次にlistening用テープの紹介。頻度の副詞と否定の副詞。経済用語の説明。

コーヒーブレイクのとき、エンゾが、「シャーロット・スクエアでデイヴィッド・デイチーズの講演があるから、聴きに行かない?」と誘ってくれた。モナのレクチャーは“Rise

and Fall of the British Empire"だ。迷ったが、文芸講演にした。エンゾ、バート、ラファエリ、バーバラと私がアグネスの車で着いてみると、sold out。Margaret Drabbleも講演者だった。売り切れるわけだ。初めの3人は、講演終了を待って講師たちに話しかけてみると言い、バーバラはショッピングに行くと言う。私は美術館を訪れることにした。

National Scottish Museumは宗教画から現代まで、一通りのヨーロッパ絵画の流れが追えるようになており、ロンドンのNational Galleryを小規模にしたようなもので、スコットランド美術だけを集めたものではない。中で、ルーベンスの "The Feast of Herod" と題する大作の迫力はすごい。驚愕したヘロデ王の、青黒いJokanaanの首に食い入るような目の光りのすさまじさ。ヨカナンの生首を見たヘロデの驚きがテーマなのだろうか。ハワード城にあった "Herodias and Salome with the head of John the Baptist on a charger"はサロメの感情に焦点が合わせてあった。両方の絵で、サロメはルーベンス特有の赤いドレスを纏っており、目は似ているが、髪形は違う。表情も異なる。
Oscar Wildeはこの2枚を見たことがあっただろうか。

隣接するRoyal Scottish Academyはモダンアートの展示館で、この分野では今や芸術に国境はない。 額縁を箱型にして立体的に風景や人物を配置し、壁に掛ける半造形美術—小学生が夏休みの宿題で作る「水族館」めいたもの—は、日本の美術館では私は見たことがない。

シャーロット・スクエアに戻り、Georgian Houseを見学した。「ジョージ王朝風」とは、1714年(ジョージ一世)から1830年(ジョージ四世)の様式を指す。公開されている第7住宅は、18世紀に新市街ができた時に建てられた典型的な市民の住居で、所有者が豊かだったことを物語っている。

集会室で、みんなが号外に集まって騒いでいた。覗くと、飛行機事故。この時、愚母は自分の毎日で手一杯で、娘の日程は念頭から消え失せており、迂闊にも、帰国するまで全く気が付かなかったのだが、ブラウン大学のサマースクールに行っていた娘は、まさにこの大韓航空のフライトで帰国する予定であった。NYで予定を4日遅らせたので、撃墜を免れたのだった!!!思い出す度に、身が縮み、乗り合わせなかった幸運に感謝している。

3時限目はヴィデオで、 "TV Advertising"。

(1) Scottish TVの広告が36個続けて流され、プリントのグラフを見ながら、それぞれの広告が何という商品の宣伝のためか、その品物は何かを書き込む。特に注意すべき3個の広告については、特記する。転換が速いので、よほど注意していないと間違える。これでおしまいかと思うと、チョコレートと酒類の広告がいくつずつあったか、などと問われ、大いにまごついたが、クラスメートはスイスイ答えていた。

(2) "Advert 5"の中の略語を当てる。例: TBS = Trust Saving Bank; DIY = Do It Yourself(これは日本でも流行っている); RSM = Regimental Sergeant Major; SRN = State Registered Nurse; HGV = Heavy Goods Vehicleなど。

(3) 別のCMを見て、巧妙に隠された20の誤りを捜し出す。

(4) 五つの質問に二人一組で答える。

教室へ帰り、ヴィデオ教材の中から、例えば以下のような注意すべき文法事項、語義などについて指摘があった。

dress (a turkey)毛をむしったり、皮をむいて、下拵えする
flay = skin you alive = take the skin off
once in a blue moon = very rarely

blue baby＝青色児
Mellow Birds＝(i) a maker of coffee　(ii) girls
a dollop of＝a small amount of

サマースクールがほぼ終わり、カットして、さっぱりして帰宅。夕食後、Farewell Party用の炒めものにかかる。中華鍋がないので、大きなフライパン二つを使い、一つをパーティに、もう一つはパンコ家に。(翌日のパパのランチは中華弁当になった。)ママは料理と私を車に乗せ、Kenneth Mackenzie Houseの台所まで来て、世話を焼いてくれた。EUSとSpoken Englishの合同のpotluck supperで、先生方も見え、わいわいがやがや一言ずつお礼を述べる。アナと彼女のボーイフレンドが、「写真撮って」とやって来た。「アキーコ、この料理は日本料理?」と聞かれる度に、"Japanized Chinese dish"と相手を面食らわせたりしているうちに、珍しかったのか、すぐになくなってしまった。ゼリーも、"How beautiful!"と喜んでくれて、まもなく消えた。イタリアのパスタやヌードル、スコットランドのサラダ、ベルギーのクッキーやで満腹になったのが10時近く。食器洗いをすませてから、皆でお城に出かけることになった。最後まで残った私たち数人を、Mr. Gibsonは車に乗せてくださった。ジリーはバイク。プリンセス通りの花時計で落ち合う約束だ。DHTの駐車場に車を置き、歩いて行くと、どこから湧いたのか、人、人、人。The Moundを下って、花時計で皆と合流できた。闇夜に白、緑、ピンク、青、黄色の光が、シュルシュルとカーヴを描いて昇ったり、流れたり、パンパンと菊花の大輪が散ったり。花火の華の饗宴に群衆はエキサイトし、波のように歩き回り、はぐれないようにするだけで大変。お城は投光照明で白くポーっと浮き上がっていた。真下の公園の野外ステージでは、ヘンデルの『王宮の花火』(1749年に前年のオーストリア継承戦争終結のアーヘン和平条約を祝って作曲)を演奏している。そちらへ近づこうとしても、柵付近は身動きもできぬ人だかりで、楽士たちが、やっと群衆の肩越しに見えるだけだ。マイクを通すため、オーケストラもぼやけて聞こえる。「王宮の花火」を見ながら『王宮の花火』を聞いて、誰も彼も興奮しきっている。チャイコフスキーの『序曲』も奏された。昨夏が第1回で好評だったこの企画の後、Edinburgh Festivalはあと1週間続くが、華麗な花火と音楽が、私のエジンバラ滞在のフィナーレを飾ってくれた。

ギブスン先生行きつけのロイヤル・マイルのパブの中は興奮覚めやらぬ人達で満員だ。(入り口のパネルには、"RU 18?")外のベンチで最後の宵の名残を惜しみつつ、ジリーも一緒に語り合った。レモネードの冷たさが快かった。我が子の年齢のクラスメートたちに交じり、自分もその年齢であるかのような錯覚が起きていた。

1983年10月8日午後8時よりNHKテレビで放映されたカナダ放送協会提供の「人間と音楽」(語り手メニューヒン)では、番組終了直前に、今夏のエジンバラ城の花火とコンサートの実況ヴィデオが映され、懐かしさも一入であった。

9月2日(金)　曇のち小雨

3週間は瞬く間に過ぎ去り、「最後の授業」になった。僅か3週間の知己とは思えないほど仲良くなっていた。宿題の返還の後、フェビアンヌとエンゾが、ジリーにお花を贈ろうと発案し、白菊、黄菊、紅薔薇の大きな花束を抱えて戻って来た。「このクラスの前に、Spanishのクラスを持ったけれど、あまり相性が良くなくて、うまくいかなかったわ。でも、このクラスは、本当に気持ちよく教えられたわ。」と嬉しそう。ややあって、私にかわいらしいカードが回ってきた。紅薔薇で囲まれた中に、"Edinburgh 2.9.83　As

a reminder of the happy times we spent together as a group in summer '83. EUS"とあり、全員のサインがある。誰かが、「あなたは、私たちのために、とてもよくしてくれたので、これは私たちみんなからのささやかな感謝のしるしなの。」と言い、他の子たちも口添えした。胸が詰まり、やっとのことで、「ただ一人のsenior studentで、特別のことをしたわけでもなく、こんな素晴らしいものを頂く理由はございません。It's too much."とお礼を述べると、皆"No!", "No!"と言ってくれ、涙が出そうになった。並んで記念撮影をした。

ジリーの案内でThe Thinなど2軒の本屋へ行き、LL教材のカタログを貰ったり、注文したりした。テープ教材はなぜか店頭になく、すぐには入手できない。Muriel Spark: The Prime of Miss Jean BrodieとSalman Rushdie:Midnight Childrenを求めた。

Royal Scottish MuseumへGuide Text(日本観光通訳協会発行)を届け、12時5分前に送別会の会場のHill Placeへ。セミナー主任の閉講の辞の後、ワインを手に互いに挨拶を交わし、一人、二人と去って行く。レジナはすでに昨日帰国した。フェビアンヌとバートと一緒にアグネスの車でプリンセス通りの裏のサラダ・バーへ行き、最後の昼食を共にした。小雨が降り始めた...握手は別れの涙雨の中で!

パンコママは、「今晩の夕食は払わなくていいわよ、because it's your chicken.」なるほど、昨日のチキンを余すところなく調理してある。パンコさんのパンもこれが最後だ。この一家の国籍は何だろう?パパに尋ねてみた。"Polish?" "No." "Czech?" "No." "English?" "NO! SCOTTISH!"政治家でもなんでもない一般のスコットランド人の誇りと対イングランド感情を推察させるその怒ったような声の大きかったこと!

荷物を纏める。私の家族はいつでも喜んで泊めてくださるし、次回は私を客として泊めてくださるとのこと。ステファーニャとジョンが、「明日の朝はもういないの?」と何遍も尋ねては、悲しそうにしている。「ごめんね。帰らなくてはならないの。でも、またいつか来るわ。あなたたちも、日本に来てね。」一家の記念写真を撮った。"Good Night!"

汽車は11時30分発。朝食用にとパンコさんの焼いた心づくしのパンとチーズをバッグに収め、夜勤のパパを送り出し、11時前に、ママの車で駅まで来た。力持ちママは、重いスーツケースを軽々とNight Scotsmanの個室へ納めてくれた。抱きあって別れのキス——映画のシーンのように。英国人は、会った時も、別れる時も、抱擁してキスという異文化体験を繰り返した。

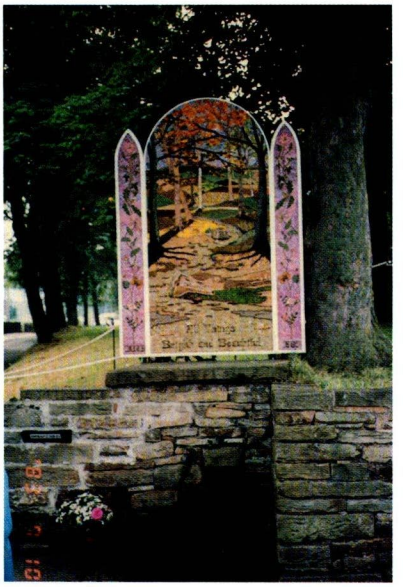
寝台車の上段は陽気な老婦人。車掌にmorning teaを頼む。無料が嬉しい。エジンバラでのあれこれや、英国での8週間すべてが走馬灯のように夢と現の間を揺れて回り、眠っているような、寝付けないような。汽車はゆっくり走る。9月3日(土)朝6時過ぎにロンドンに着いた。ゆっくり紅茶とクッキーで休み、7時過ぎに車外へ出た。8週間前、不安と期待で降り立ったロンドンから、満たされた思いで飛び立てる。

さて、空港で荷物を計ると、重量オーバーだ。係官は超過分を、前に並ばれた高嶋稔先生ご令息の分として通してくれた。

バーレインの待合室で1時間待っていた間、妙チキリンな若い日本人が話しかけてきた。「オレ、あの人たちの写真撮りてえんだ。頼んでくんない?」「あの人たち」とは、イスラム教徒の家族。仕方がないので、父親らしい人に頼むと、自分はよいが、奥さんと娘さんは写真に撮ってはいけないと言う。「そうだな。みんな顔かくしてんもんな。見られたくねえんだナ。」次に自分の職業を当てて見ろと言う。「自由業?」(自由業にもいろいろあらアな。)埼玉の区役所に勤めていて、ロンドンでは、ヒデートコに滞在し、トイレを

探すのに２時間かかったんだって。「アンタ、職業はあんの?」「あるわ。」「何？」「当ててみて。」「わかんねえ。」「教員。」「学校のせんせーか。どーりでボンヤリしてると思った。」帰宅後息子は、そいつはスリに違いない、と心配してくれたが、無事であった。

充実した研修をさせて頂き、心より御礼申し上げます。研修中に出会った全ての方々、本当にお世話になり、ありがとうございました。



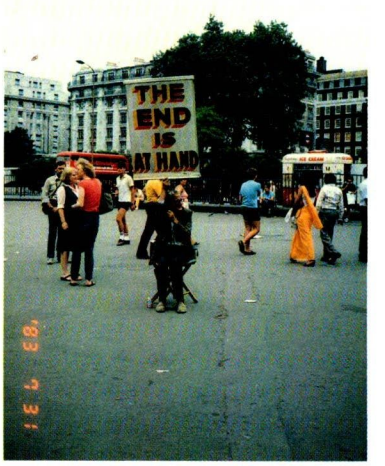
［写真 1］「井戸の花びら装飾」
シェフィールド市郊外
7月9日

［写真 2］「トップ・ウィズンズとハワースの荒野」
『嵐が丘』のモデルとされた農家跡と2本のもみの木
7月12日

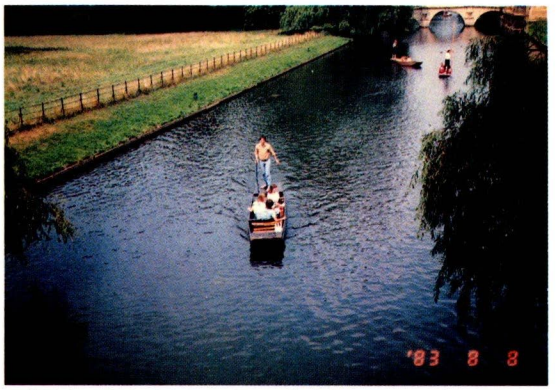
［写真 3］「グリーンヘッド・ギル」
湖水地方グラスミア湖近く
7月14日

［写真 4］「エイヴォン河とホーリー・トリニティ教会」
ストラトフォード・オン・エイヴォン
7月18日

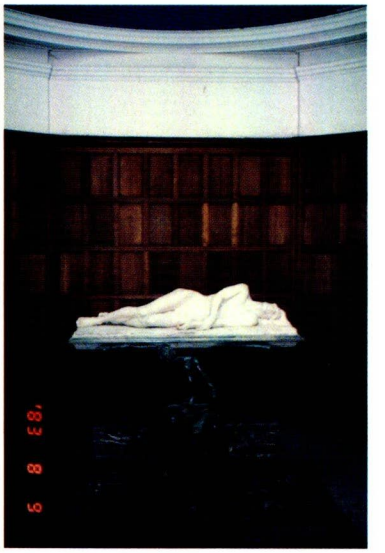
［写真 5］「ハンプトン・コート正門」
7月29日



［写真 6］「スピーカーズ・コーナー」
『終末近し』
ハイドパーク、ロンドン
7月31日



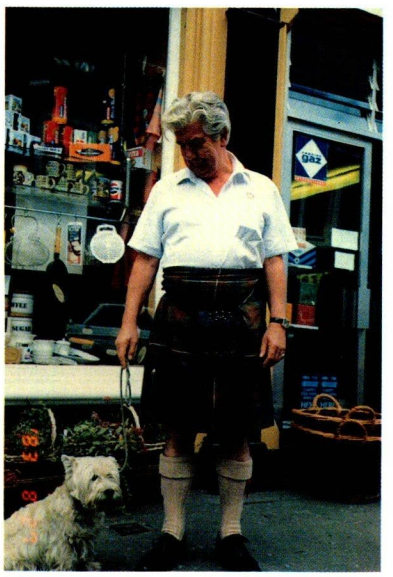
[写真 7] ケム川のパント舟とトリニティ橋
ケムブリッジ
8月8日



[写真 8]「シェリー記念碑」
ユニヴァーシティ・コレジ、
オックスフォード
8月9日

[写真 9] ダンファームリン僧院の「KING ROBERTの塔」
スコットランド
8月27日

[写真 11]「ネス湖とウルクハート城址」
スコットランド
8月28日



[写真 10]「ローランド紳士と
ハイランド・テリア」
ダンケルド、スコットランド
8月27日

[写真 12]「山々に響くバグパイプ」
グレンコー、スコットランド
8月28日